第４節　第 31 次調査（平成 25 年度、PSK ９）

（1）概要

31 次調査地の選定については、微高地１北西部における 30 次調査の成果を受けて、建物分布の南西限を確認することや、開法寺伽藍推定地との関係を把握する目的で、同寺伽藍推定地の東側において実施することになった。微視的には、調査地点は微高地の頂部から北側の鼓岡神社の丘陵との間に想定される低地へ向かう緩斜面に相当すると考えられる。

調査トレンチは、東西方向の 31-1･2 トレンチを中心にして、南北のトレンチを組み合わせた６本を設定した。

調査の結果、７世紀後葉から 11 世紀前葉までの建物遺構と開法寺伽藍東側において条里地割の方位を示す南北方向の溝を検出した。建物では、31-4 トレンチの大型建物 SB2022 ～ 2024 が特筆される。これらは、８世紀後半から 11 世紀前葉の時間幅の中で同一地点において建替えられたものとみられる。本次調査において建物主軸方位を明らかにすることはできなかったが、33 次調査において東西棟の庇付の大型建物であることが明らかになった。開法寺伽藍東側の 31-1 トレンチ西部では、８世紀前葉から９世紀前葉に機能したとみられる南北方向の溝 SD1001 を検出した。微高地１北西部における 30 次調査の東西溝 SD1002・1004 と比較して、条数や規模等の違いがみられるが、微高地１上面の建物群の区画等に伴う遺構であると考えられる。

また、SB2020 等の正方位を基準とした７世紀後葉から８世紀初頭の建物や大溝 SD1062 を検出するなど、国府設置前夜の建物群の様相についても資料を得た。

現地調査は平成 25 年 10 月より開始し、平成 26 年３月には全ての記録作成及び埋め戻し等の原状復旧を終了し、現地を撤収した。また、調査途中の平成 26 年２月８日、９日には現地説明会を開催し、両日で約 300 人の参加を得た。

（2）層序（図 86 ～ 88）

調査地の現況は全て水田として利用されていた。水田に伴う 0.2 m程の耕作土（０層）下位には、旧耕作土とみられる灰黄褐色シルト（基本層序１層）が全域にみられる。１層中には、中世後半から近世の遺物を含み、上位より鉄分の沈着が著しい。

１層の下位には、10 ～ 14 世紀の遺物を包含する灰色シルト（基本層序２層）が広範囲に認められる。分級が悪く下面の凹凸が激しいことから耕作土と考えられる。層内の出土遺物は、10 世紀から 12 世紀の遺物が含まれている。基本層序２層の灰色シルトの層厚は、南部の 31-4 トレンチで薄く北部 31-5 トレンチに移るにしたがって厚くなっている。これらは、31-4 トレンチ付近は微高地頂部、31-5 トレンチは微高地北側緩斜面に相当するという微地形を示していると考えられる。微高地頂部に相当する 31-4 トレンチ付近の２層は、近世以降の耕作土である１層の形成に伴い削平された結果、薄層を呈していると考える。

31-2 トレンチ西部では、２層とした基本層序１層に対応する耕作土の下位に、３層とする淡灰色シルトが局所的に堆積している。層内には、細かな黄褐色・灰色粘土の偽礫と炭化物粒、土器・瓦等の遺物を含んでいる。また、31-1 トレンチの SD1001 の延長部とみられる SD2001 は、本層の下位から掘り込まれている。層相から判断して整地土の可能性が高いと考えられるが、本次調査段階で明確にすることができず、これらの事実関係は33次調査時に明らかになった。

基本層序３層は、弥生時代以降の基盤層となる黄褐色シルトである。30 次調査の 30-1・3 トレンチでみられた検出面直上の黒褐色粘土（30-1 トレンチ３a・ｂ層）は確認できない。３層下位には、灰褐色粗砂～細砂が存在している。サブトレンチなどの掘削において、縄文晩期後半の突帯文土器・サヌカイト片の出土をみている。これらは、微高地１の形成年代を示す資料と考えられる。

調査は、０～１層を重機で除去し、２層より下位を人力で掘り下げ、３層上面で遺構検出を行った。また、３層上面はマンガン沈着等の沈着が著しいため、更に３層を数センチ掘り下げ、再度遺構検出を試みた。

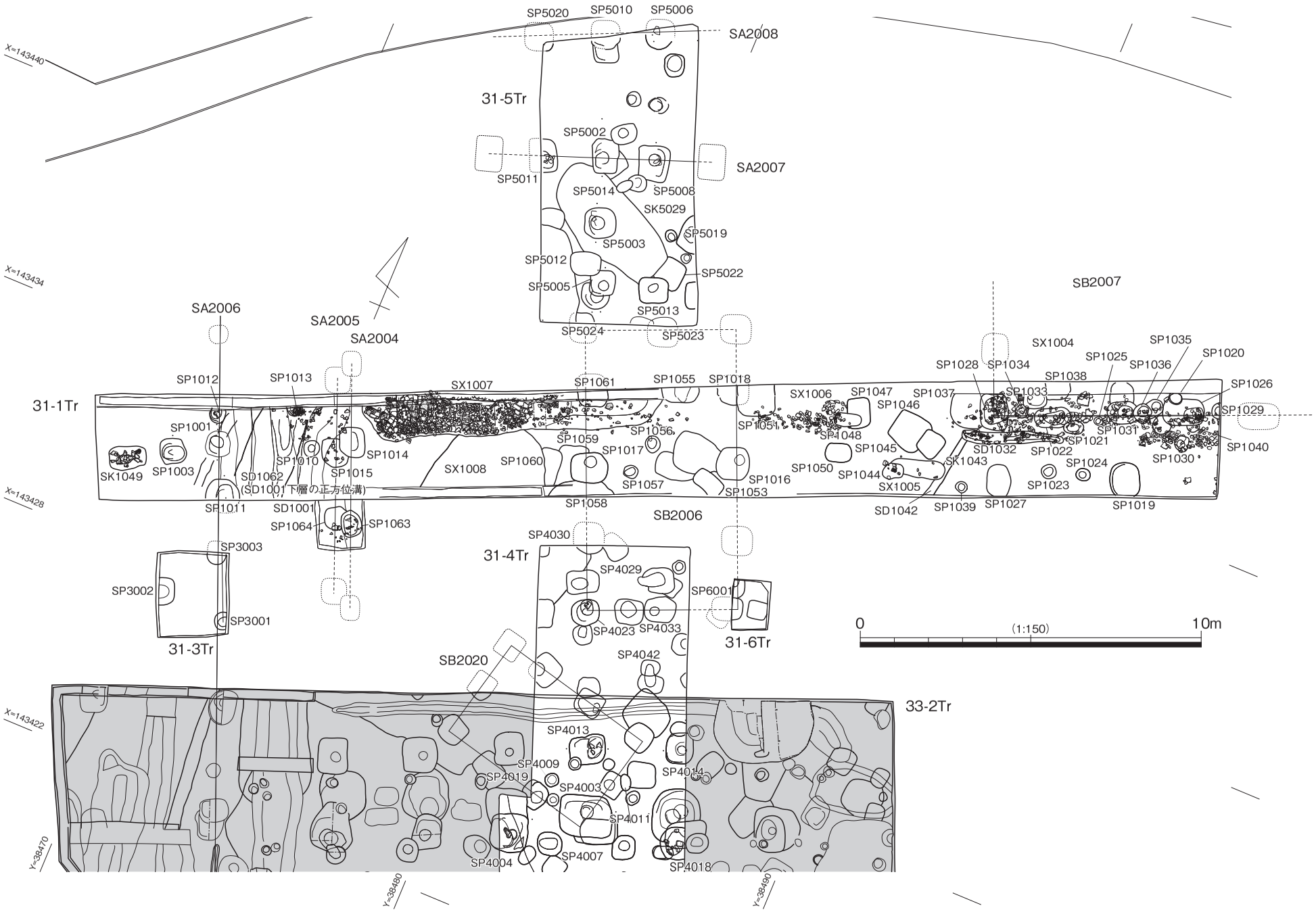
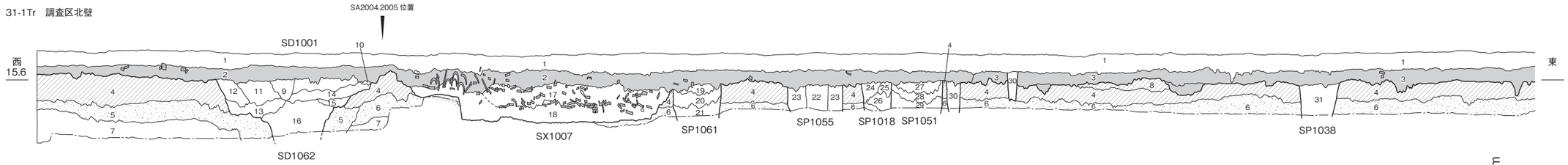


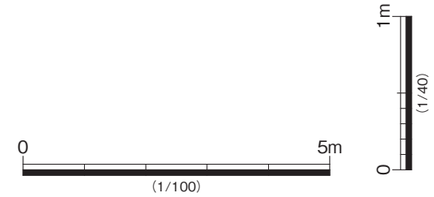
図 85　31 次調査平面図

図 87　31-1Tr2 層出土遺物

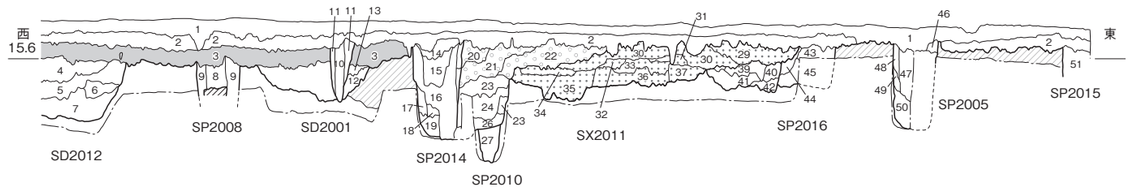
31-1Tr　調査区北壁



1　灰黄色シルト（旧耕作土，近世～）　基本層序１層
2　褐灰色シルト　基本層序２層
3　褐灰色シルト（粘性が強い）　基本層序２’層
4　明黄褐色粘土　古代以降の基盤層
5　暗灰色粘土　粗砂やや多く含む　縄文晩期包含層　古代以降の基盤層
6　灰褐色粘土　粗砂やや多く含む　縄文晩期包含層　古代以降の基盤層
7　灰色粗砂　　古代以降の基盤層
8　黄褐色シルトブロック（小）　基本層序３層上位
9　灰褐色シルト　小礫，褐灰色シルトブロック小やや多く含む　SD1001 上層
10　灰色シルト　小礫，褐灰色シルトブロック小やや多く含む　SD1001 上層
11　暗灰黄色粘土ブロック中　黄褐色粘土ブロック小やや多く含む　SD1001 中層
12　灰褐色粘土ブロック小　黄褐色粘土ブロック小やや多く含む　SD1001 中層
13　暗灰黄色粘土ブロック小　SD1001 中層
14　灰褐色シルト　褐色シルトブロック小やや多く含む　SD1001 下層
15　暗灰色粘土　SD1001 下層　8c 前半
16　黒褐色粘土ブロック大　黄褐色粘土ブロック大～中多く含む　SD1001 下位の正方位溝
17　灰褐色粘土ブロック（焼土・炭化物をやや多く，瓦片を多く含む）SX1007 上層
18　灰色粘土ブロック（焼土・炭化物をやや多く，瓦片を多く含む）SX1007 上層
19　灰褐色粘土ブロック（小）　SP1061（SB2006）裏込め土
20　褐灰色粘土ブロック（中）　SP1061（SB2006）裏込め土
21　黒褐色粘土ブロック（中）　SP1061（SB2006）裏込め土
22　灰黄色粘土ブロック（小）　SP1055 抜き取り穴
23　灰褐色粘土ブロック（中）　SP1055 裏込め土
24　褐灰色粘土ブロック（中）　SP1018（SB2006）
25　黄褐色粘土ブロック（小）　SP1018（SB2006）
26　黒褐色粘土ブロック（小）　SP1018（SB2006）
27　褐灰色シルトブロック（中）　SP1051
28　黄褐色シルトブロック（中）　SP1051
29　暗灰色粘土ブロック（中）　SP1051
30　黒褐色シルト（遺構埋土，基本層序２層上面からの遺構）
31　黒色シルトブロック（遺構埋土，基本層序２層下面からの遺構）

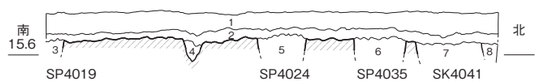


31-2Tr　調査区北壁



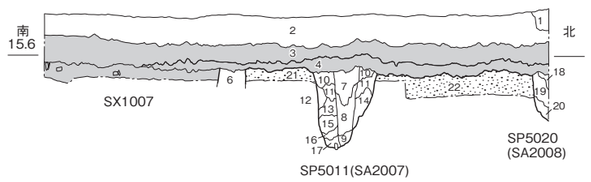
1　耕作土
2　灰黄色シルト（旧耕作土，近世～）　基本層序１層
3　淡灰色シルト
4　灰褐色粘土ブロック（小）黄褐色粘土ブロック（小）　SD2012
5　にぶい褐色粘土ブロック（小）　SD2012
6　褐灰色粘土ブロック（中）　SD2012
7　黒褐色粘土ブロック（中）　SD2012
8　褐灰色粘土ブロック（小）　SP2008 抜き取り穴
9　黒褐色粘土ブロック（中）　SP2008 裏込め土
10　黒褐色粘土　SP2003
11　褐灰色粘土ブロック　SP2003
12　褐灰色粘土（下層に砂礫含む）　SD2001
13　褐灰色粘土　SD2001
14　黄灰色シルト　SP2014 抜き取り穴
15　黄灰色シルト（黄褐色粘土ブロック（小）やや多く含む）　SP2014 抜き取り穴
16　褐灰色粘土ブロック（中）（灰色粘土漆喰か？）を葉理状に含む SP2014 抜き取り穴
17　黒褐色粘土ブロック（小）　SP2014 裏込め土
18　黄灰色粘土ブロック（中）　SP2014 裏込め土
19　黄灰色粘土ブロック（大）　SP2014 裏込め土
20　黄褐色粘土ブロック（中）　灰黄色粘土ブロック，小礫多く含む
21　黒褐色粘土ブロック（大）　黄褐色粘土ブロック，焼土塊多く含む
22　黒褐色粘土ブロック（大）　黄褐色粘土ブロック，焼土塊多く含む　21 層より焼土塊が多い
23　黒褐色粘土ブロック（中）　黄褐色粘土ブロック（中），焼土塊（小）多く含む　SP2010
24　黒褐色粘土ブロック（大）　黄褐色粘土ブロック（中），焼土塊（小）多く含む　SP2010
25　明黄褐色粘土ブロック（大）　SP2010
26　黒褐色粘土ブロック（中）　SP2010
27　黄灰色粘土ブロック（中）　SP2010 の下位のピット？
28　灰色粘土ブロック（中）　炭化物，異褐色粘土ブロック（小）多く含む
29　黄灰色粘土ブロック（小）　炭化物，異褐色粘土ブロック（小）多く含む
30　暗灰黄色粘土ブロック（小）　黒褐色粘土ブロック（小）多く含む
31　黄灰色粘土ブロック（小）　黄褐色粘土ブロック（大）多く含む
32　暗灰黄色粘土ブロック（小）　黄褐色粘土ブロック（小）多く含む
33　暗灰黄色粘土ブロック（小）　黒褐色粘土ブロック（小）多く含む
34　黄灰色粘土ブロック（小）　黒褐色粘土ブロック（小）多く含む
35　黒褐色粘土ブロック（中）　灰色粘土ブロック多く含む
36　暗灰黄色粘土ブロック（中）　灰色粘土ブロック多く含む
37　灰黄色粘土ブロック（中）　灰色粘土ブロック多く含む
38　暗灰色粘土ブロック（中）
39　暗灰黄粘土ブロック（中）　黄褐色粘土ブロック（小）多く含む
40　にぶい黄色シルトブロック（中）　黄褐色粘土ブロック（小）多く含む
41　褐灰色シルトブロック（中）　黄褐色粘土ブロック（小）多く含む
42　褐灰色シルトブロック（中）　黄褐色粘土ブロック（小）極めて多く含む
43　黒褐色粘土ブロック（中）　SP2016　正方位ピット or 土坑 7c
44　暗灰黄色粘土ブロック（小）　黄褐色粘土ブロック（小）多く含む　SP2016　正方位ピット or 土坑 7c
45　黒褐色粘土ブロック（小）　粗砂多く含む　SP2016　正方位ピット or 土坑 7c
46　黄灰色粘土ブロック（小）　黄褐色粘土ブロック（小）多く含む
47　暗灰黄色粘土ブロック（小）　黄褐色粘土ブロック（小）多く含む　抜き取り穴
48　暗灰黄色粘土ブロック（中）　黄褐色粘土ブロック（小）多く含む
49　明黄褐色粘土ブロック（中）
50　オリーブ褐色シルトブロック（小）

31-4Tr　調査区西壁

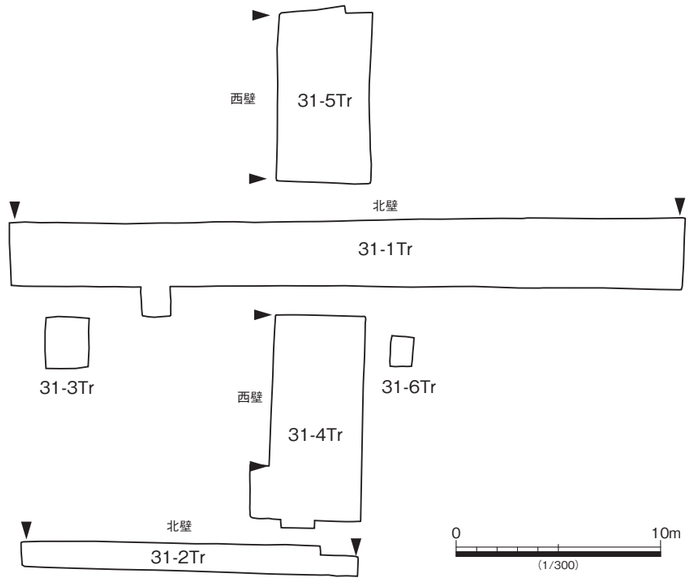


1　灰黄色シルト（旧耕作土，近世～）　基本層序１層
2　褐灰色シルト　基本層序２層
3　黒褐色粘土ブロック（中）　黄褐色粘土ブロック（小）多く含む　SP4019　7c 正方位ピット
4　灰黄色シルト　11c 以降の溝
5　黒褐色粘土ブロック（中）　黄褐色粘土ブロック（小）多く含む　SP4024　7c 正方位ピット
6　灰褐色粘土ブロック（中）　SP4035　8c 以降条里方向ピット
7　黒褐色粘土ブロック（大）　SK4041　7c 正方位大型土坑
8　灰黄色シルトブロック（中）　SP4040　8c 以降条里方向ピット　SK4041 を切る

31-5Tr　調査区西壁



1　現代耕作土　基本層序０層
2　灰色シルト　粗砂多く含む　近世耕作土　基本層序１層
3　黄灰色シルト　Mn 沈殿　粗砂やや多く含む　古代 10 ～ 11c 包含層　基本層序２層
4　黄灰色シルト　Mn 沈殿　粗砂をほとんど交えない　古代 10 ～ 11c 包含層　基本 26 層
5　褐灰色粘土ブロック（大）　焼土粒，炭化物，瓦片多く含む　SX1007 埋土
6　黄灰色粘土ブロック（小）　褐灰色粘土ブロック多く含む　SP5025 埋土
7　黄灰色粘土ブロック（小）　SP5011 柱痕
8　褐灰色粘土　黄褐色粘土ブロック（小）やや多く含む　SP5011 柱痕
9　灰色粘土　SP5011 柱痕
10　褐灰色粘土ブロック（小）　黄灰色粘土ブロック（小）多く含む　SP5011 裏込め土
11　灰色粘土ブロック（小）　SP5011 裏込め土
12　褐灰色粘土ブロック（小）　SP5011 裏込め土
13　灰黄褐色粘土ブロック（大）　SP5011 裏込め土
14　褐灰色粘土ブロック（小）　黄褐色粘土ブロック（小）やや多く含む　SP5011 裏込め土
15　黄灰色粘土ブロック（小）　黄褐色粘土ブロック（小）やや多く含む　SP5011 裏込め土
16　灰色粘土ブロック（中）　SP5011 裏込め土
17　黄灰色粘土ブロック（小）　SP5011 裏込め土
18　黄灰色粘土ブロック（小）　黄褐色粘土ブロック（小）やや多く含む　SP5020 裏込め土
19　褐灰色粘土ブロック（中）　黄褐色粘土ブロック（大）やや多く含む　SP5020 裏込め土
20　褐灰色粘土ブロック　SP5020 裏込め土
21　明黄褐色粘土　粗砂やや多く含む　古代以降　地山
22　灰褐色粘土　粗砂やや多く含む　縄文晩期包含層



2 層　灰色シルト（10 ～ 13c 遺物包含）

3 層　明黄褐色粘土

4 層　灰褐色粘土　粗砂やや多く含む　縄文晩期包含層

図 86　31 次調査各壁断面図

各層出土遺物

１～23 は、31-1 トレンチ２・３層（基本層序２層）から出土した資料である。１・２は土師質土器杯で、10 世紀中葉の資料とみられる。土師器椀（３）は、11 世紀末から 12 世紀初頭の資料と考えられる。６は灰釉陶器皿であり、猿投産の９世紀後半から 10 世紀初頭の資料と考えられる。７は灰釉陶器椀であり、美濃産の 10 世紀末から 11 世紀初頭の資料と考えられる。８は緑釉陶器皿であり、近江産の 10 世紀後半の資料と考えられる。

11 は、須恵器杯の見込みを利用した転用硯である。12 は、須恵器杯、若しくは皿の見込みを利用した転用硯であり、小片ながら内面が極度に磨滅する。軒丸瓦（13）は KH106 型式、軒丸瓦（14）は KH105 型式である。軒丸瓦（15）は KH110 型式。21 は瓦塼であり、粗粒の石英・長石を多く含む。22 は白色凝灰岩片である。

24 ～ 29 は、31-2 トレンチ２～３層の出土遺物である。28 は鞴羽口であり、被熱による内外面のガラス化が著しい。

30 ～ 33 は、31-4 トレンチの遺構検出中に出土した資料である。30 は土師器托状椀であり、10 世紀後半の資料と考えられる。32 は薄手の瓦であり、熨斗瓦の可能性がある。33 は安山岩製の円礫である。

34 ～ 41 は、31-5 トレンチの遺構検出中に出土した資料である。須恵器鉢（35）は篠産の 10 世紀後半の資料と考

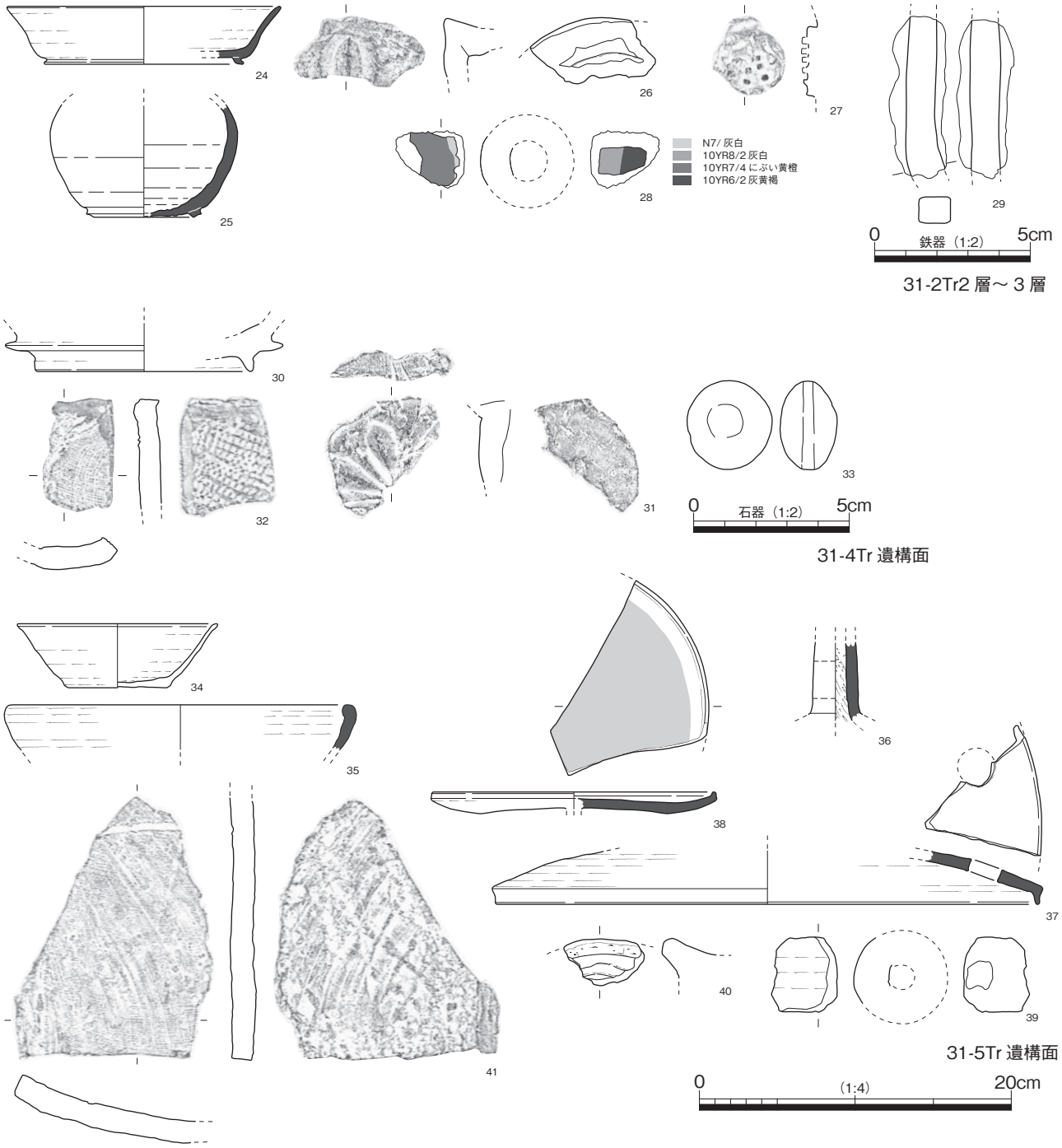


図 88　31-2・4・5Tr 出土遺物

えられる。38 は須恵器蓋の内面を利用した転用硯である。蓋（37）は大型の穿孔部がみられる資料である。還元焼成を受けた状態であるが、施釉陶器の火舎等の蓋の可能性も考えられる。39 は鞴羽口である。

（３）検出された遺構・遺物

SB2006（図 89）

31-1 トレンチ中央部を中心に検出した南北棟の掘立柱建物である。梁行２間、桁行４ 間の柱構造をもち、建物主軸は、座標北から 23゜西偏した条里地割に合致する南北棟である。大半の柱穴は上面の掘り下げに止め、南西隅柱の SP4023 のみ断ち割りを行った。全容が判明する柱穴は限られるが、SP1017.1016.4033 では、直径約 0.25 m の柱痕跡が確認されている。南西隅柱 SP4023 は柱抜き取りが行われているものの、下部に径柱痕跡が遺存していた。

42 ～ 45 は出土遺物である。42 は SP1017 の上面から出土した須恵器高杯の口縁部である。43 は SP6001 の上層から出土した須恵器鉢の口縁部。44 は SP4030 の上層から出土した須恵器横瓶の胴部片。45 は SP1016 上層から出土した土師器甕の口縁部である。

これらは、帰属層位が判明する資料とは言えないが、埋土の特徴も９世紀以降のそれと異なるため、須恵器の年代観から本建物は８世紀前半を中心とする時期に機能したものと推定しておく。

SB2007（図 90 ～ 96）

31-1 トレンチ東部で検出した掘立柱建物である。検出範囲で、梁行１間以上、桁行４間を確認し、建物主軸は座標北から 113゜西偏した条里地割の方向に合致する東西棟である。南側桁行の SP1026.1031.1022 は建物主軸に沿う形で掘り方の長軸が東西方向を指向しているが、南西隅柱 SP1028 のみ梁行である南北方向を向く。

SD1032 は部分的な検出に止まるが、南側の雨落ち溝と考えられる。基本層序２層を除去する検出作業中に、身舎及び軒推定範囲の上面で瓦溜まりを検出した。瓦の出土状態は、建物が倒壊した状況を想定できるものではないが、ほぼ身舎・軒の範囲に限って出土していることなどからみて、瓦葺の屋根構造をもつ掘立柱建物であった可能性を想定しておきたい。各柱穴は柱抜き取りが行われており、抜き取り穴には完形の土師器杯及び瓦片が投棄されている。

抜き取り穴の埋土には、焼土・炭化物が多く含まれることや、SP1026 周辺の検出面である３層上面の一部や、出土瓦の一部に被熱痕跡を留めるものがみられることから、火災等により廃絶した建物と考える。

46 ～ 49 は SD1032 から出土した土師質土器杯である。50 は SP1026 の上層から出土した須恵器杯。51･52 は SP1031 の抜き取り穴から出土した土師質土器杯である。53 ～ 59 は、南西隅柱の SP1028 からの資料であり、56 をのぞいて抜き取りから出土したものである。南側桁行 SP1031、南西隅柱 SP1028 抜き取りから出土した土師質土器杯（51 ～ 54）、須恵器杯（55）の特徴より、本建物は 10 世紀中葉に廃絶したものと推定しておきたい。

60 ～ 89 は､SB2007 上の土器･瓦溜まりである SX1004 から出土した資料である。土師質土器杯(60 ～ 64)､須恵器杯(65)は、10 世紀中葉から後葉の資料と考えられる。66 は調整・形態からみて京都系土師器杯と考えられ、９世紀後葉から末の資料と考えられる。67 は洛西産の緑釉陶器椀であり、９世紀後半の年代が想定される。土師質土器（68）は内面にタール状の付着物や破断面の打ち欠きによる再加工がみられるため、灯明皿として転用されたと考えられる。

これらの資料は、９世紀後半から 10 世紀後葉までの時間幅がみられるが、南側桁行 SP1031、南西隅柱 SP1028 抜き取りから出土した土師質土器杯（51 ～ 54）、須恵器杯（55）の 10 世紀中葉の年代観とも矛盾しない。

軒丸瓦（69）は KH106 型式、軒丸瓦（70）は型式不明である。軒平瓦（74）は KH203 型式で、凸面に細かな単位の縄目叩きがみられる。瓦塼 (75) は外面に平行叩きがみられる。平瓦 (80 ～ 89) は､細く長い単位の縄目叩きの資料 (80 ～ 83.85)、螺旋状叩きの資料（84)、平行叩きの資料（88)、細かな格子叩きの資料（87.89）が確認できる。丸・平瓦には残存率の高い資料が多い。

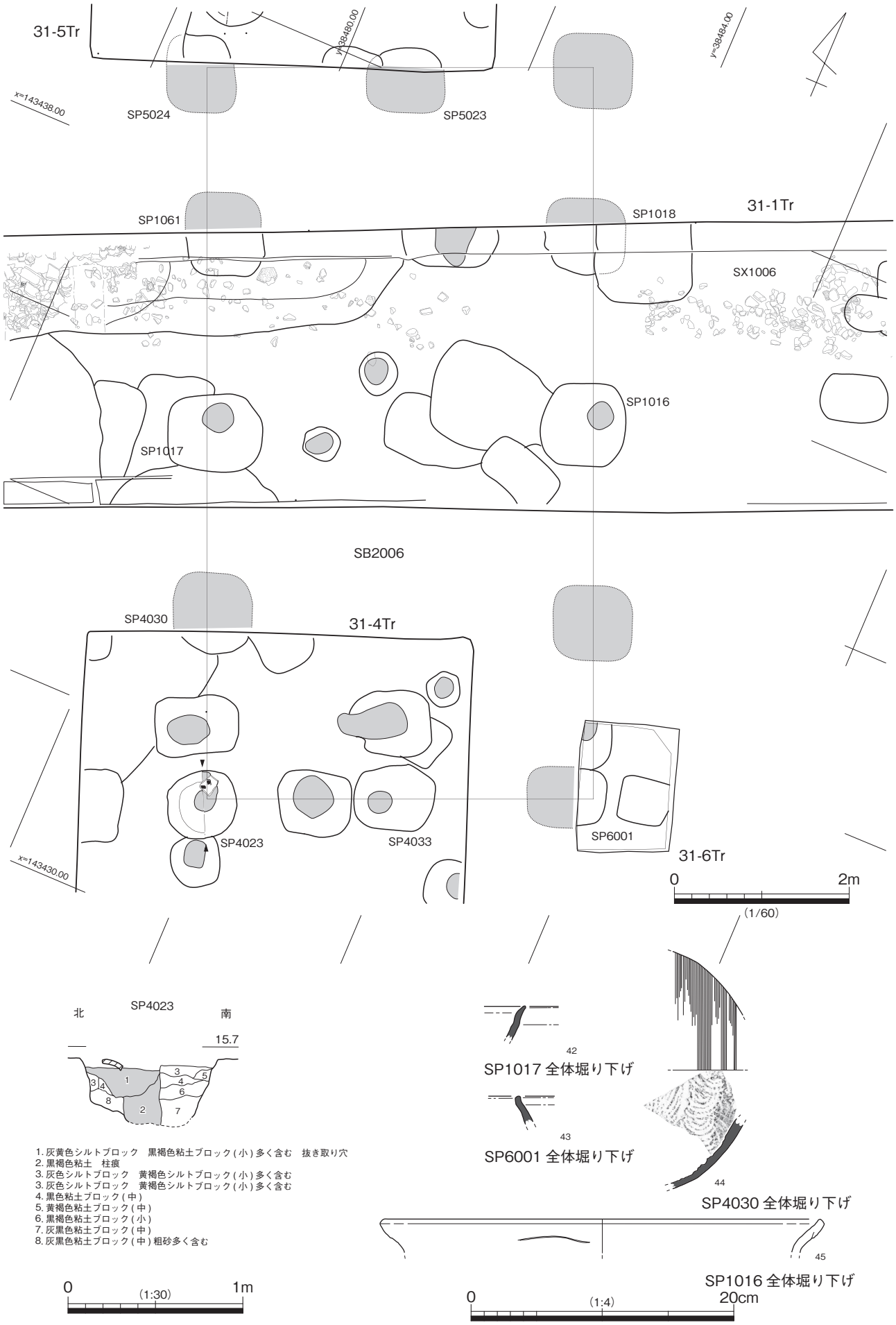


図 89　31 次・SB2006 平断面図及び出土遺物

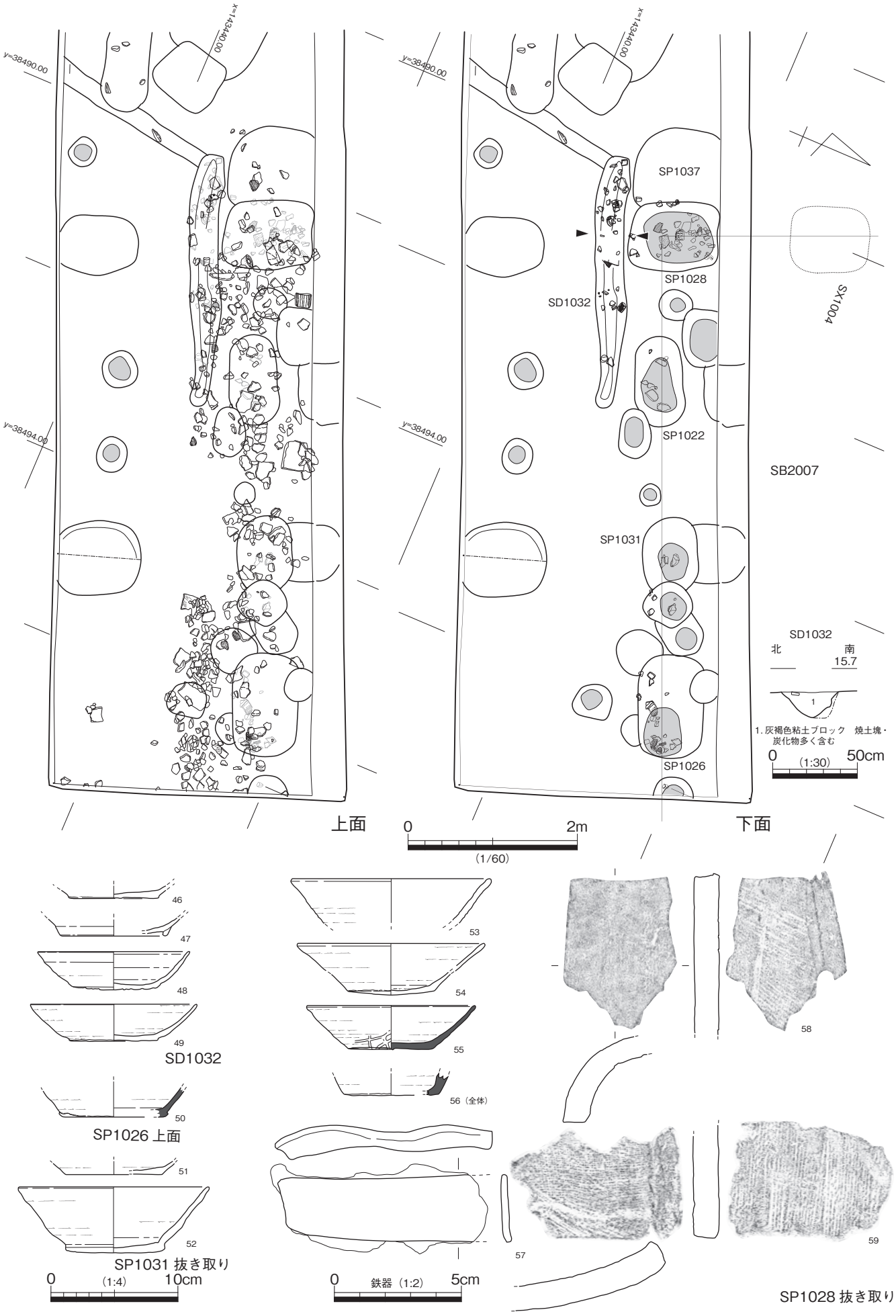


図 90　31 次調査区・SB2007 平断面図及び出土遺物

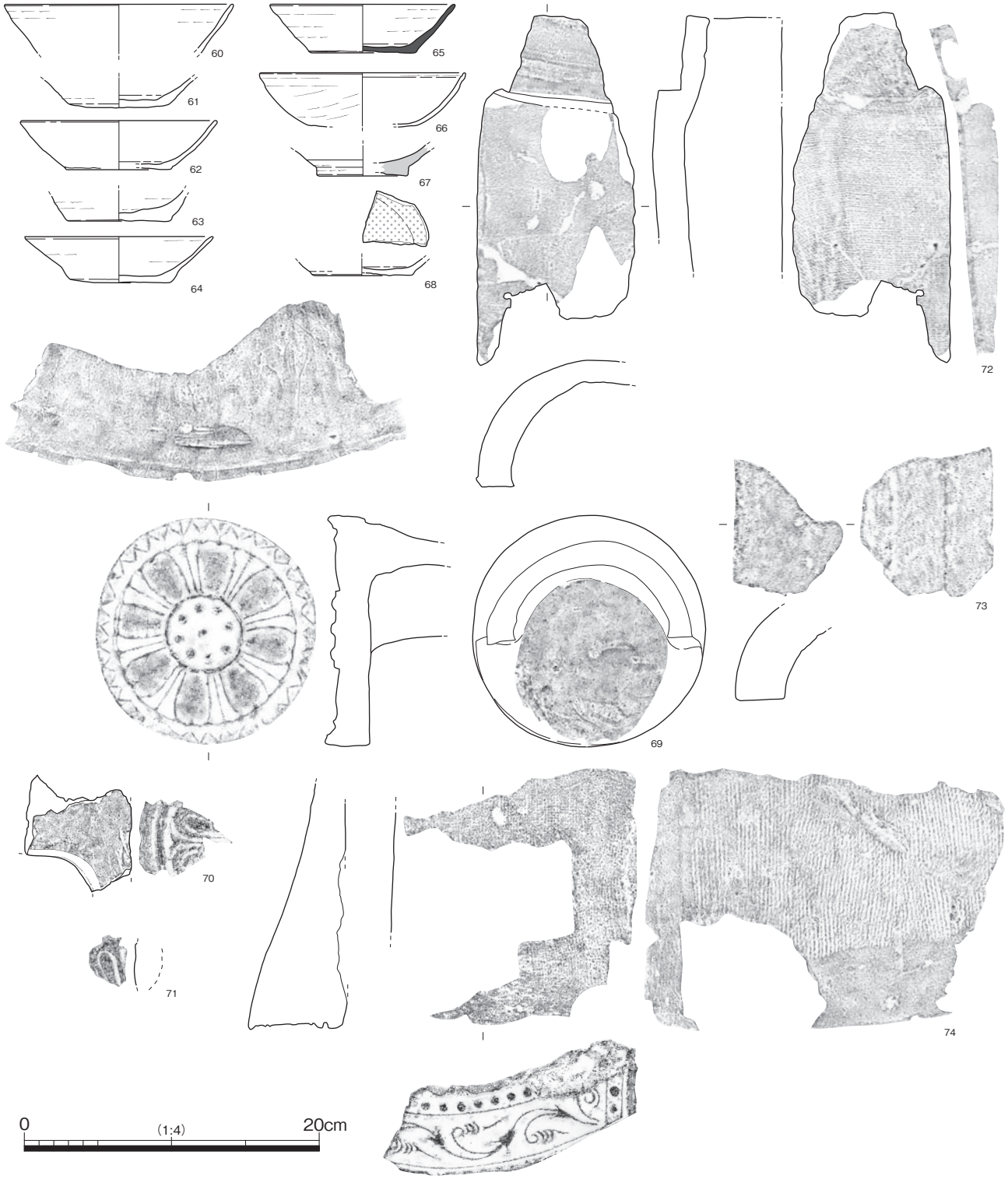


図 91　31-1Tr・SX1004 出土遺物 1

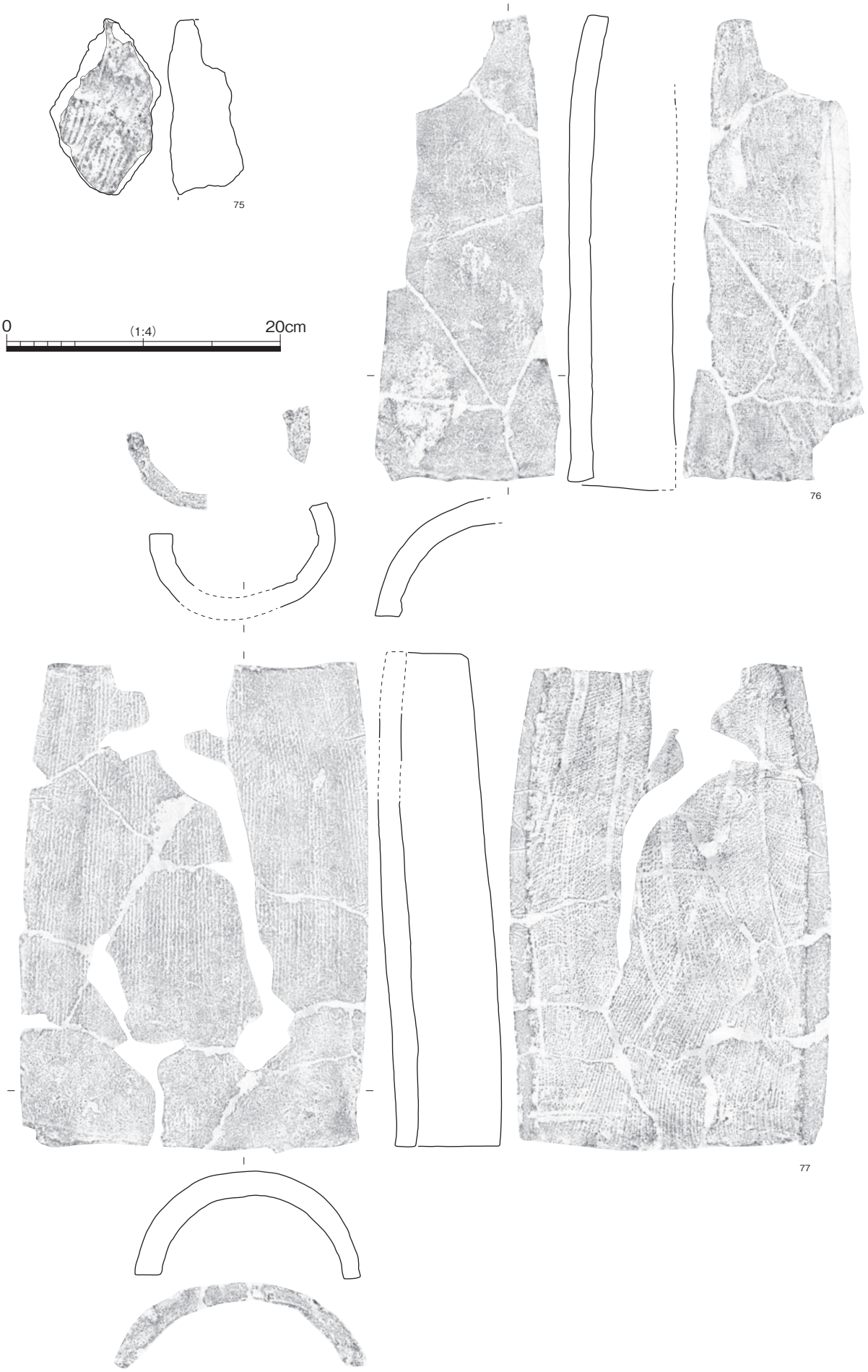


図 92　31-1Tr・SX1004 出土遺物 2

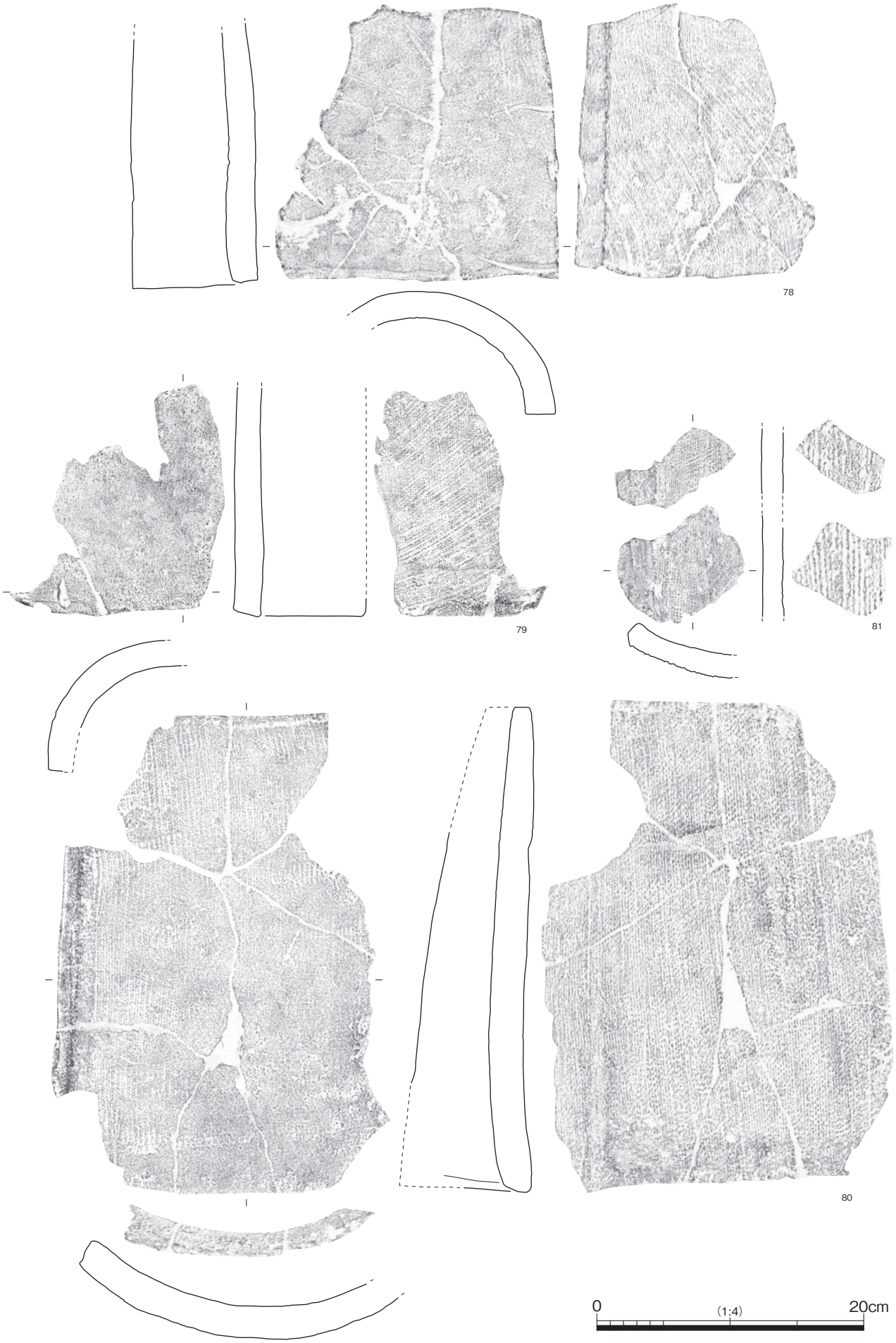


図 93　31-1Tr・SX1004 出土遺物 3

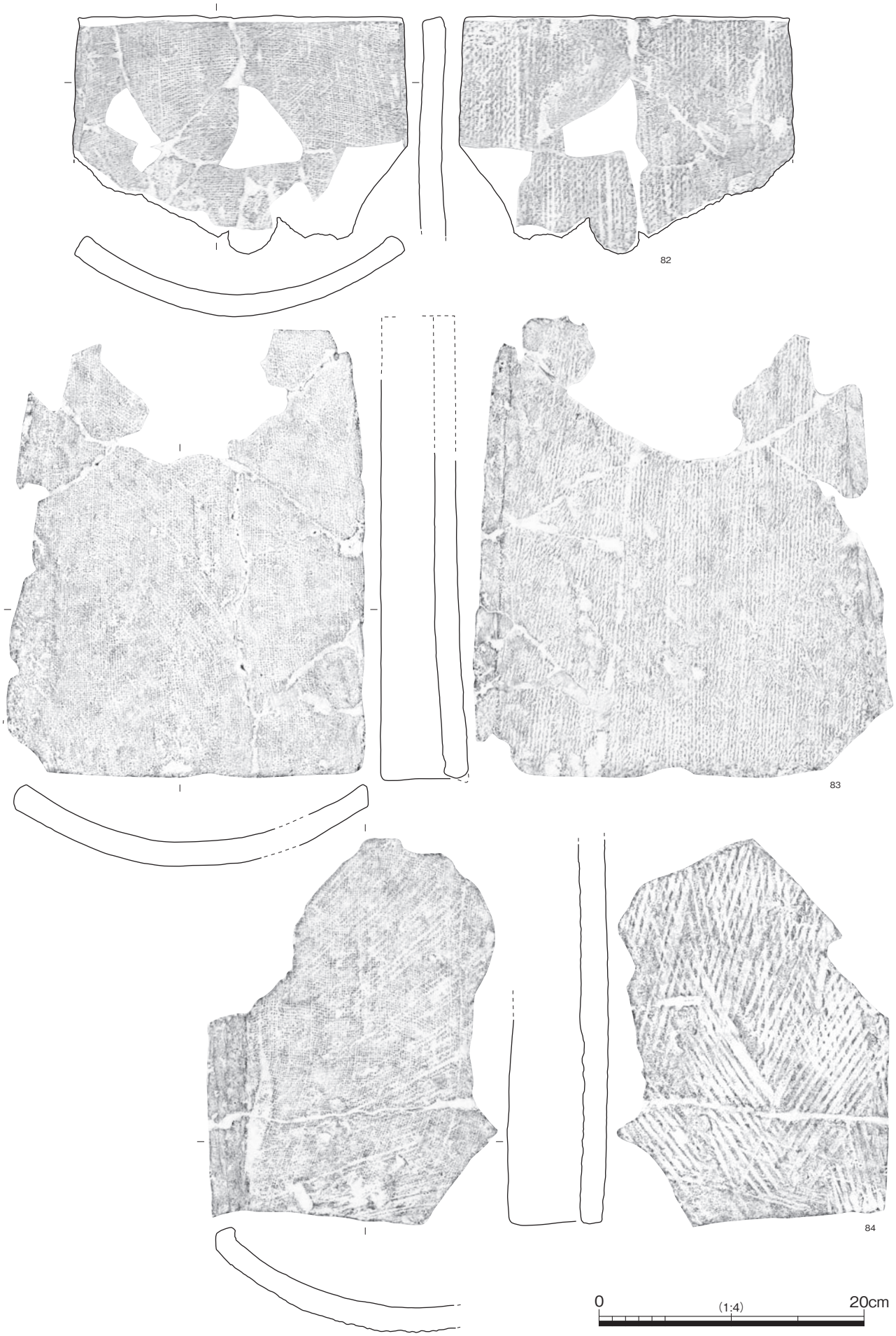


図 94　31-1Tr・SX1004 出土遺物 4

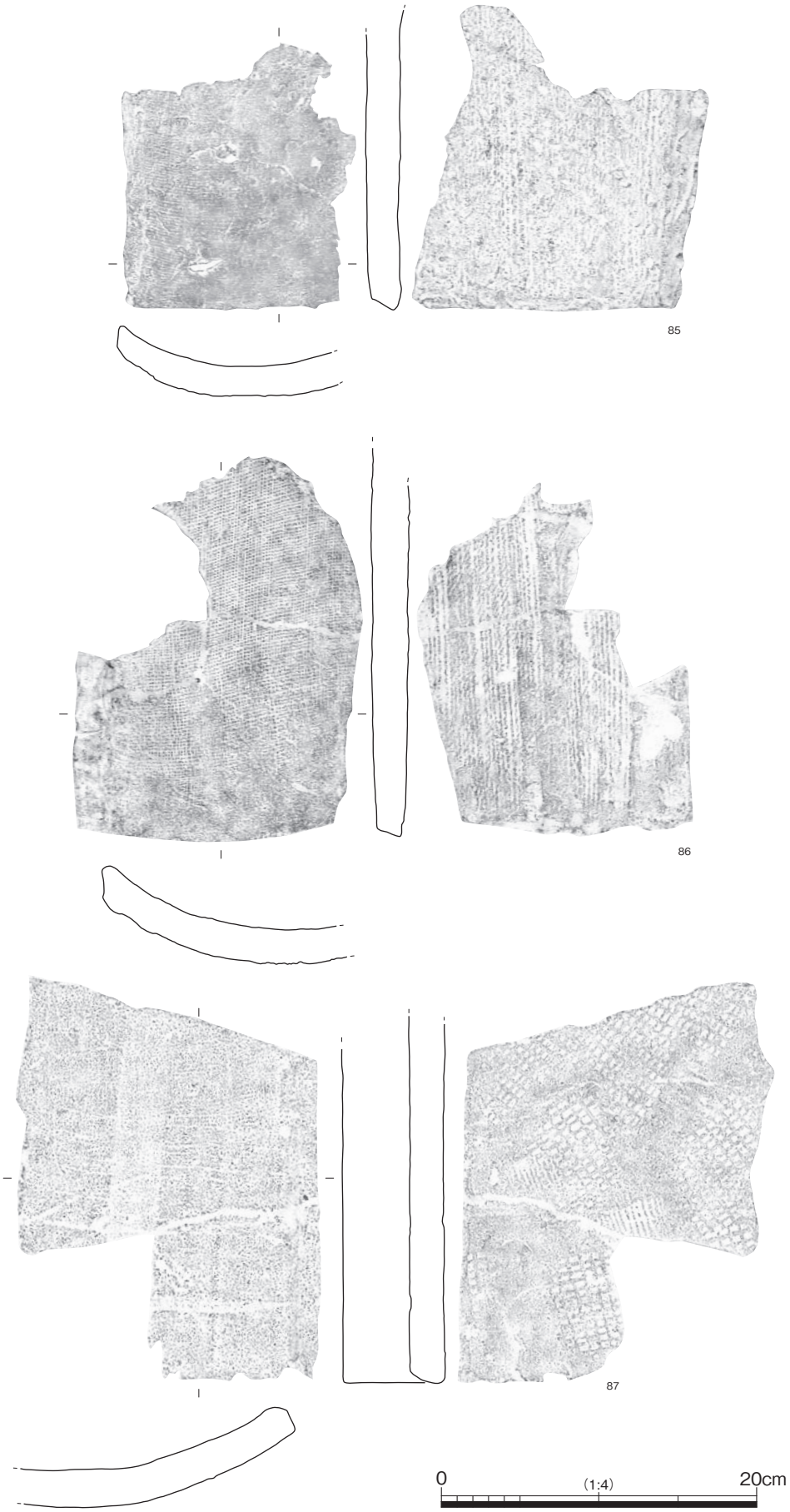


図 95　31-1Tr・SX1004 出土遺物 5

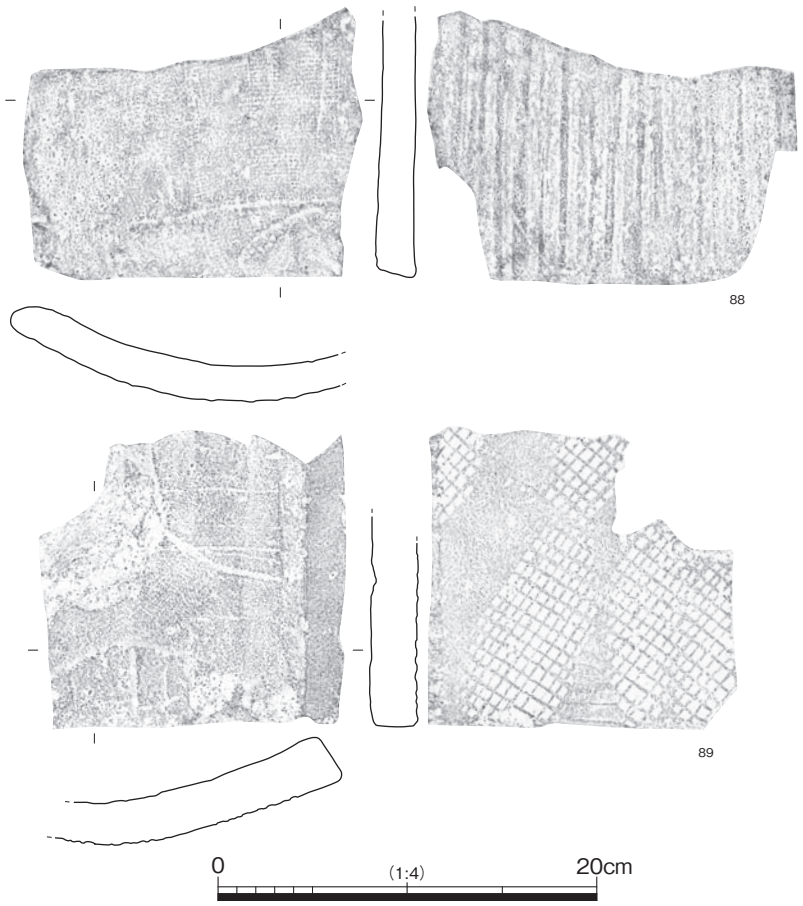


図 96　31-1Tr・SX1004 出土遺物 6

SB2022 ～ 2024（図 98）

31-4 トレンチ南部から 31-2 トレンチで検出した大型掘立柱建物である。重複した柱穴配置の状況から、本次調査の段階から同一地点で建替えが行われたと推定された。本次調査においては、建物規模及び構造、並びに主軸方位の確認に至らなかったが、33 次調査の 31-4 トレンチ周辺の面的な調査において、廂付の東西棟の大型建物であることが判明した。

調査の詳細報告は、33 次調査部分において行うこととし、各柱穴からの出土遺物の提示のみを行っておきたい。

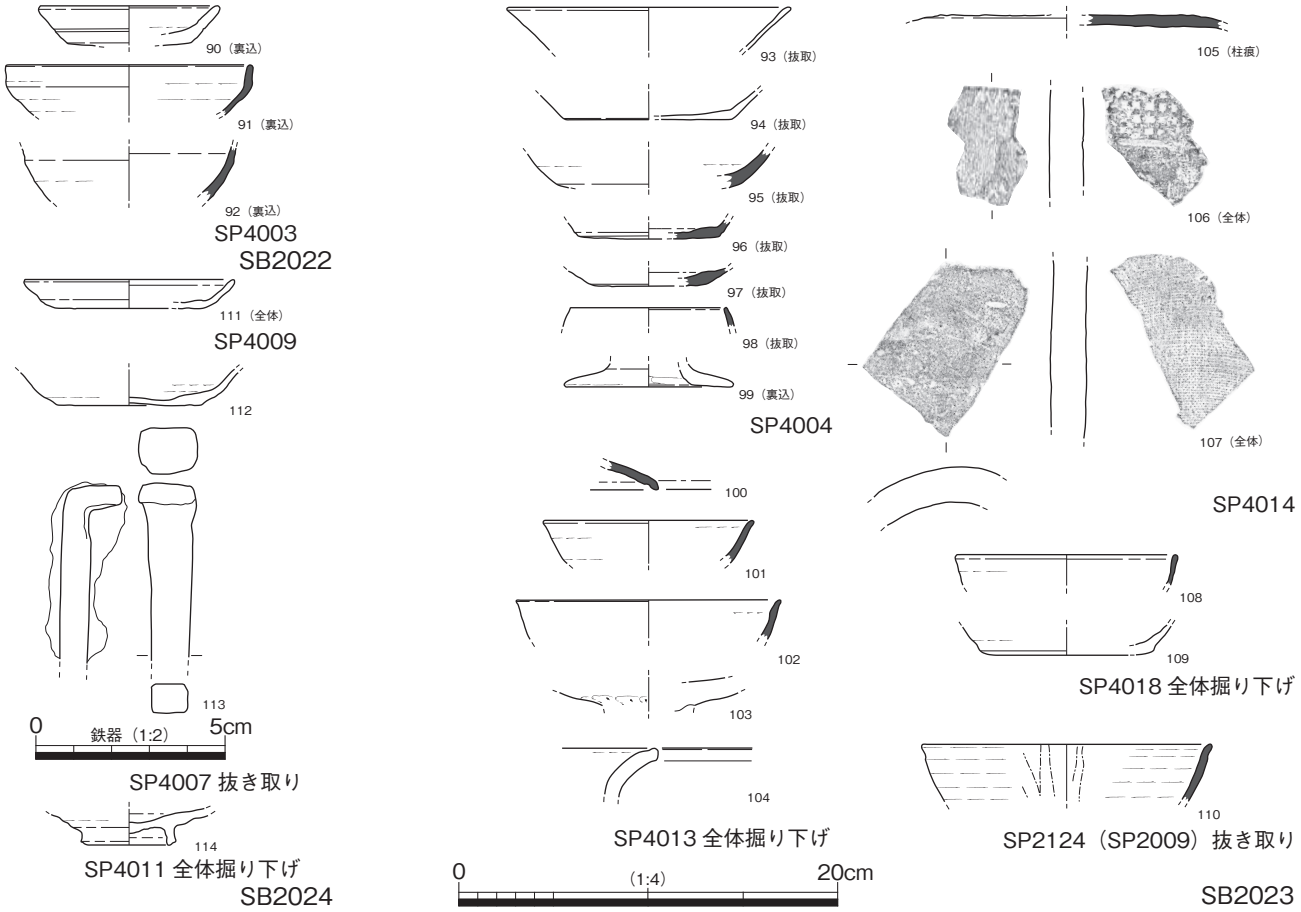


図 98　31-4Tr・SB2022 ～ 2024 出土遺物

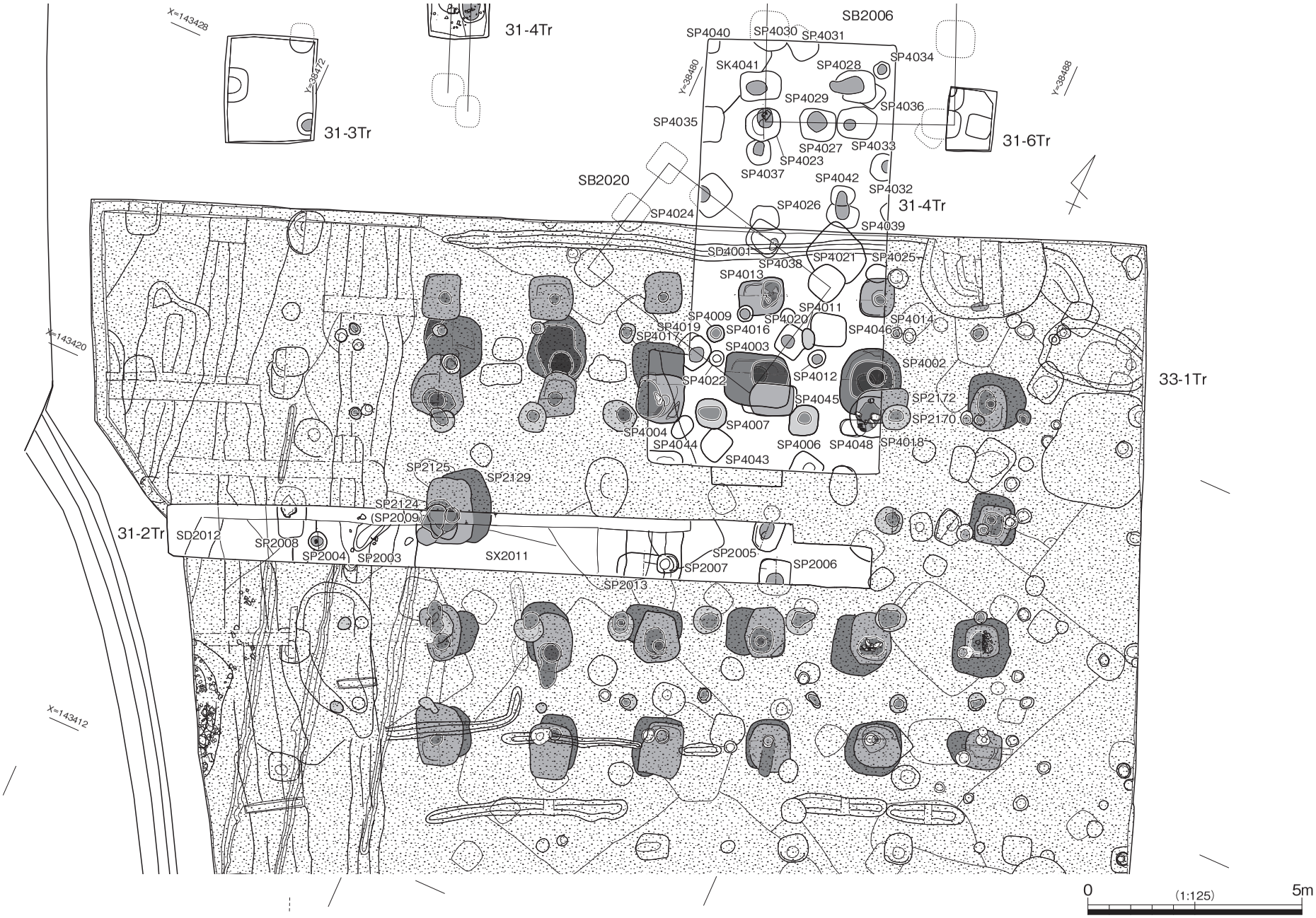


図 97　31 次調査区遺構平面図

SB2020（図 97.99-1）

31-4 トレンチ南部で検出した掘立柱建物である。梁行２間桁行４間以上で、建物主軸は座標北から 81°西偏する。大型建物 SB4050 に切られることや未調査地へ延びるため、桁行の柱間数は確定できない。各柱穴は、一辺が 0.5 ～ 0.7 mの方形を呈し、上面で柱痕跡が確認できるものが少ないが、断ち割りを行った SP4038 では、径 0.2 mの柱痕跡が確認された。掘り方から推定した柱間は、1.8 ～ 2.0 mとなる。

時期決定可能な出土遺物がみられないが、建物主軸方位からみて７世紀後葉の建物と推定しておきたい。

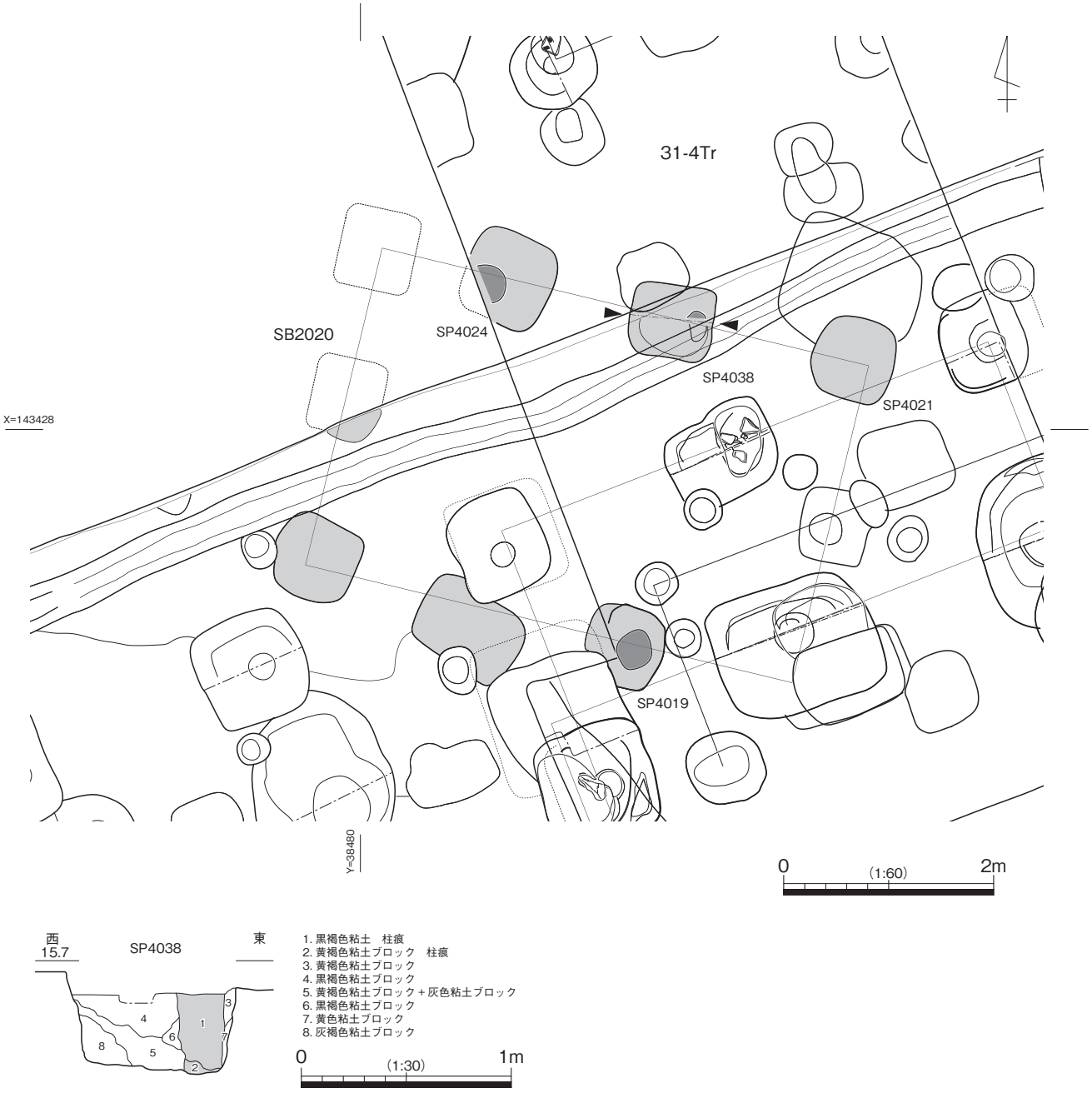


図 99-1　31-4Tr・SB2020 平断面図

SD1001.SA2004 ～ 2006（図 99 ～ 103）

31-1 トレンチ西部で確認した溝及び柱穴列である。これらは､一連の遺構として形成された可能性があることから、併せて報告することにする。

SD1001 は、条里型地割に合致した南北方向を採る溝であり、上面幅 3.8 m、残存深度 0.25 ～ 0.3 mを測る。位置関係からみて、31-2 Tr・SD2001 と同一溝になる可能性が高い。断面形は逆台形を呈し、埋没土は上・中・下層に大別することが可能であり、上層は中央部の小礫を多く含む灰色系シルト、中層は西側の灰褐色・暗灰色粘土の偽礫

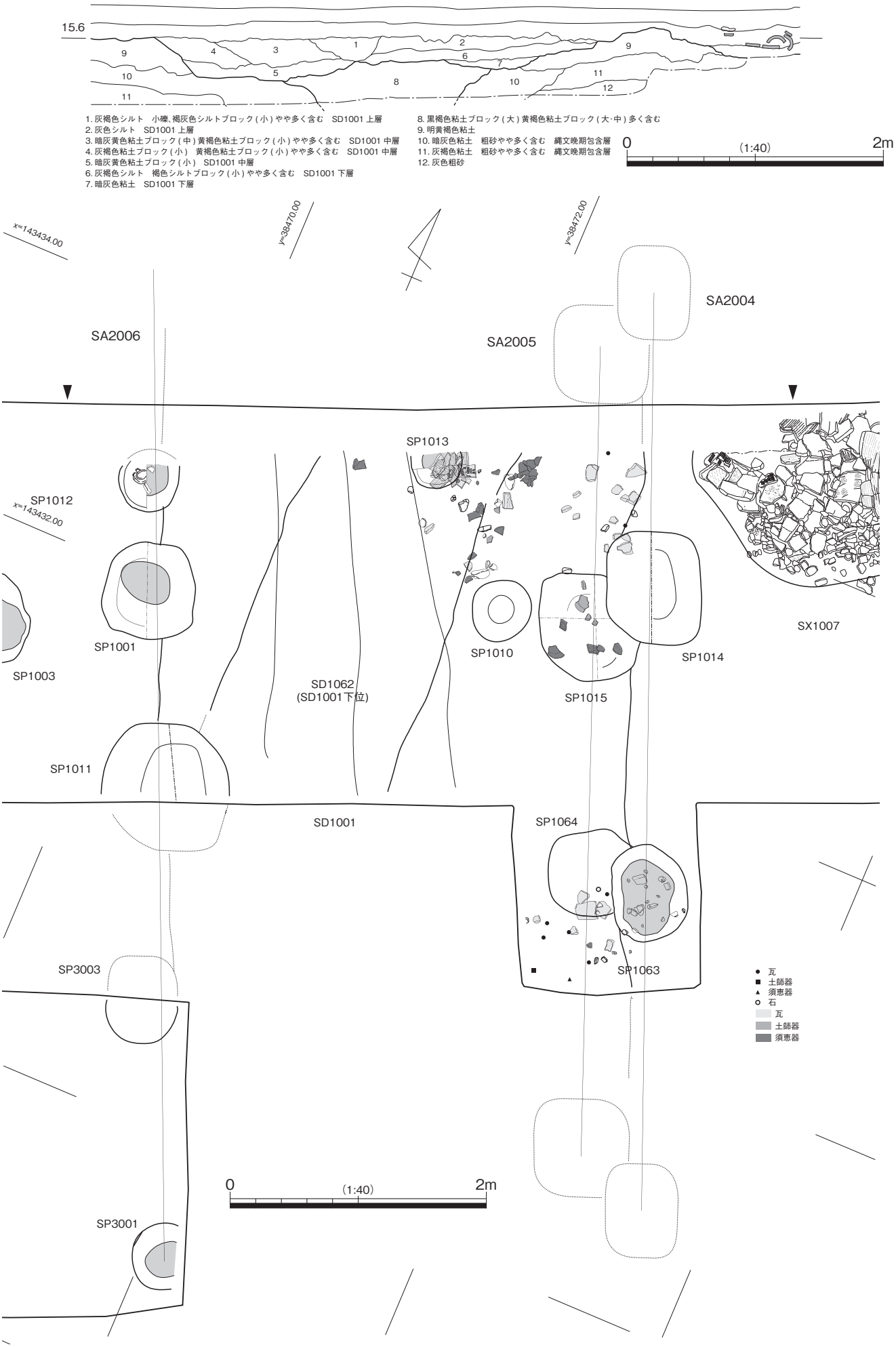


図 99-2　31-1Tr・SA2004 ～ 2006 平断面図

を多く含む３～５　層、下層は東側に分布する暗灰色粘土の６・７層となる。SP1013 は、上層を除去した段階で検出しており、下層堆積後に穿たれたと考えられるが、現時点で機能は不明である。

115 ～ 125 は下層からの出土遺物、126 ～ 128 は東肩部の基盤層上面に張り付いた状態で出土した資料を最下層の単位として取り上げた一群であり、層位的には下層に帰属するものとして差し支えない。

須恵器蓋（115 ～ 117）は、笠形の天井部と扁平な摘みをもつもので、８世紀初頭の資料と考えられる。119・120 は畿内系土師器杯、121 は須恵器蓋の内面を利用した転用硯である。122 は異形の須恵器であり、器種を特定できない。丸瓦（123）、平瓦（124. 125）は硬緻な須恵質の焼成をもつ。

須恵器蓋(126)、須恵器無蓋杯(127)、須恵器皿(128)は、７世紀末から８世紀初頭の資料と考えられる。土師器甕(129)

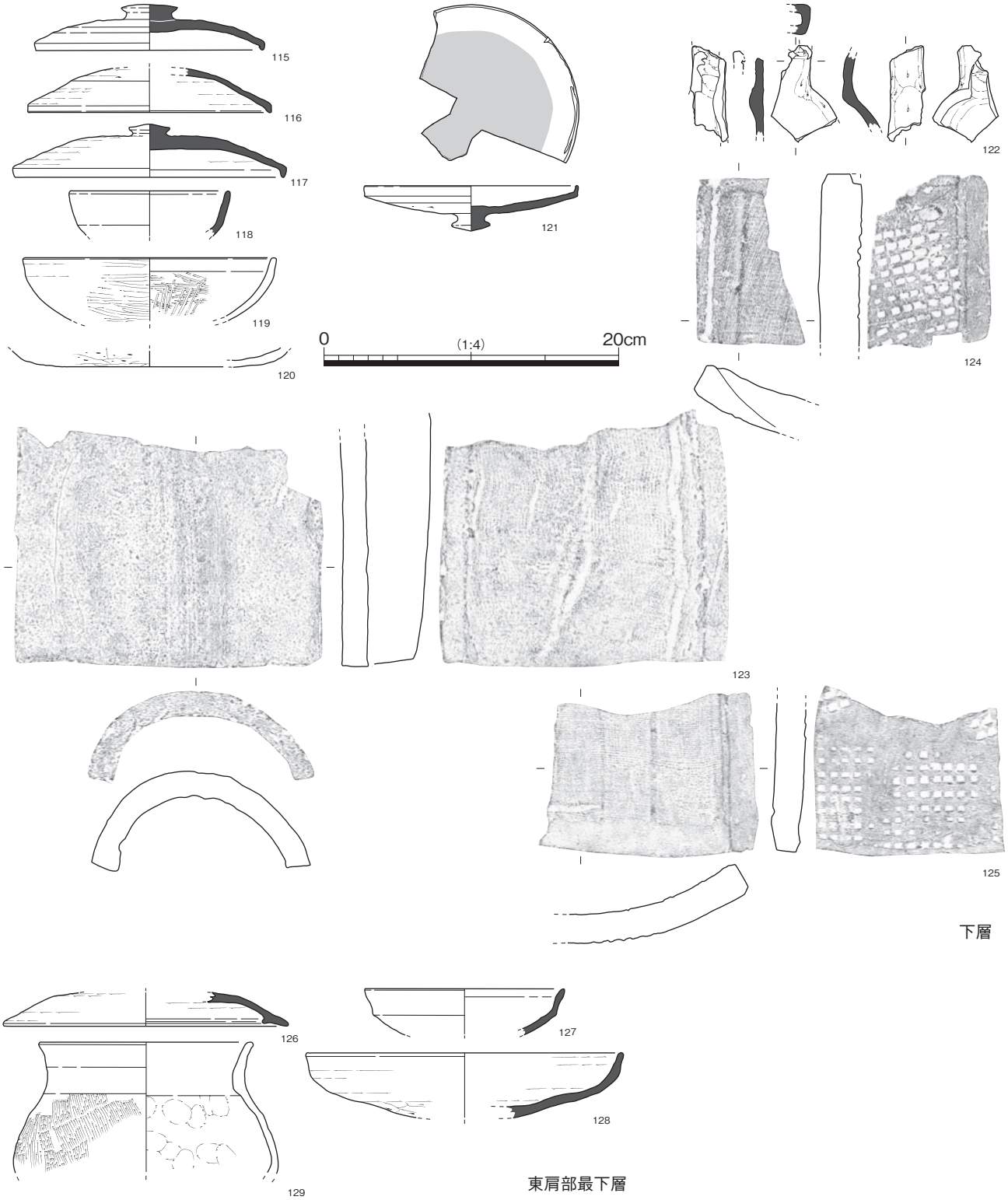


図 100　31-1Tr・SD1001 下層、東肩部最下層出土遺物

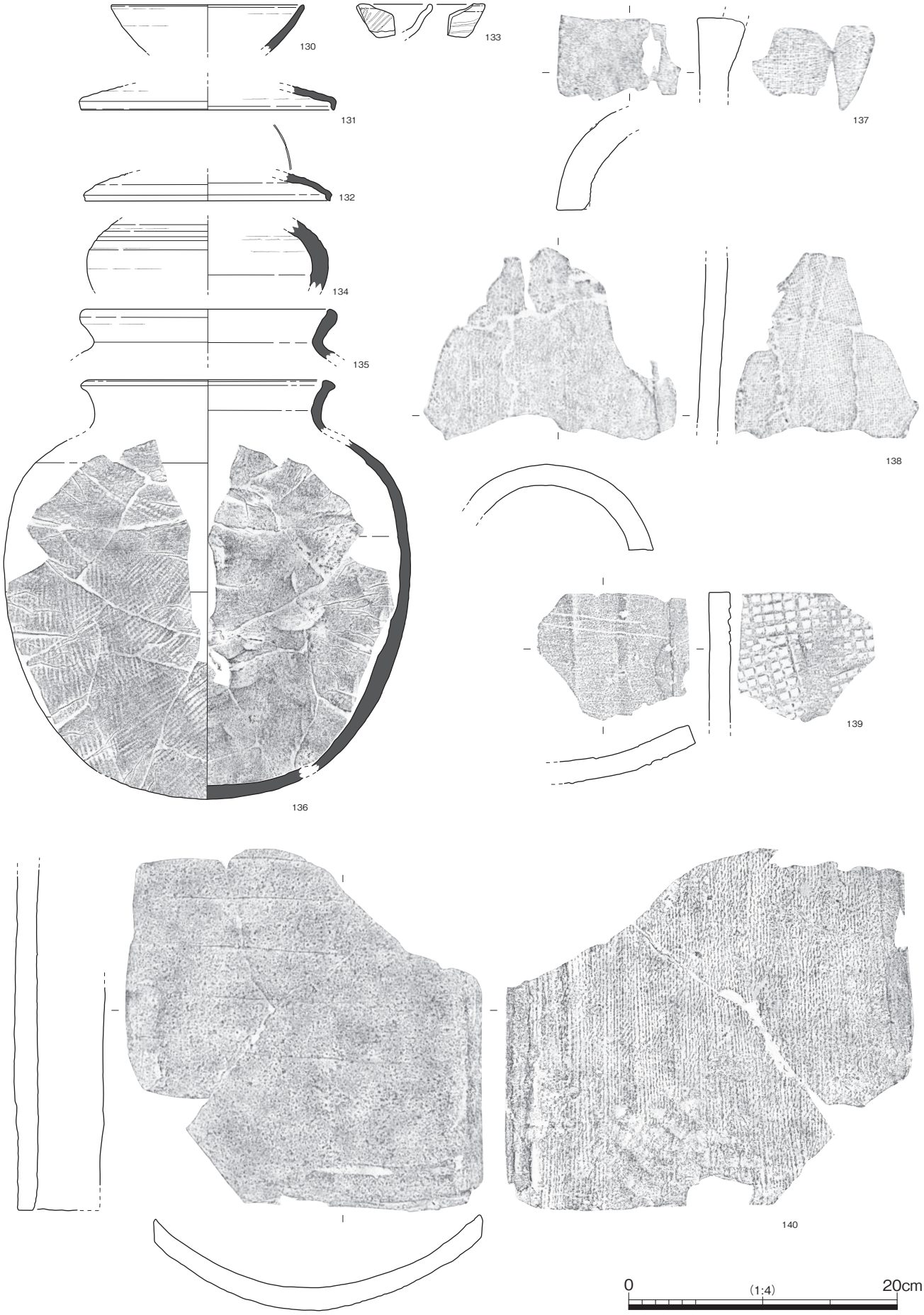


図 101　31-1Tr・SD1001 上層出土遺物 1

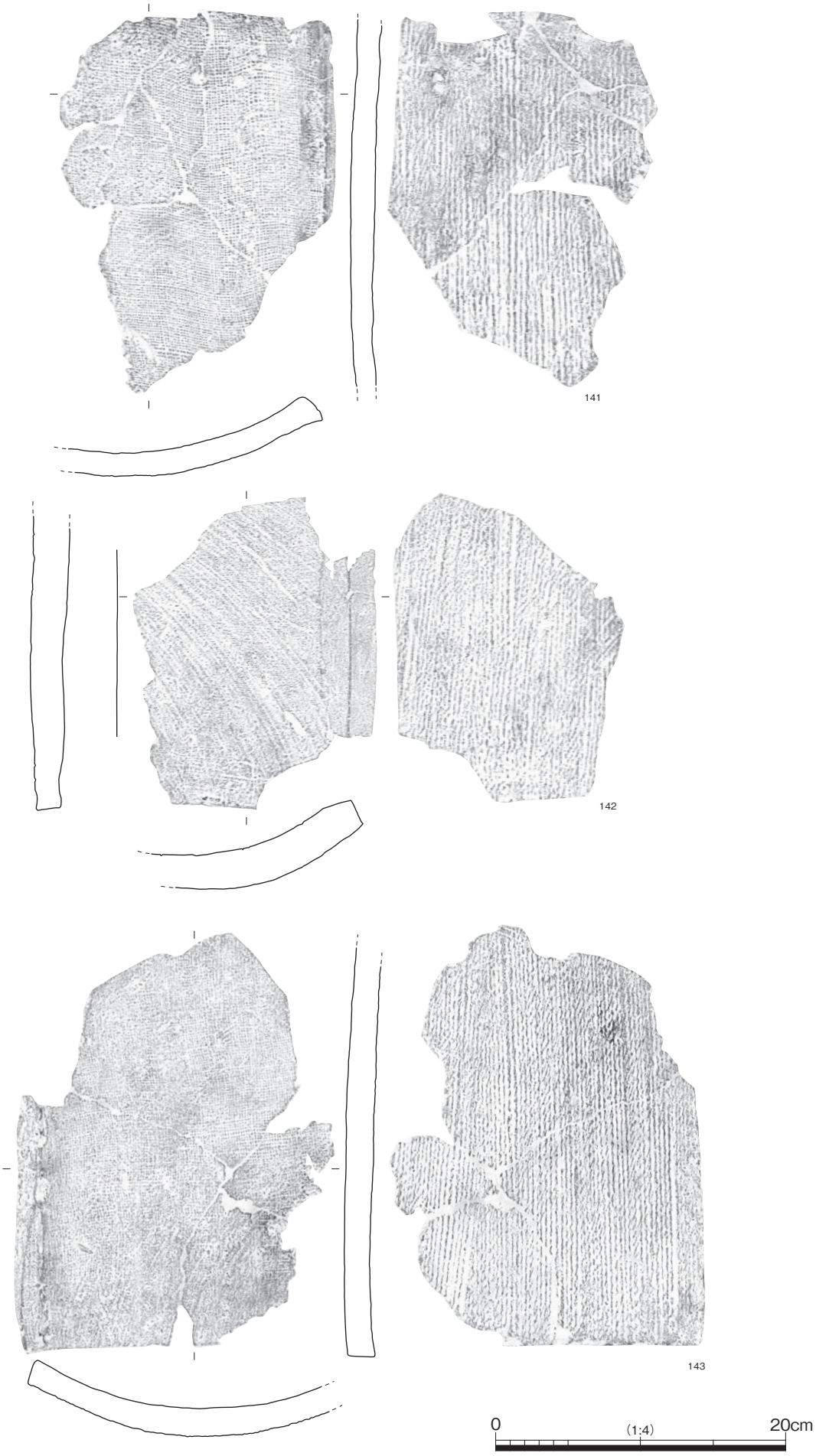


図 102　31-1Tr・SD1001 上層出土遺物 2

についても、須恵器と同様の時期であろう。

130 ～ 143 は、上層出土遺物である。須恵器杯（130）、須恵器蓋（131.132）、須恵器壷（134）、須恵器甕（135.136）は、７世紀末から８世紀前葉の資料と考える。畿内系土師器皿（133）は８世紀中葉の資料とみられる。平瓦（140 ～ 143）は、細く長い単位の縄目叩きをもつ資料である。SD1001 の瓦出土量は破片数 51 点（丸瓦 15 点（29%）、平瓦 36 点（71%））、総重量 11,142 g（丸瓦 2,320 g（21%）、平瓦 8,822 g（79%））を数える。平瓦の凸面調整の格子叩きと縄叩きの比率は破片数では 47%：53%、重量比では 27%：73%となる。

以上の資料から、本溝は７世紀末から８世紀初頭までに開削され、８世紀中葉まで継続した可能性が高いと考えられる。

SA2004.2005（図 99-2.103）

SA2004.2005 は、SD1001 東肩部に所在する南北方向の柱列であり、SA2005 が先行する。主軸方位は、SA2004 が座標北から 22°西偏、SA2005 は同北より 21.5°西偏し、柱間は芯々間で SA2004 は 2.4 m、SA2005 は 2.1 mを測る。１間分の検出にとどまるが、周辺の柱穴分布状況から掘立柱建物ではなく柵と考えた。南北方向への延伸状況及び柵としての評価は、今後の調査の進展を待ちたい。

SD1001 との層位関係は、SA1072.1073 ともに SD1001 下層上面で検出しており、SD1001 下層の段階と同時併存する可能性が高い。

出土遺物は、SP1014 の上層から土師器蓋（146）、須恵器硯脚（147）、SP1015 から須恵器甕胴部片（148）が出土している。出土遺物の年代観や構築位置からみて、SA2004.2005 は SD1001 下層と同様の８世紀初頭から８世紀中葉にかけて機能したものと推定しておきたい。

SA2006（図 99-2.103）

SA2006 は SD1001 の西肩にあり、31-3 トレンチより SP1012.1011.3003.3001 が条里地割の方向で南北に並び柱穴列を構成する。主軸方位は、座標北から 24°西偏する。

出土遺物には、SP3001 の抜き取りから出土した須恵器蓋（144）、須恵器杯（145）がある。須恵器杯（145）は９世紀前葉の所産と考えられる。また、SP1001 が SD1001 中層上面より穿たれている状況を確認したことを踏まえると、８世紀後葉から９世紀前葉に機能した柱列と考える。

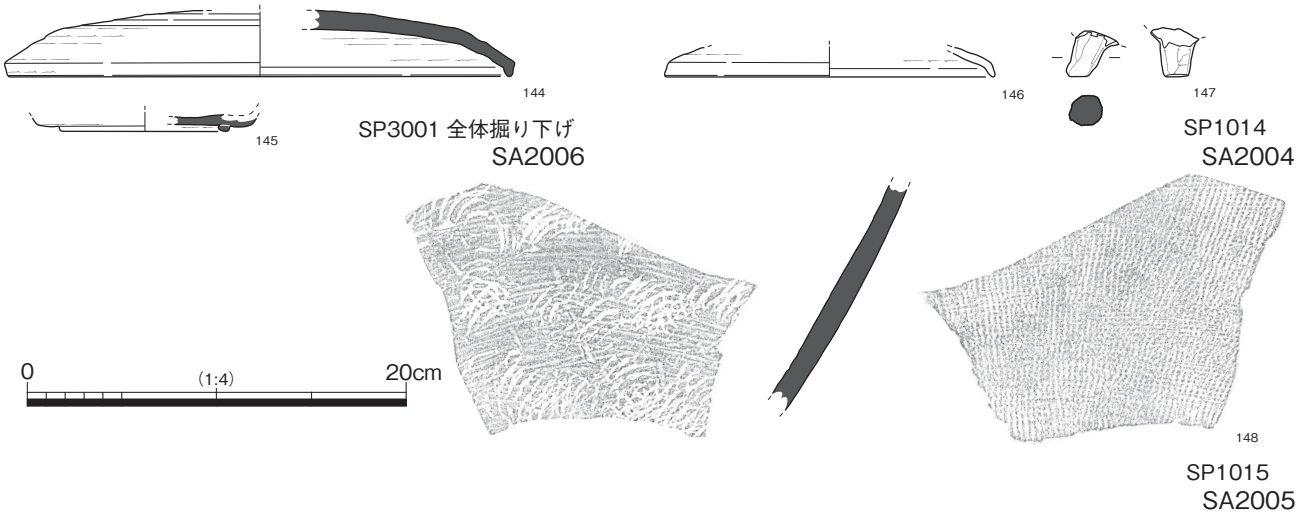


図 103　31-1Tr・SA2004 ～ 2006 出土遺物

SA2007（図 104.105）

31-5 トレンチ中央部で検出した東西方向の柱列である。条里地割の方向に合致する座標北より 110°西偏するもので、４間以上の柱間を想定できる。掘り方は長辺１m、短辺 0.7 ～ 0.8 mの隅丸長方形を呈し、深さ 0.6 mを測る。SP5002・5008 では径 0.3 mの柱痕跡が遺存し、両柱穴の柱のあたりには礎板として転用された平瓦片や軒丸瓦片がみられた。裏込め土は、基本層序 3 層に由来する黄褐色シルトの偽礫を多く含むもので、丁寧に埋め戻されている。調査範囲内での、建物と柵判別は困難であり、後述する SA2008 とは、配置上対応するようにみえるが、掘り方・埋土ともに異なるため、別遺構と考える。

149 ～ 155 は出土遺物である。須恵器杯蓋（150）は SP5011 の柱痕跡下部より出土した。須恵器蓋（149）は SP5011 裏込めより出土している。須恵器杯（151）は、SP5002 の柱の当たりから出土している。これらは７世紀末から８世紀初頭に帰属するものである。須恵器鉢（153）は SP5008 上層、155 は SP5008 の礎盤として転用された平瓦である。これらの出土遺物からみて、本柱列は８世紀初頭に構築されたものと推定しておきたい。

SA2008（図 104.105）

31-5 トレンチ北壁際で検出した東西方向の柱列である。建物主軸は座標北から 114°西偏した条里地割の方位をもつ。西から SP5020・5010・5006 による２間の検出にとどまっており、現状において掘立柱建物と柵の判断はできない。断ち割りを行った SP5010 は、深さ 0.3 m の逆台形を呈し、埋土中に焼土粒・炭化物小片をやや多く含んでいる。

出土遺物には SP5010 の裏込土から出土した須恵器杯または皿（156）、土師質土器杯（157）がある。また、土師質土器杯（157）の年代観から、本柱列は 10 世紀代に帰属するものと考える。

SD1062（図 99-2）

31-1 トレンチ西部の SD1001 の下位及び 31-3 トレンチの全域において検出した溝である。方位は真北を意識したものとなっている。平面検出及びサブトレンチでの断ち割り調査にとどまるが、上面幅約 1.7 ～ 1.8 m、深度 0.6 m以上、断面形は逆台形を呈すると推定される。

埋没土は、基本層序３層に由来する明黄褐色シルトの偽礫を多量に含むことから、人為的に埋め戻されたと考えられる。時期決定に有効な出土遺物はみられないが、８世紀初頭に開削されたと考えられる SD1001 との層位関係、真北を基調とした方位などからみて、７世紀後葉から８世紀初頭に帰属する遺構と考えられる。

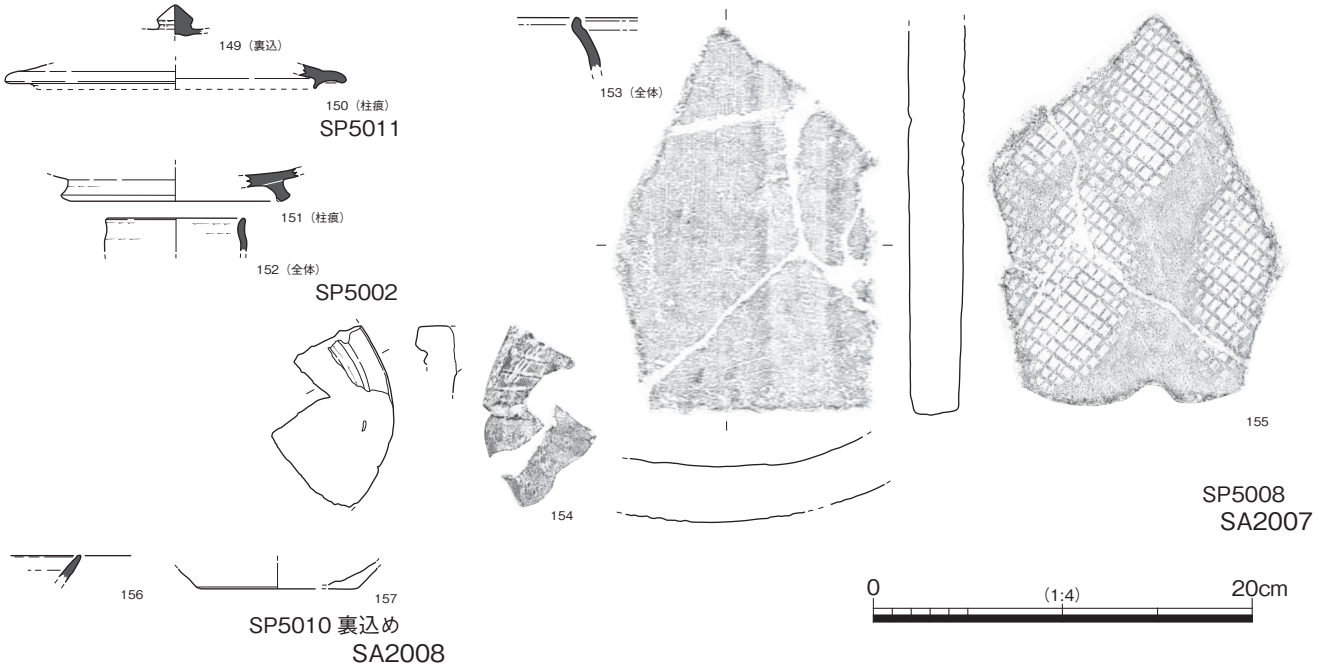


図 105　31-5Tr・SA2007.2008 出土遺物

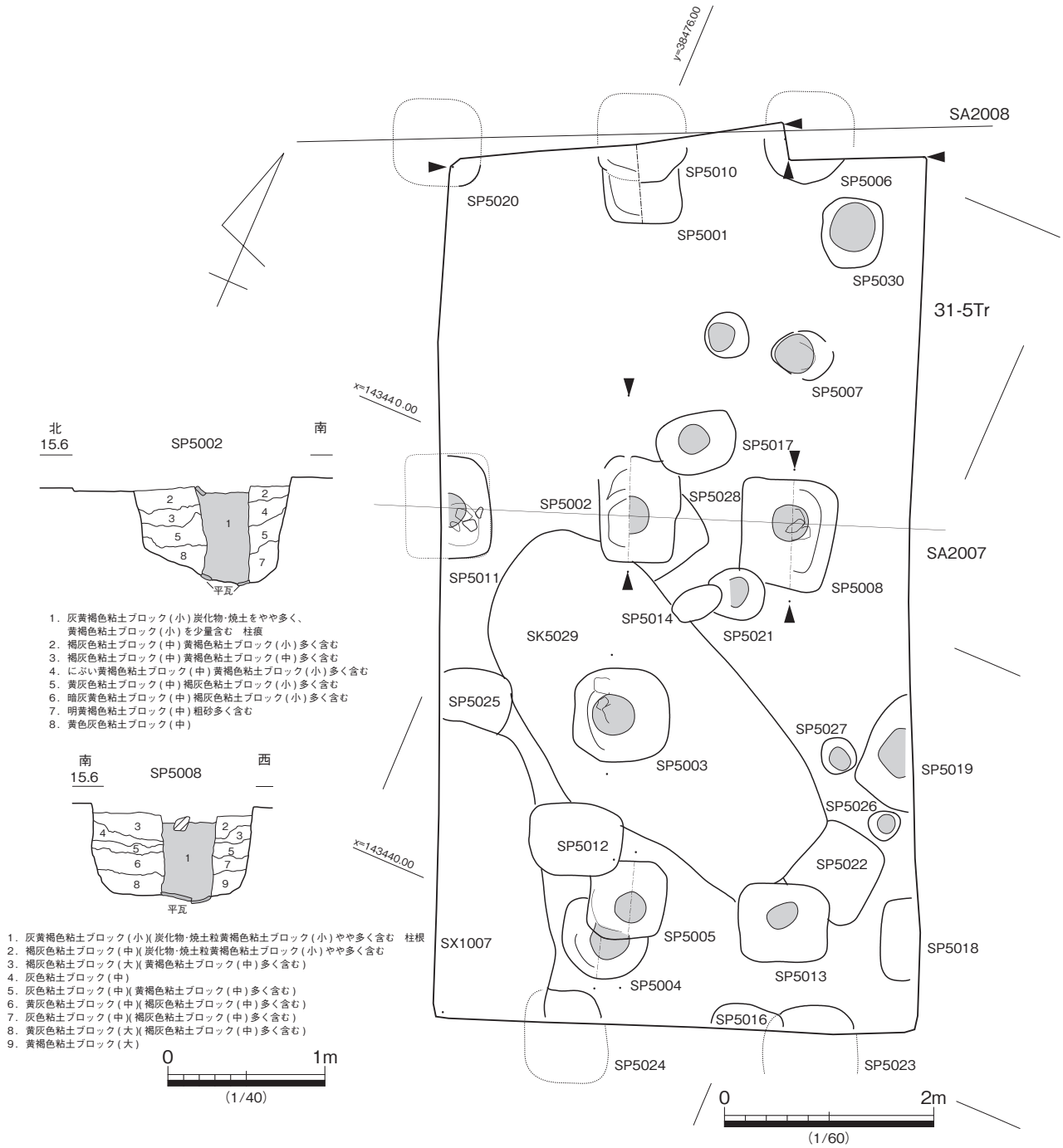


図 104　31 次・SA2007.2008 平断面図

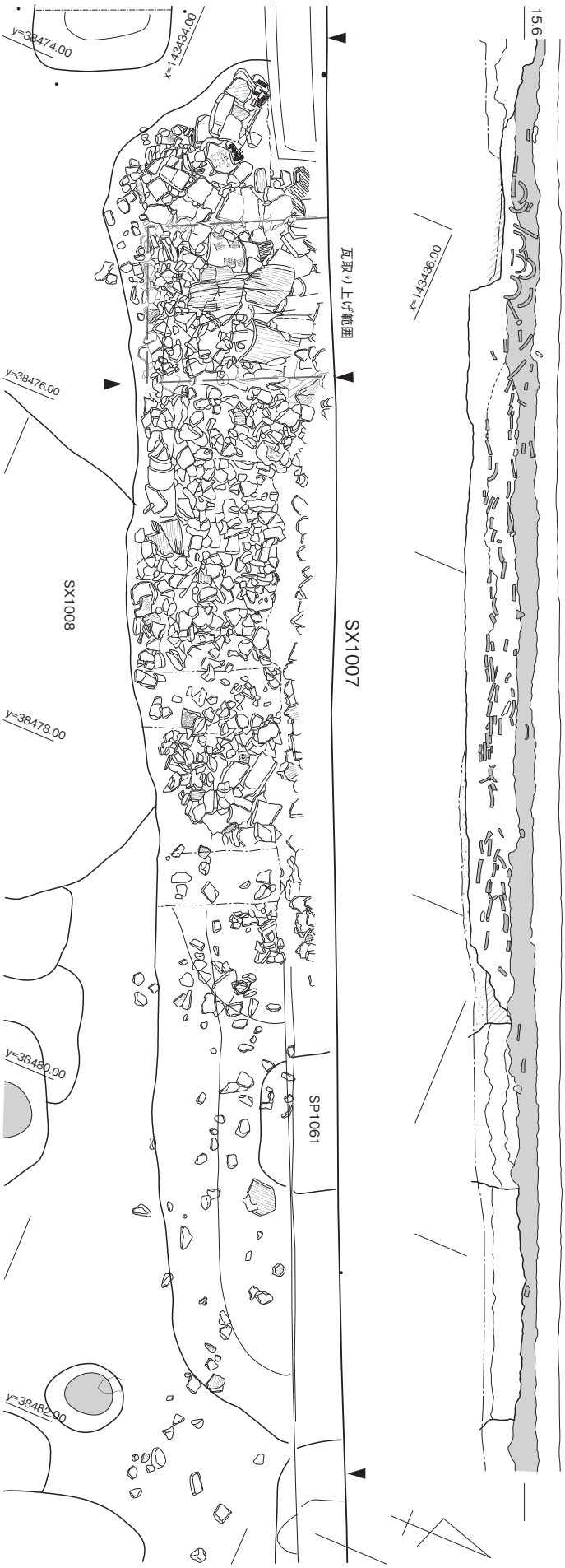
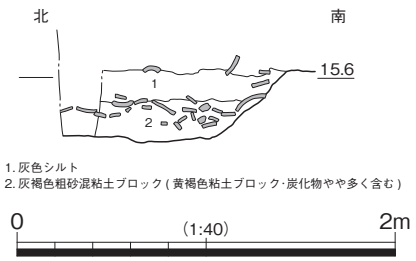


図 106　31-5Tr・SX1007 平断面図



SX1007（図 106 ～ 112）

31-1 トレンチ西部で検出した瓦溜まりである。長軸東西 9 m、短軸南北 1.1 ～ 1.4 mを測る大型土坑に瓦が集中して廃棄されている。掘り方は、東西両側にテラスを伴って 2 段掘りされており、最深部で深さ約 0.45 m を測る。底面は極めて平滑である。

廃棄された瓦群は、西部のテラス部と南側の掘り方に沿う部分には比較的残存率の高い瓦が集中し、その一部には列状を呈する丸瓦やテラス部底面に張り付いた状態で検出されているが、局所的なものであり、周辺の瓦葺建物の廃絶に伴い形成された大型廃棄土坑と考えられる。

158 ～ 169 は上層出土遺物である。土師質土器杯（158 ～ 160）は 10 世紀前葉から中葉の所産とみられる。163 は小片ながら三彩陶器と考えられる。 8 世紀後半から 9 世紀初頭の年代が想定される。164 は白色凝灰岩片。軒丸瓦（165）周縁の鋸歯文がみられないが KH106 型式と考えられる。軒平瓦（166）は KH203 型式と考えられる。

170 ～ 187 は下層出土遺物である。須恵器杯（170）は 10 世紀の資料と考えられる。須恵器鉢（171）は内外面にミガキがみられる。須恵器転用硯（173）は蓋の内面を利用しており、顕著な磨滅痕を確認することができる。軒平瓦（174. 177）は KH203 型式とみられる。平瓦（175）は凸面に粗い平行叩きが観察される。平瓦（176. 187）は凸面の縄目叩きの下位に斜格子叩きがみられる。軒平瓦（178）は内区に飛雲文をもつもので、新型式と考えられる。平瓦（181）は打ち欠きが認められるため、隅切瓦と考えられる。瓦の出土量は破片数 745 点（丸瓦 188 点（25％）、平瓦 557 点（75％））、総重量 235, 858 g（丸瓦 45, 297 g（19％）、平瓦 190, 560 g（81％））を数える。平瓦の凸面調整の格子叩きと縄叩きの比率は破片数

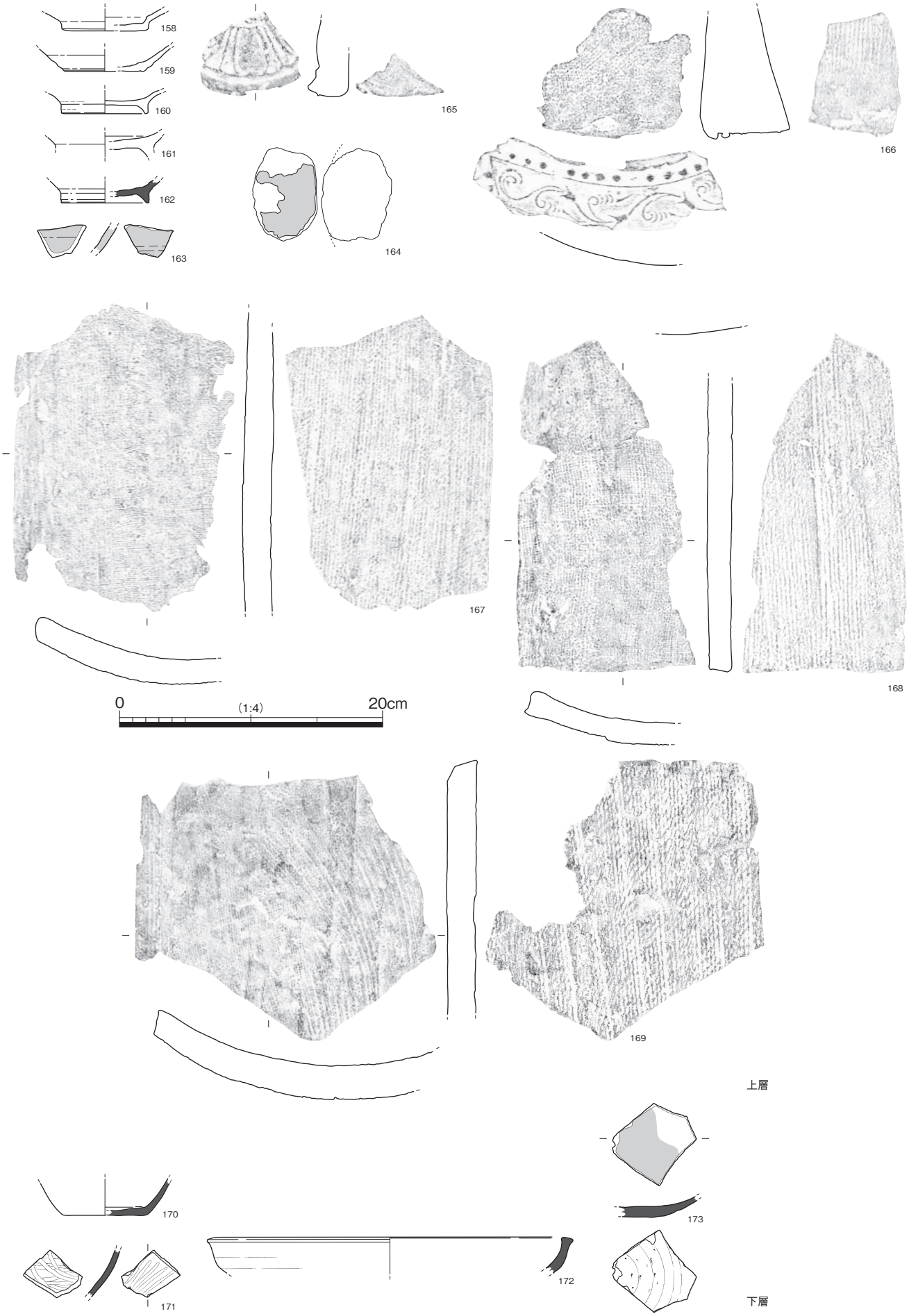


図 107　31-5Tr・SX1007 上層 . 下層出土遺物

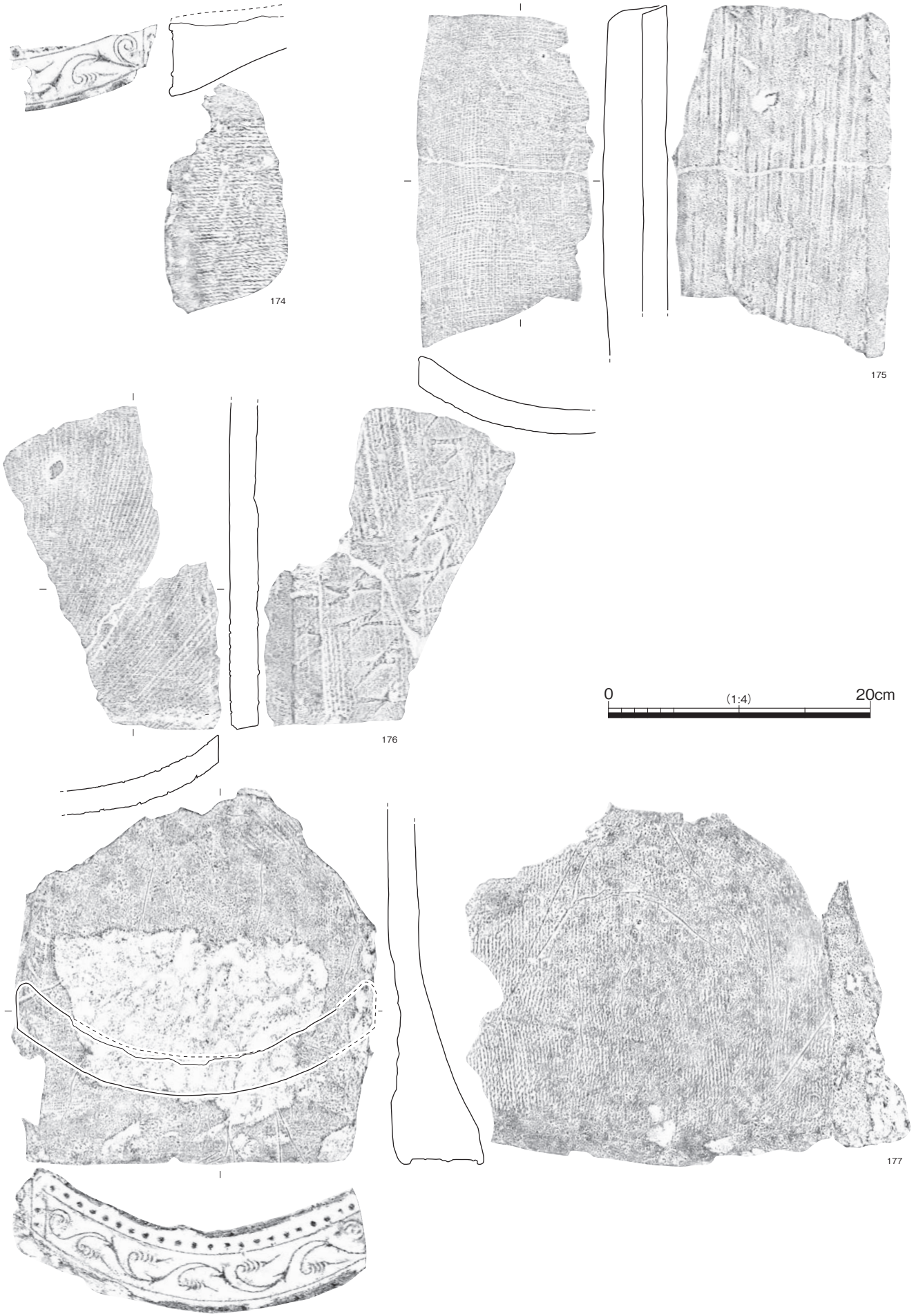


図 108　31-5Tr・SX1007 下層出土遺物 1

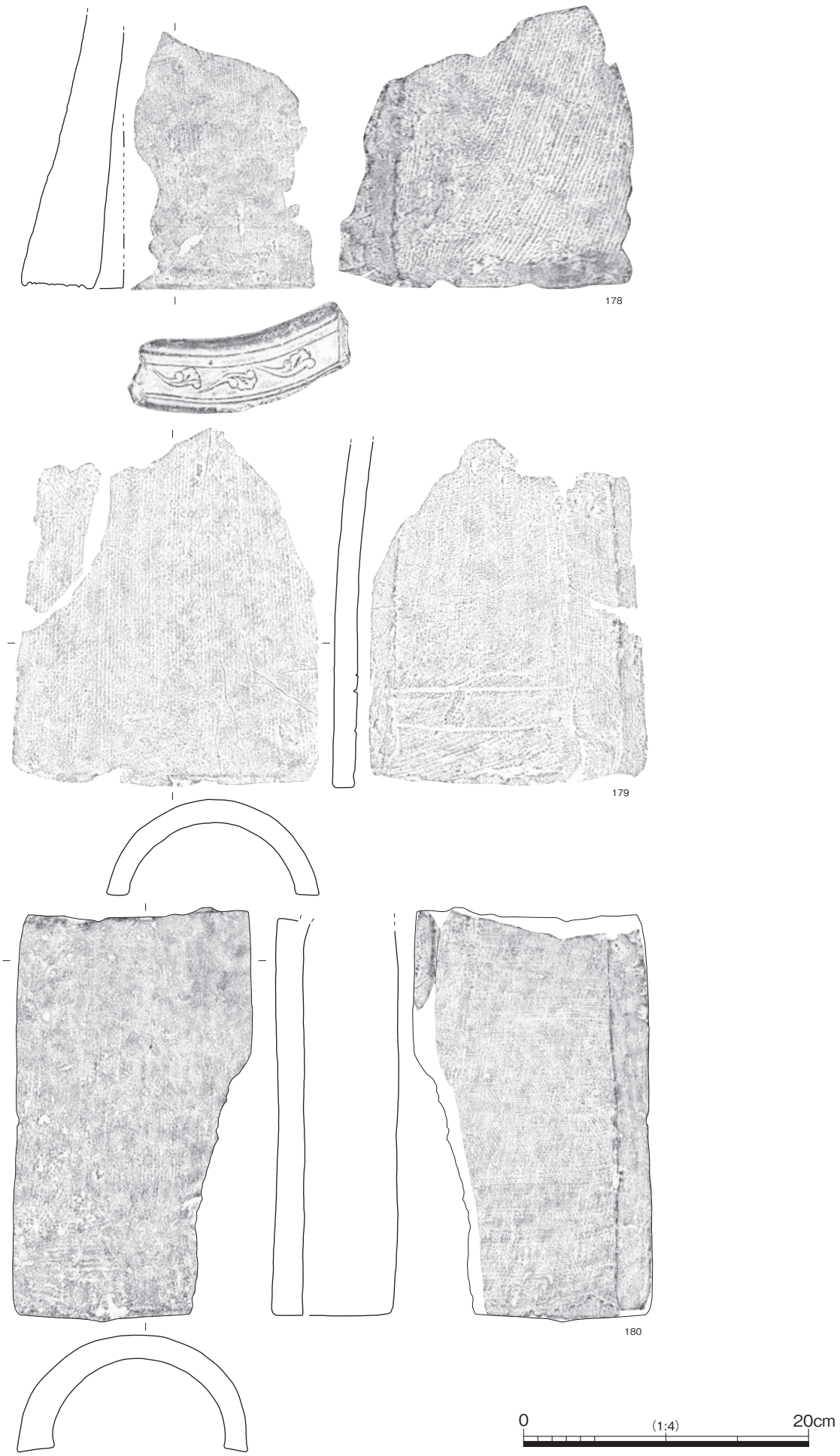
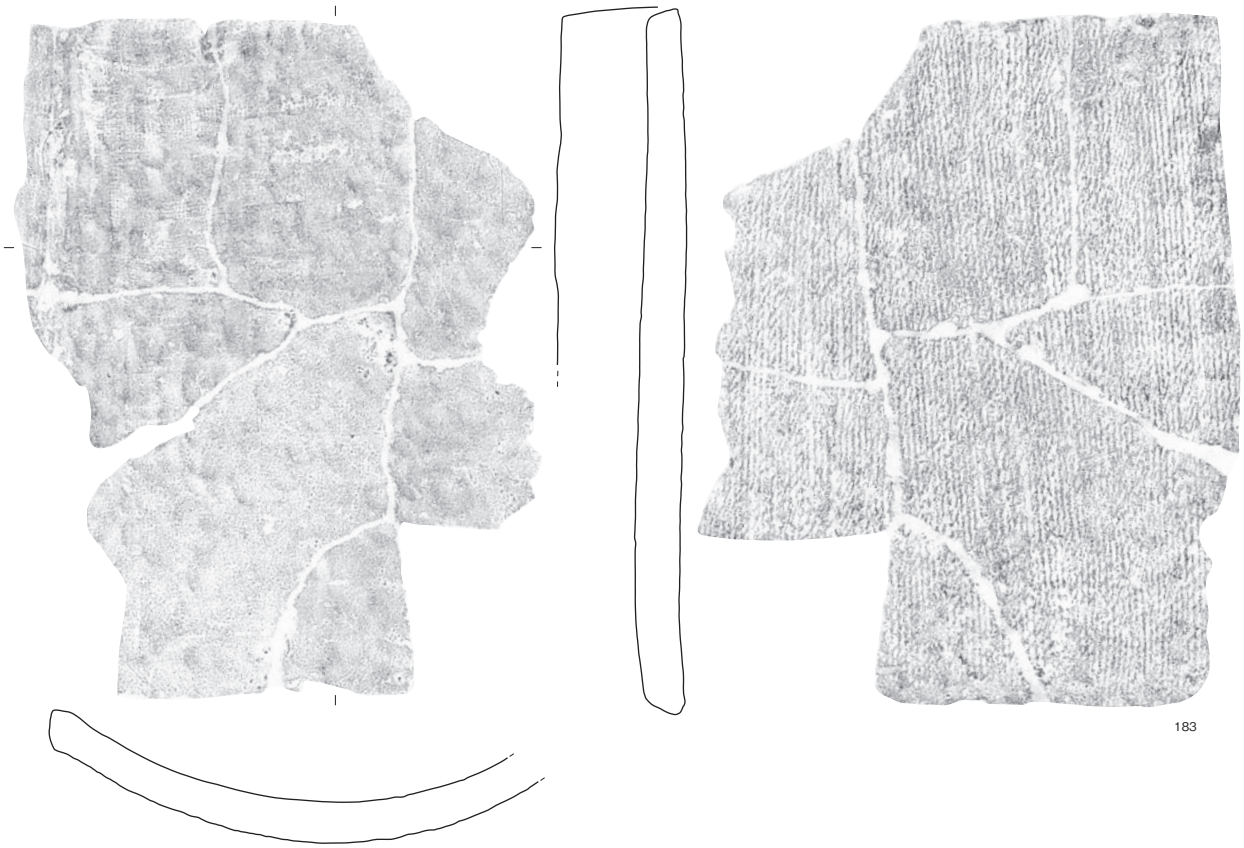


図 109　31-5Tr・SX1007 下層出土遺物 2

図 110　31-5Tr・SX1007 下層出土遺物 3



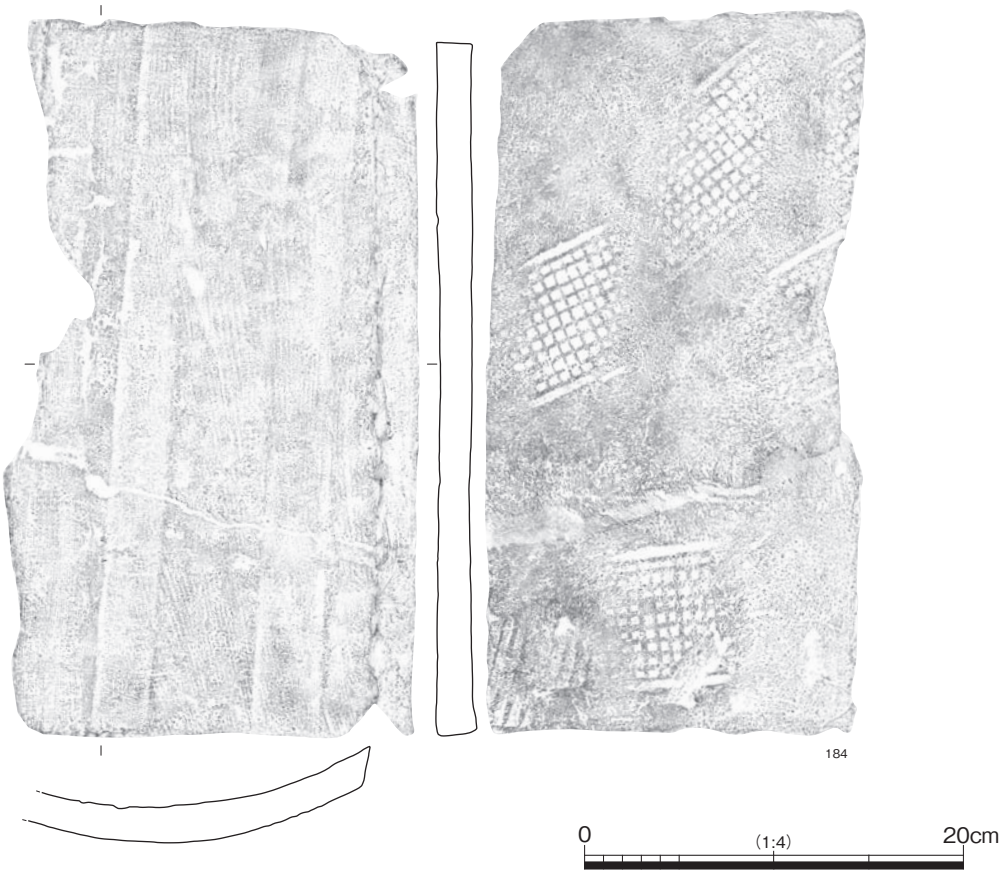


図 111　31-5Tr・SX1007 下層出土遺物 4

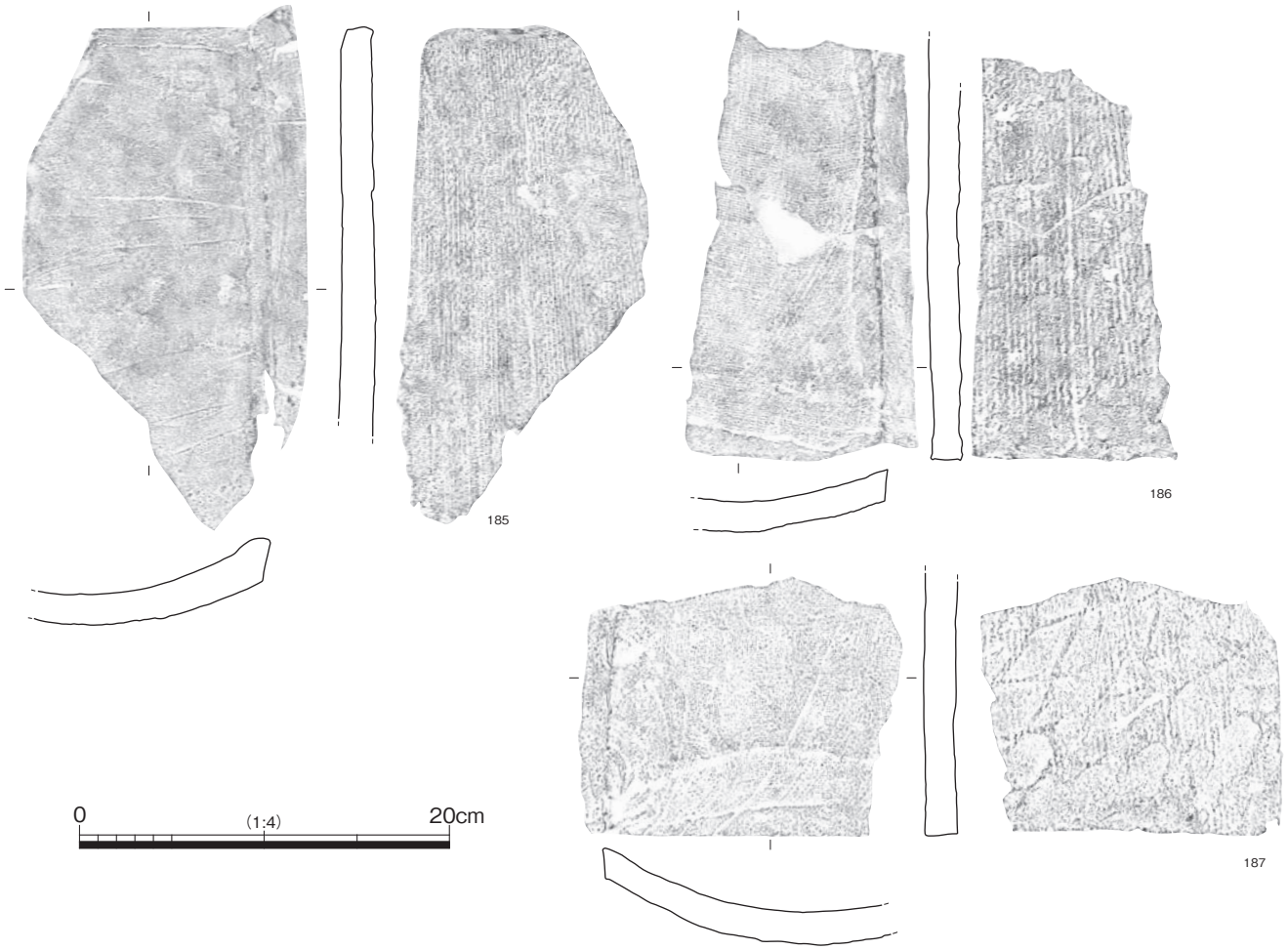


図 112　31-5Tr・SX1007 下層出土遺物 5

では９％：91％、重量比では７％：93％となる。

上層出土遺物の一部に 11 世紀代に下る資料が認められるが、下層出土遺物の年代観を優先して、本遺構は 10 世紀前葉から中葉に形成されたと考える。

SX2011（図 113）

31-2　トレンチで検出した竪穴建物である。本次調査時には竪穴建物として確定することができず、33 次調査においてその事実が明らかになった。

埋土は、焼土塊の有無や偽礫の混入状態からみて、上下 2 層に大別される。下層は焼土塊が殆ど含まれず、黄褐色・黒褐色シルトの偽礫が目立つものであり、貼床層に相当すると考えられる。

本次調査においては、須恵器甕の口縁部（208）が出土していることや、SB4050・4051 等の８世紀以降の遺構に切られることからみて、７世紀中葉の竪穴建物と考えられる。なお、本遺構及び周辺における竪穴建物については、33 次調査報告の項において説明を加えたい。

他の遺構からの出土遺物（図 104.113）

188 ～ 207 は建物復元に至らなかった柱穴・土坑等の出土遺物をとりまとめて掲載している。黒色土器（191）は薄手の器壁と内面の細いミガキ、高台の形状からみて、京都系の黒色土器椀と考えられる。31-5 トレンチで検出された SP5019 と SP5022 は、正方位の掘り方をもつ柱穴が芯々 1.8 m間隔で並ぶものである。周辺を後世の遺構に切られるため全貌は不明となるが、7 世紀後葉から８世紀初頭の建物となる可能性がある。SP5019 上層より須恵器台付椀(205)、SP5022 上層から須恵器皿（204）が出土している。

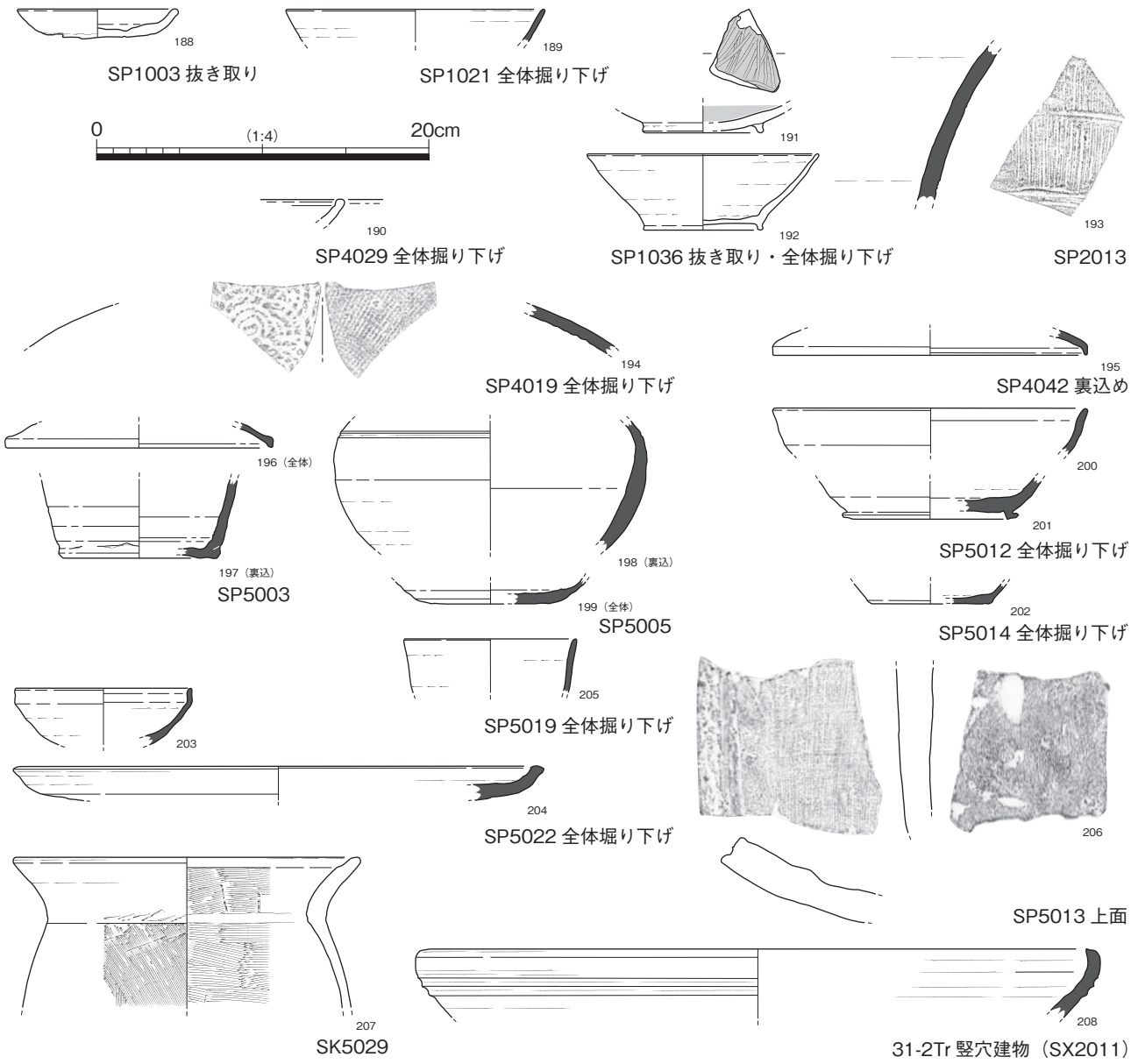


図 113　31 次調査区柱穴、土坑出土遺物

（4）小結

本次調査は、微高地 1 南西部の開法寺伽藍東側において調査を実施した。

調査の結果、7 世紀中葉から 11 世紀に至るまでの遺構・遺物を確認した。7 世紀から 8 世紀初頭では、正方位を基準とした SB2020 や大溝 SD1062 等の遺構群を確認し、29 次調査 29-3 トレンチで確認した建物等の遺構が、微高地 1 南西部に及ぶことを確認した。SD1062 は、微高地 1 を縦断する大規模な溝であり、今後の調査により建物群との関係が明らかにされることが望まれる。8 世紀から 11 世紀では、31-4 トレンチで検出された同一地点で建替えが行われたと考えられる SB2022 ～ 2024 が注目される。本次調査で詳細を明らかにすることができなかったが、33 次調査に東西棟の廂付の大型建物であることが明らかになった。詳細な報告は 33 次調査の項において行うが、微高地 1 の建物群のうち、中心的な大型建物となる可能性が高い。

以上、小規模な調査であったが、7 世紀から 11 世紀の長期間にわたる遺構・遺物を確認し、微高地 1 における遺構形成を知るうえで重要な資料を得ることができた。

第５節　第 32 次調査（平成 26 年度、PSK10）

（1）概要

32 次調査地の選定は、30・31 次調査で確認された微高地１における８世紀から 11 世紀の建物群の実態を平面的調査により確認することが主たる目的となった。これまで、トレンチ調査を主体とした調査方法が、平面的調査に転換することとなった。

加えて、微高地東側においてトレンチ調査を実施し、30 次調査で確認された SD1002 等の微高地北側を東西に延びる施設や 31 次調査の SD1001 等の微高地西側で南北に敷設された施設に対応する遺構の有無の確認についても調査目的とした。

平面的調査地の選定については、30 次調査 30-3 トレンチにおいて大型柱穴群を検出していることを踏まえ、同トレンチを拡張する形で 32-1 トレンチを設定することになった。また、32-1 トレンチの東側において、東西方向の３本のトレンチ（32-2･3･5 トレンチ）を配し、微高地東部における溝・柵等の施設の検出を目指した。

また、30 次調査 30-1 トレンチにおいて確認した SD1002. 1040 等の東西方向の施設の延伸状況を確認するため、南北方向のトレンチ２本（32-4･6 トレンチ）を設定した。調査面積は 408 ㎡である。

調査の結果、７世紀中葉から 12 世紀にわたる建物群を確認した。７世紀の遺構では、竪穴建物群と真北を基準とした掘立柱建物群を検出し、国府設置直前の微高地１における遺構形成の実態がより明らかになった。

８世紀以降では大型建物の SB1200 をはじめとした多くの建物を検出した。これらは、全体像の把握に至らなかったものが多いものの、検出状況からみて南北棟・東西棟に分かれて規則的に配置されている可能性がある。

微高地東側における調査では、急激な地形変換点となる落ち込み（SX2001）を確認したが、近現代の耕地開発に伴う削平が著しいことから、南北方向の溝・柵等の区画施設の有無について確認することはできなかった。

調査は平成 26 年 11 月より開始し、平成 27 年３月に終了した。途中、平成 27 年２月 14･15 日に現地説明会を開催し、約 250 人の参加をみた。

（2）層序

32-1 トレンチの層序（図 115）

調査前は水田として利用されており、１層は耕作土下にみられる灰色シルトである。1 層の下位には、３層とする黒褐色粘土が全域においてみられる。３層は、層内に暗灰色粘土の偽礫・炭化物・焼土塊（粒）を含み、12 世紀までの土器・瓦などの遺物（７～ 51）が出土している。中世後半以降の遺構である SD1005. 1006 は本層上面から穿たれている。層相から判断して、自然堆積層とは捉えられず、当該期における微高地上面の削平・整地に伴って形成されたものと考えられる。

４層はトレンチ南東部のみに分布するオリーブ褐色粘土である。トレンチ南東部では、５層とする古代以降の基盤層の黄褐色粘土が南東方向へ傾斜することで緩やかな落ち込み状を呈しており、この箇所について SX1001 として調査を行った。９世紀から 11 世紀の遺物（83 ～ 88）を包含する。層内にラミナが認められないことから、自然堆積層ではなく、同該期の削平・整地に伴うものと考えられる。

５層は、古代以降の基盤層とした黄色系粘土である。トレンチ南東部では細粒の黄褐色粘土、トレンチ北西部ではやや粗化した黄灰色粘土～シルトとしてみられ、これを５a・b 層として細分したが、両者に顕著な違いは認められない。本層に伴う遺物として、トレンチ北東部を中心に弥生前期末葉の土器群（54 ～ 56）が出土しているが、これらは微高地１の形成年代の一端を示すものとして重要である。

32-2・3 トレンチの層序（図 116-1.2）

32-1 トレンチ東側において設定した東西方向の２本のトレンチである。32-3 トレンチが 32-1 にトレンチに近接する同一筆内、32-2 トレンチは 32-3 トレンチ東側の異なる筆に設定したトレンチとなる。

32-3 トレンチは、32-1 トレンチで２層とした黒褐色粘土に対応する３a 層が全域を覆うが、トレンチ東端付近では、

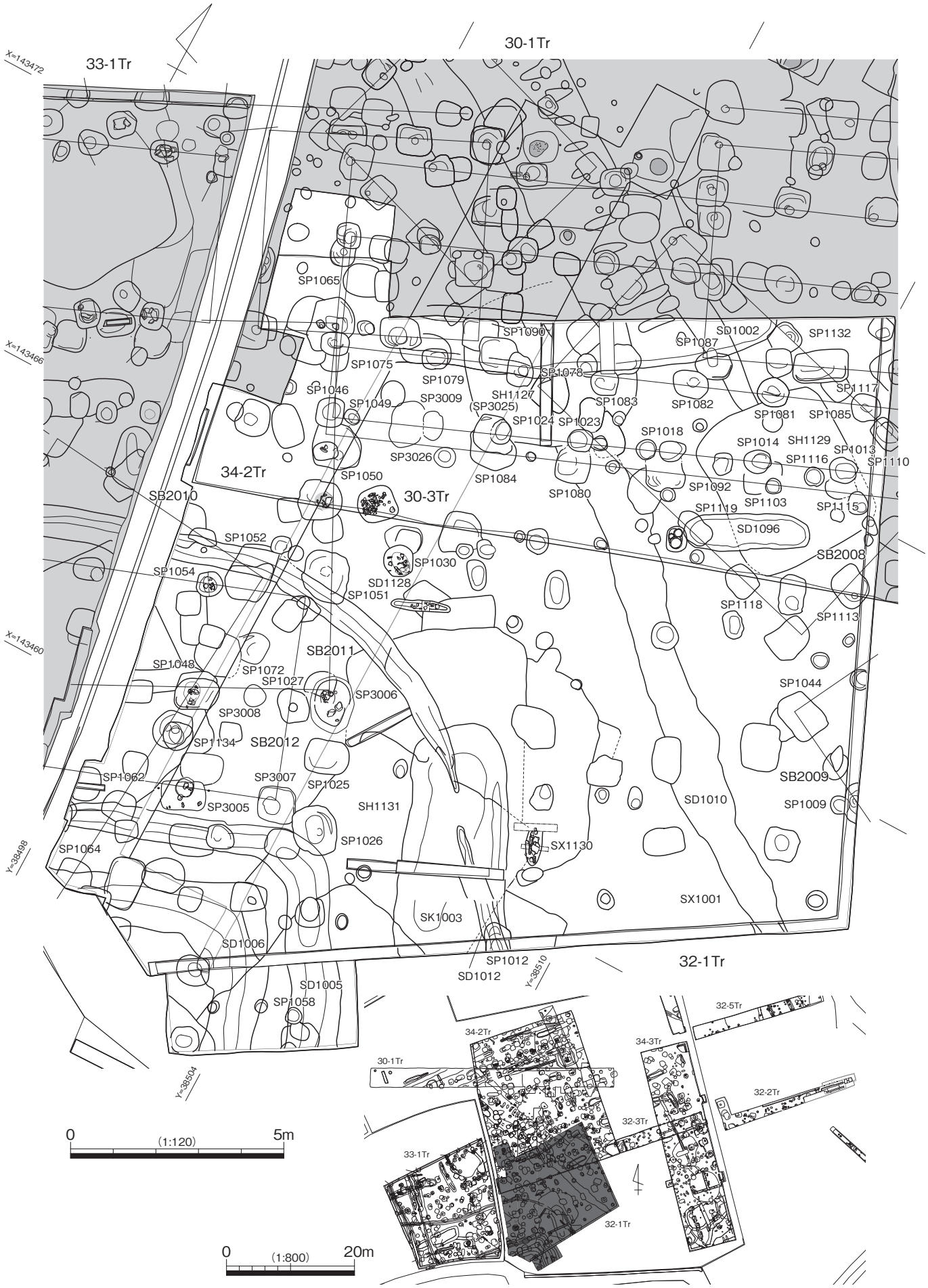


図 114　32-1Tr 遺構平面図

８・９層とした基盤層の黄褐色粘土・にぶい黄灰色シルトが東へ向かって傾斜しており、この箇所に限って灰黄色シルトが堆積し、３ｂ層として細分して調査を進めた。３ｂ層は、３ａと比較して含まれる焼土・炭化物がやや少ない傾向があるが、全体として顕著な違いは認められない。

３層の下位は、古代以降の基盤層である８・９層であり、32-1 トレンチにおける５層に対応する。前述のとおり、32-3 トレンチ東端では、９層が東へ向かって緩やかに傾斜する。３ｂ層の成因からみて、同層形成時に９層上面に削平が及んでいる可能性が考えられるが、この傾斜は微高地１東側における地形状況を反映しているとみられる。

32-3 トレンチ東端と現在の水田畦畔を挟んで接する 32-2 トレンチ西端付近は、現在の耕作土直下が古代以降の基盤層の 10b 層となり、間に遺物包含層を交えない。32-3 トレンチとは、現在の水田面においても約 0.7 mの比高差があり、32-2 トレンチが所在する筆は近現代の耕地整理に伴い顕著な削平を受けていると考えられる。こうした状況は、32-2 トレンチ中央まで続くが、同トレンチ東半部では基盤層の 10b 層が東へ向かって傾斜を始め、トレンチ東端付近では急激に落ち込みをみせる。この落ち込みを SX2001 として調査を行った。SX2001 は、層相から判断して、上層は３ａ・ｂ・ｃ層とする焼土・炭化物を多く含む黒褐色系粘土、中層は灰黄色粘土の細かな偽礫を多く含む灰色系シルト～粘土、下層は細かなラミナが認められる黒灰色系粘土に区分される。これらのうち、３層は 32-1 トレンチ２層、32-3 トレンチ３層に層序対比されるものであり、32-2 トレンチ西部においては近現代の耕地整理に伴い３層が削平されたと考えられる。したがって、32-2 トレンチ東部の落ち込み（SX2001）は、32-3 トレンチ東端の落ち込みに連続する微高地１東側斜面の状況を示すものと考えられる。

基盤層である 10 層中には、10 ａ層とする粗砂層が局所的に含まれており、32-2 トレンチ中央付近の 10 ａ層より、縄文晩期前半の浅鉢（62）が出土している。32-1 トレンチ５層より出土した弥生前期土器群（54 ～ 56）とともに、微高地１の形成年代を示す資料と考えられる。

こうした 32-1 ～３トレンチにおける２・３層及び基盤層の検出状況と柱穴深度から想定した微高地１の旧状については、図 116-2 のように整理できる。

32-4 トレンチの層序（図 117）

32-1 トレンチ北側に設定した南北方向のトレンチである。トレンチ南端は 30 次調査 30-1 トレンチに接する。

１層は現在の耕作土の基盤層である浅黄色シルトである。２層とした灰白色シルトは、分級が悪いことから旧耕作土と考えられる。３層は焼土・炭化物を多く含む黒褐色粘土である。30 次調査 30-1 トレンチの３層に層序対比できるもので、７世紀から 10 世紀を主体とし、極めて少量の 11 世紀の遺物を含んでいる（64 ～ 82）。32-1 トレンチ２層に対応する可能性があるが、層内の偽礫の状況や包含遺物の年代に差違があり、確定に至らなかった。

３層の下位は、古代以降の基盤層の明黄褐色シルトである。32-1 トレンチの５層に対比されるが、本トレンチではシルトとして検出される。

32-5 トレンチの層序（図 118）

基本的な状況は、32-2 トレンチと同様である。トレンチ中央から西部では、近現代の耕地整理に伴う顕著な削平が認められ、現在の耕作土直下が基盤層である５層となる。トレンチ東部では、32-2Tr・SX2011 に対応する微高地１東斜面の落ち込み（SX5001）がみられる。SX5001 には３層とした 12 世紀の遺物を含む黒褐色粘土がみられる。

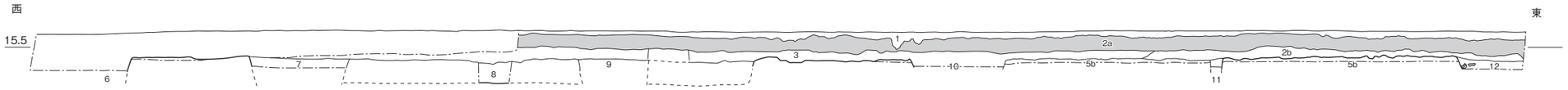
５層は古代以降の基盤層となる黄褐色粘土であるが、トレンチ中央部は同層中に灰色粗砂が介在し、これを５ｂ層とした。調査範囲内で５ｂ層からの出土遺物はみられなかったが、本層は 32-2 トレンチの 10a 層に層序対比されるものと考える。

32-6 トレンチの層序（図 118）

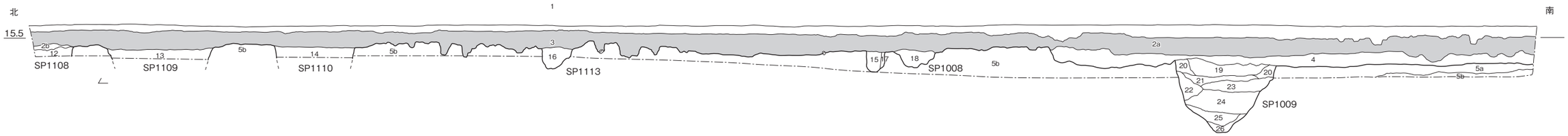
本トレンチは 32-1 トレンチの北東側に設定した南北方向のトレンチである。32-4 トレンチと同様に、30 次調査 30-1Tr・SD1002. 1040 の東側への延伸状況を確認する目的で設定したものである。

調査前は水田として利用されており、１層は耕作土、２層はその基盤となる灰色シルトである。２層の下は、３層

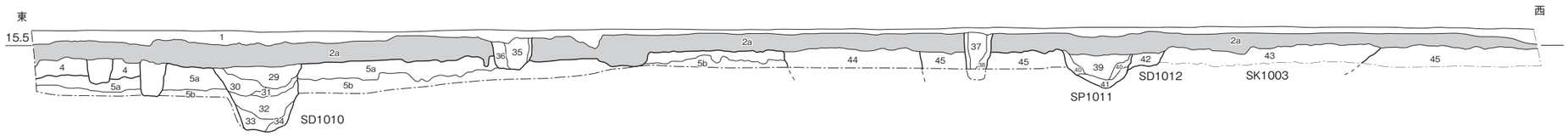
32-1Tr　調査区北壁



32-1Tr　調査区東壁



32-1Tr　調査区南壁



1. 灰色シルト Fe 沈着
2a. 黒褐色粘土 (焼土・炭化物多く含む)12ｃ遺物包含層　3 層で取り上げ
2b. 暗灰黄色粘土 (5 層上部の植物擾乱層)　3 層下部で取り上げ
3. 暗灰黄色粘土　SD1002
4. オリーブ褐色粘土　SX1001(落ち込み)
5a. 黄褐色粘土　古代基盤層　上部出土遺物を 4 層で取り上げ
5b. 黄灰色粘土　古代基盤層
6. 黒褐色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロック多く含む)
7. 黒褐色シルトブロック (黄褐色粘土ブロックやや多く含む)SP1066
8. 黒色シルト (黄褐色粘土ブロック多く含む)SP1066
9. 黄褐色粘土ブロック SP1104
10. 黒褐色粘土ブロック　SP1123
11. 明黄褐色粘土ブロック (黒褐色粘土ブロックやや多く含む)SP1132
12. 明黄褐色粘土ブロック (黒褐色粘土ブロックやや多く含む)SP1108
13. 黒褐色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロック少量含む)SP1109
14. 黄灰色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロック少量含む)SP1100
15. 黒褐色粘土 (焼土・炭化物やや多く含む)SP1113
16. 黒褐色粘土 (焼土・炭化物やや多く含む) 柱穴埋土　番号付与無
17. 黄褐色粘土ブロック　柱穴埋土　番号付与無
18. 黒褐色粘土ブロック (焼土･炭化物やや多く含む)SP1008
19. 黄灰色粘土ブロック　SP1009
20. 暗灰黄色粘土ブロック　SP1009
21. 黒褐色粘土ブロック　SP1009
22. 明黄褐色粘土ブロック　SP1009
23. 黄褐色粘土ブロック　SP1009
24. 黒褐色粘土ブロック　SP1009
25. 灰黄色シルト　SP1009
26. にぶい黄色シルト　SP1009
27. 黒褐色粘土 (焼土・炭化物多く含む)2a 層上面からの柱穴　番号付与無
28. 黒褐色粘土 (焼土・炭化物多く含む)2a 層上面からの柱穴　番号付与無
29. 黄灰色シルト　SD1010 上層
30. 暗灰黄色シルト　SD1010 上層
31. 灰色シルト　SD1010 中層
32. オリーブ黒色粘土　SD1010 中層
33. 黄灰色シルト　SD1010 下層
34. 黄褐色粘土ブロック　SD1010 下層
35. 黒褐色粘土 (焼土・炭化物多く含む)2a 層上面からの柱穴　番号付与無
36. 黄褐色粘土ブロック　2a 層上面からの柱穴　番号付与無
37. 黒褐色粘土 (焼土・炭化物多く含む)2a 層上面からの柱穴　番号付与無
38. 黄褐色粘土ブロック (黒褐色粘土ブロック多く含む)2a 層上面からの柱穴　番号付与無
39. 黄灰色粘土 (焼土粒少量含む)　SP1011　11ｃの柱穴
40. 暗灰黄色粘土 (黄褐色粘土ブロックやや多く含む)SP1011　11ｃの柱穴
41. 黒褐色粘土　SP1011　11ｃの柱穴
42. 黒褐色粘土　SD1012　11ｃ溝
43. 明黄褐色粘土ブロック　SK1003 下層
44. 黄褐色粘土ブロック (暗オリーブ褐色粘土ブロック多く含む)7ｃ中葉竪穴建物の埋土
45. 黄灰色粘土ブロック (暗オリーブ褐色粘土ブロック多く含む)7ｃ中葉竪穴建物の埋土

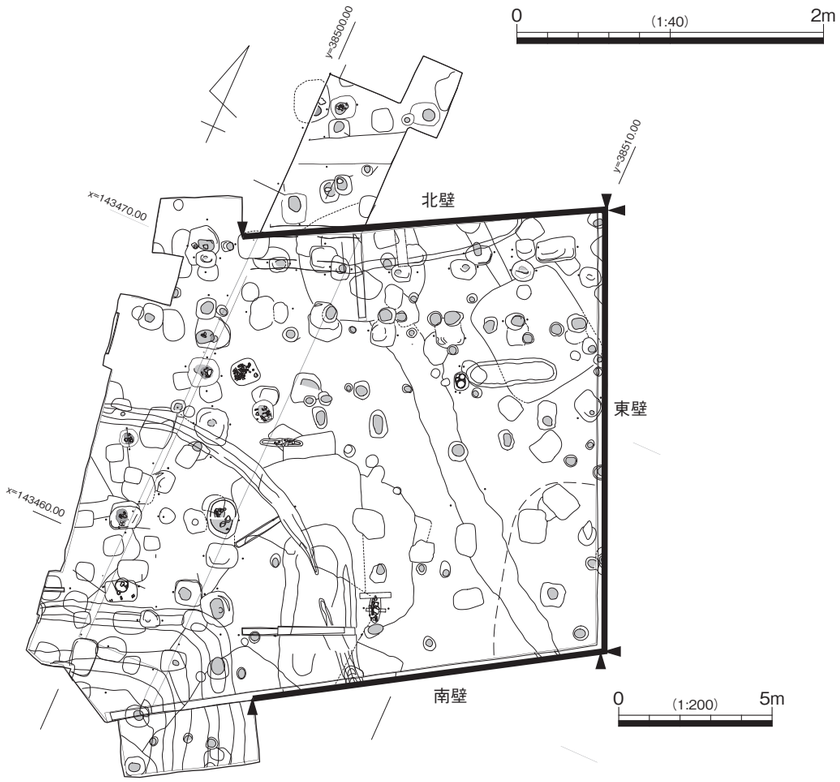
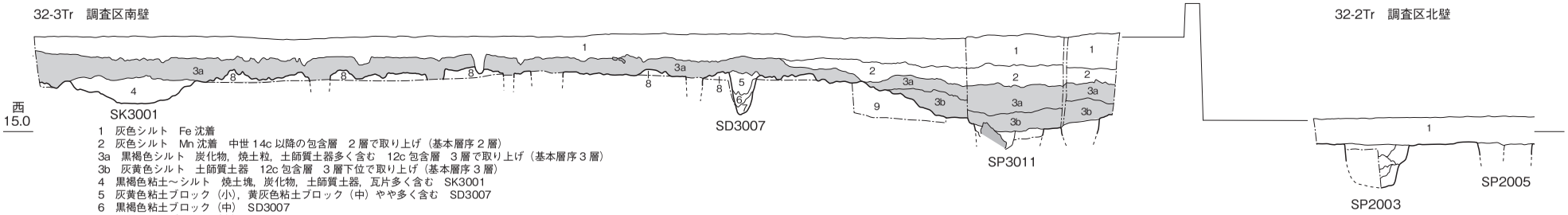


図 115　32-1Tr 各壁断面図

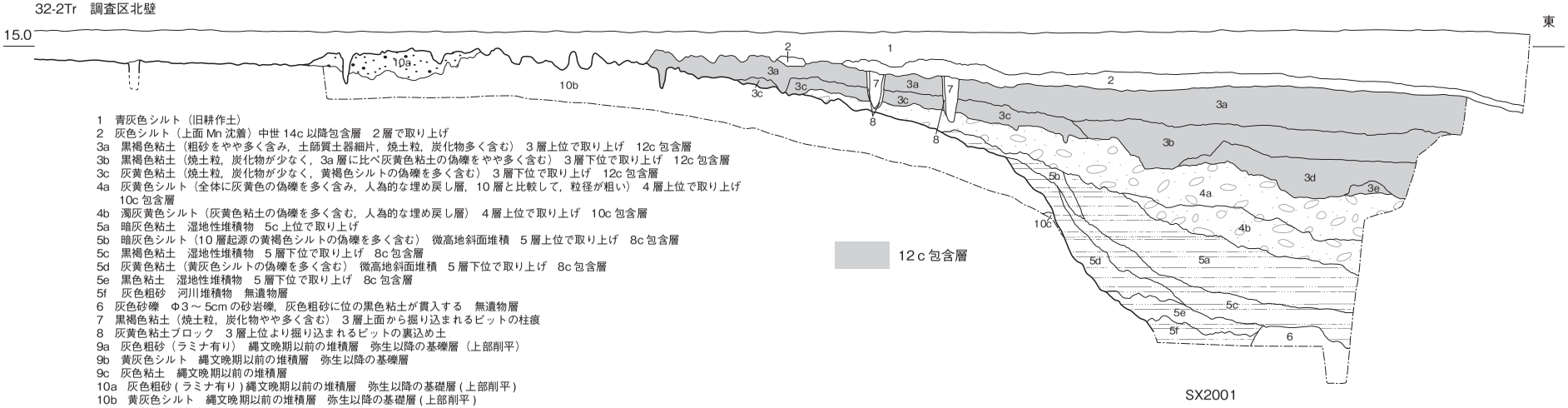
32-3Tr　調査区南壁



32-2Tr　調査区北壁

1　灰色シルト　Fe 沈着
2　灰色シルト　Mn 沈着　中世 14c 以降の包含層　2 層で取り上げ（基本層序 2 層）
3a　黒褐色シルト　炭化物，焼土粒，土師質土器多く含む　12c 包含層　3 層で取り上げ（基本層序 3 層）
3b　灰黄色シルト　土師質土器　12c 包含層　3 層下位で取り上げ（基本層序 3 層）
4　黒褐色粘土～シルト　焼土塊，炭化物，土師質土器，瓦片多く含む　SK3001
5　灰黄色粘土ブロック（小），黄灰色粘土ブロック（中）やや多く含む　SD3007
6　黒褐色粘土ブロック（中）　SD3007
7　灰色シルトブロック（小）　SD3007
8　黄褐色粘土　古代基盤層　基本層序 4 層
9　にぶい黄色シルト　古代基盤層　基本層序 4 層

32-2Tr　調査区北壁



1　青灰色シルト（旧耕作土）
2　灰色シルト（上面 Mn 沈着）中世 14c 以降包含層　2 層で取り上げ
3a　黒褐色粘土（粗砂をやや多く含み，土師質土器細片，焼土粒，炭化物多く含む）　3 層上位で取り上げ　12c 包含層
3b　黒褐色粘土（焼土粒，炭化物が少なく，3a 層に比べ灰黄色粘土の偽礫をやや多く含む）　3 層下位で取り上げ　12c 包含層
3c　灰黄色粘土（焼土粒，炭化物が少なく，黄褐色シルトの偽礫を多く含む）　3 層下位で取り上げ　12c 包含層
4a　灰黄色シルト（全体に灰黄色の偽礫を多く含み，人為的な埋め戻し層，10 層と比較して，粒径が粗い）　4 層上位で取り上げ　10c 包含層
4b　濁灰黄色シルト（灰黄色粘土の偽礫を多く含む，人為的な埋め戻し層）　4 層上位で取り上げ　10c 包含層
5a　暗灰色粘土　湿地性堆積物　5c 上位で取り上げ
5b　暗灰色シルト（10 層起源の黄褐色シルトの偽礫を多く含む）　微高地斜面堆積　5 層上位で取り上げ　8c 包含層
5c　黒褐色粘土　湿地性堆積物　5 層下位で取り上げ　8c 包含層
5d　灰黄色粘土（黄灰色シルトの偽礫を多く含む）　微高地斜面堆積　5 層下位で取り上げ　8c 包含層
5e　黒色粘土　湿地性堆積物　5 層下位で取り上げ　8c 包含層
5f　灰色粗砂　河川堆積物　無遺物層
6　灰色砂礫　Φ3～5cm の砂岩礫，灰色粗砂に位の黒色粘土が貫入する　無遺物層
7　黒褐色粘土（焼土粒，炭化物やや多く含む）　3 層上面から掘り込まれるピットの柱痕
8　灰黄色粘土ブロック　3 層上位より掘り込まれるピットの裏込め土
9a　灰色粗砂（ラミナ有り）　縄文晩期以前の堆積層　弥生以降の基礎層（上部削平）
9b　黄灰色シルト　縄文晩期以前の堆積層　弥生以降の基礎層
9c　灰色粘土　縄文晩期以前の堆積層
10a　灰色粗砂 (ラミナ有り) 縄文晩期以前の堆積層　弥生以降の基礎層 (上部削平)
10b　黄灰色シルト　縄文晩期以前の堆積層　弥生以降の基礎層 (上部削平)
10c　灰色粘土　縄文晩期以前の堆積層

0　（縦 1:40，横 1:80）　4m

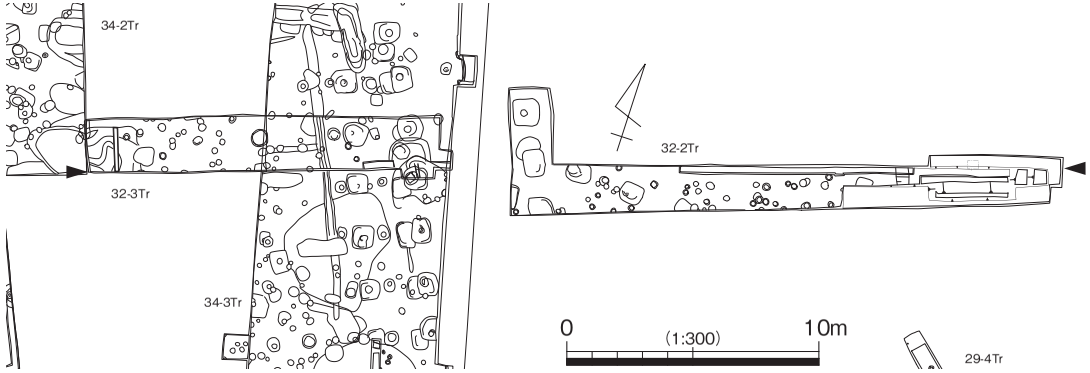


図 116-1　32-2Tr 各壁断面図

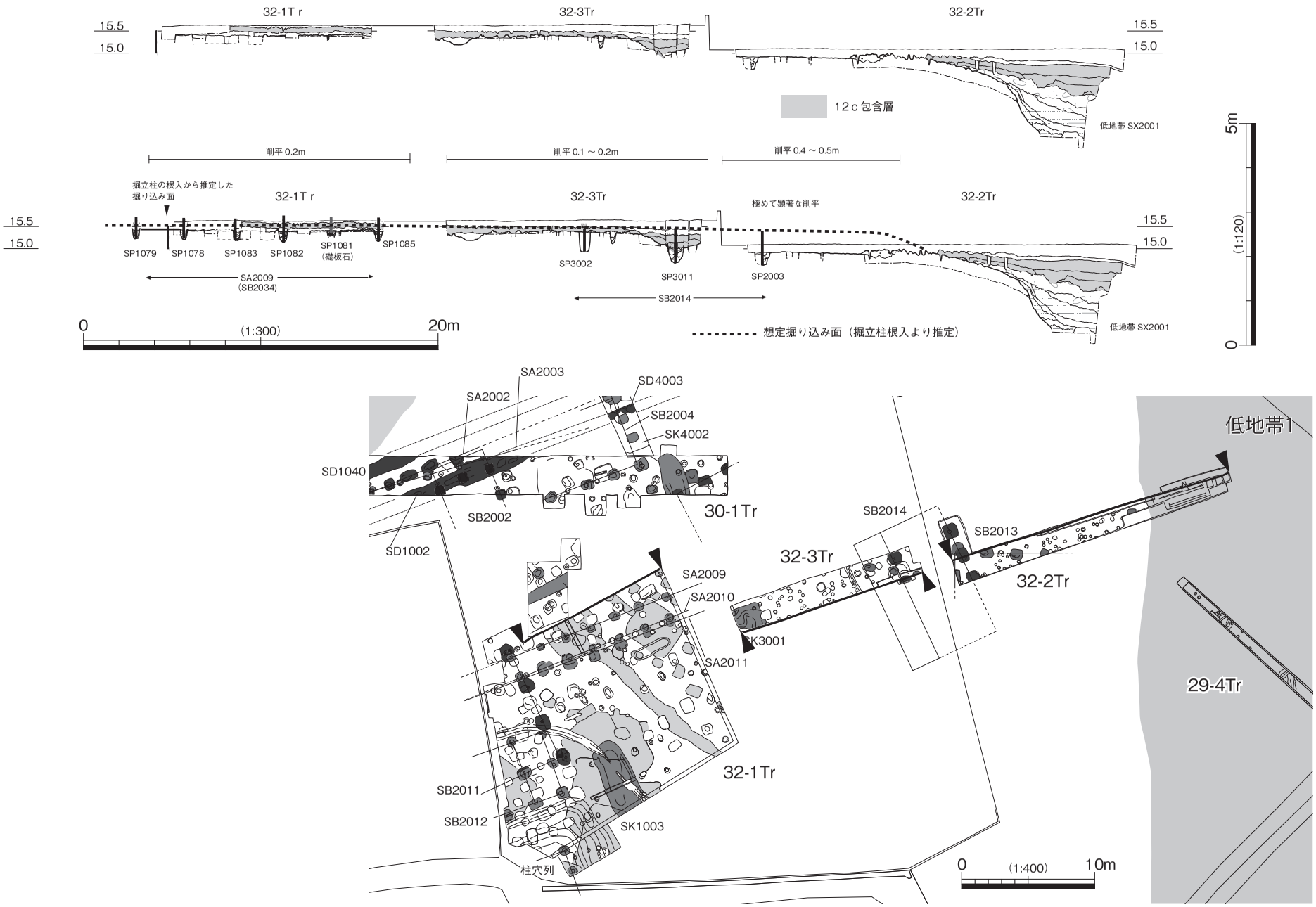
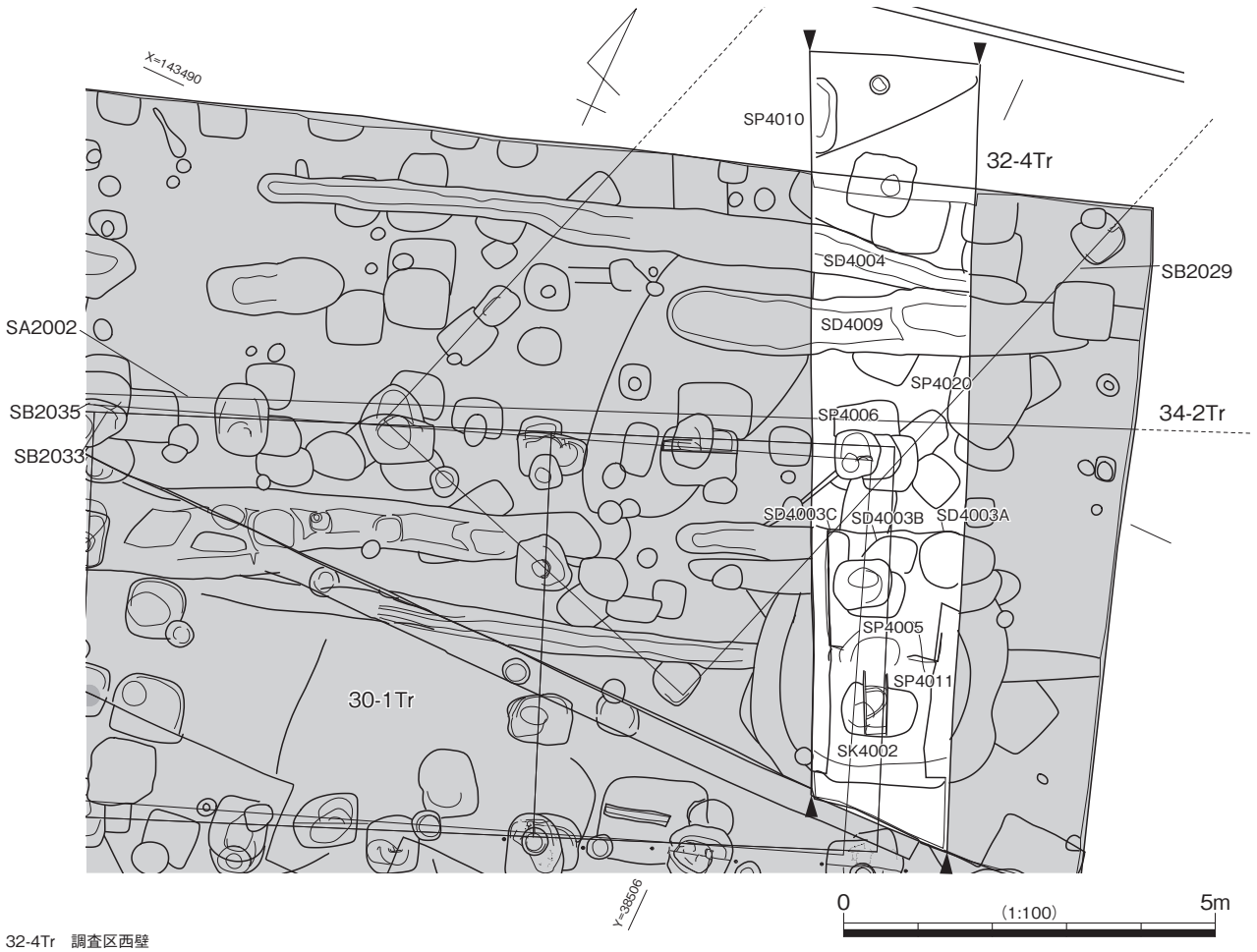
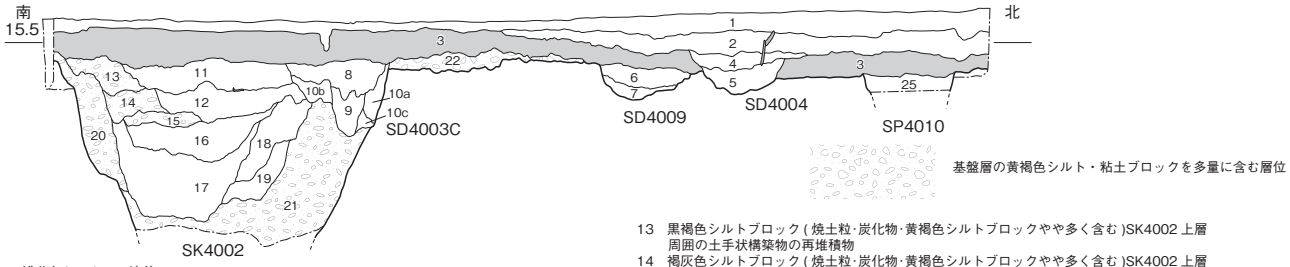


図 116-2　32 次調査区周辺の旧地形推定

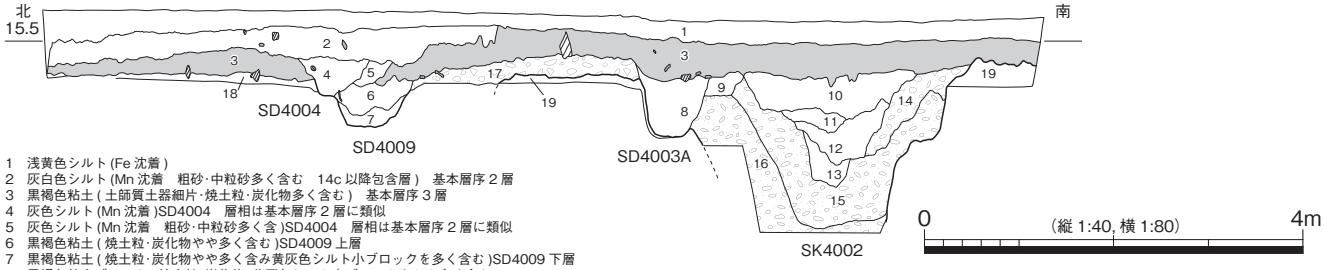


32-4Tr　調査区西壁



1　浅黄色シルト (Fe 沈着)
2　灰白色シルト (Mn 沈着　粗砂･中粒砂多く含む　14c 以降包含層)　基本層序 2 層
3　黒褐色粘土 (土師質土器細片･焼土粒･炭化物多く含む)　基本層序 3 層
4　灰色シルト (Mn 沈着)SD4004　層相は基本層序 2 層に類似
5　灰色シルト (Mn 沈着　粗砂･中粒砂多く含)SD4004　層相は基本層序 2 層に類似
6　黒褐色粘土 (焼土粒･炭化物やや多く含む)SD4009 上層
7　黒褐色粘土 (焼土粒･炭化物やや多く含み黄灰色シルト小ブロックを多く含む)SD4009 下層
8　黒褐色粘土ブロック (焼土粒･炭化物･黄灰色シルト小ブロックをやや多く含む)SD4003C
9　暗灰黄色シルトブロック (焼土粒･炭化物をやや多く、明黄褐色シルトブロックを多く含む)SD4003C
10a　黒褐色粘土ブロック (焼土粒･炭化物を少量含む)SD4003C
10b　黒褐色粘土ブロック (焼土粒･炭化物を少量、黄灰色シルト小ブロックをやや多く含む)SD4003C
10c　黒褐色粘土ブロック (黄灰色シルト小ブロックをやや多く含む)SD4003C
11　褐灰色粘土ブロック (焼土粒･炭化物をやや多く含む)SK4002 上層
12　黒褐色粘土ブロック (焼土粒･炭化物をやや多く含む)SK4002 上層
13　黒褐色シルトブロック (焼土粒･炭化物･黄褐色シルトブロックやや多く含む)SK4002 上層
　　周囲の土手状構築物の再堆積物
14　褐灰色シルトブロック (焼土粒･炭化物･黄褐色シルトブロックやや多く含む)SK4002 上層
　　周囲の土手状構築物の再堆積物
15　灰黄褐色シルト (淡黄色シルトの小ブロックを多く含む)SK4002 上層
16　黒褐色シルト (焼土粒･炭化物をやや多く含む)SK4002 上層
17　にぶい黄橙色シルト (灰黄色シルト･黒褐色シルトの小ブロックをやや多く含む)SK4002 上層
18　灰黄色シルト (灰黄色シルト･黒褐色シルトの小ブロックをやや多く含む)SK4002 上層
19　灰黄褐色シルト (焼土粒･炭化物･灰黄色シルト･黒褐色シルトの小ブロックをやや多く含む)SK4002 上層
20　褐灰色粘土ブロック (明黄褐色粘土の小ブロックを極めて多く含む)SK4002 中層
　　周囲の土手状構築物の再堆積物
21　暗灰黄色粘土ブロック (明黄褐色粘土の小ブロックを極めて多く含む)SK4002 最下層
　　掘り方掘削直後の置土？　遺構中央下層の焼土･貼土より下位
22　黄褐色粘土ブロック (黄灰色粘土ブロックを極めて多く含む)SD4003･4009 間の築土？
23　明黄褐色シルト　古代基盤層
24　黒褐色シルト (焼土粒少量含む)7c 代竪穴建物の埋土
25　黒褐色粘土ブロック (焼土粒･炭化物やや多く含む)SP4010　7c 竪穴建物を切る条里方位柱穴

32-4Tr　調査区東壁



1　浅黄色シルト (Fe 沈着)
2　灰白色シルト (Mn 沈着　粗砂･中粒砂多く含む　14c 以降包含層)　基本層序 2 層
3　黒褐色粘土 (土師質土器細片･焼土粒･炭化物多く含む)　基本層序 3 層
4　灰色シルト (Mn 沈着)SD4004　層相は基本層序 2 層に類似
5　灰色シルト (Mn 沈着　粗砂･中粒砂多く含)SD4004　層相は基本層序 2 層に類似
6　黒褐色粘土 (焼土粒･炭化物やや多く含む)SD4009 上層
7　黒褐色粘土 (焼土粒･炭化物やや多く含み黄灰色シルト小ブロックを多く含む)SD4009 下層
8　黒褐色粘土ブロック (焼土粒･炭化物･黄灰色シルト小ブロックをやや多く含む)SD4003A
9　黒褐色粘土ブロック (焼土粒･炭化物を少量含む)SD4003A
10　暗灰黄色粘土 (焼土小塊･炭化物やや多く含む)SK4002 上層
11　黄灰色粘土 (焼土小塊･炭化物やや多く含み、灰黄色シルトの小ブロックをやや多く含む)SK4002 上層
12　灰黄色シルト (焼土小塊･炭化物を少量、黄灰色粘土の小ブロックをやや多く含む)SK4002 中層
13　灰オリーブ色シルト (灰黄色シルトの小ブロックをやや多く含む)SK4002 中層
14　黄灰色粘土ブロック (明黄褐色粘土の小ブロックを極めて多く含む)SK4002 中層
　　周囲の土手状構築物の再堆積物
15　暗灰黄色粘土ブロック (明黄褐色粘土の小ブロックを極めて多く含む)SK4002 最下層
　　掘り方掘削直後の置土？　遺構中央下層の焼土･貼土より下位
16　明黄褐色粘土ブロック (明黄褐色粘土の小ブロックを極めて多く含む)SK4002 最下層
　　掘り方掘削直後の置土？　遺構中央下層の焼土･貼土より下位
17　黄褐色粘土ブロック (黄灰色粘土ブロックを極めて多く含む)
18　黒褐色シルト (焼土粒少量含む)7c 代竪穴建物の埋土
19　明黄褐色シルト　古代基盤層

図 117　32-4Tr 遺構平面図、各壁断面図

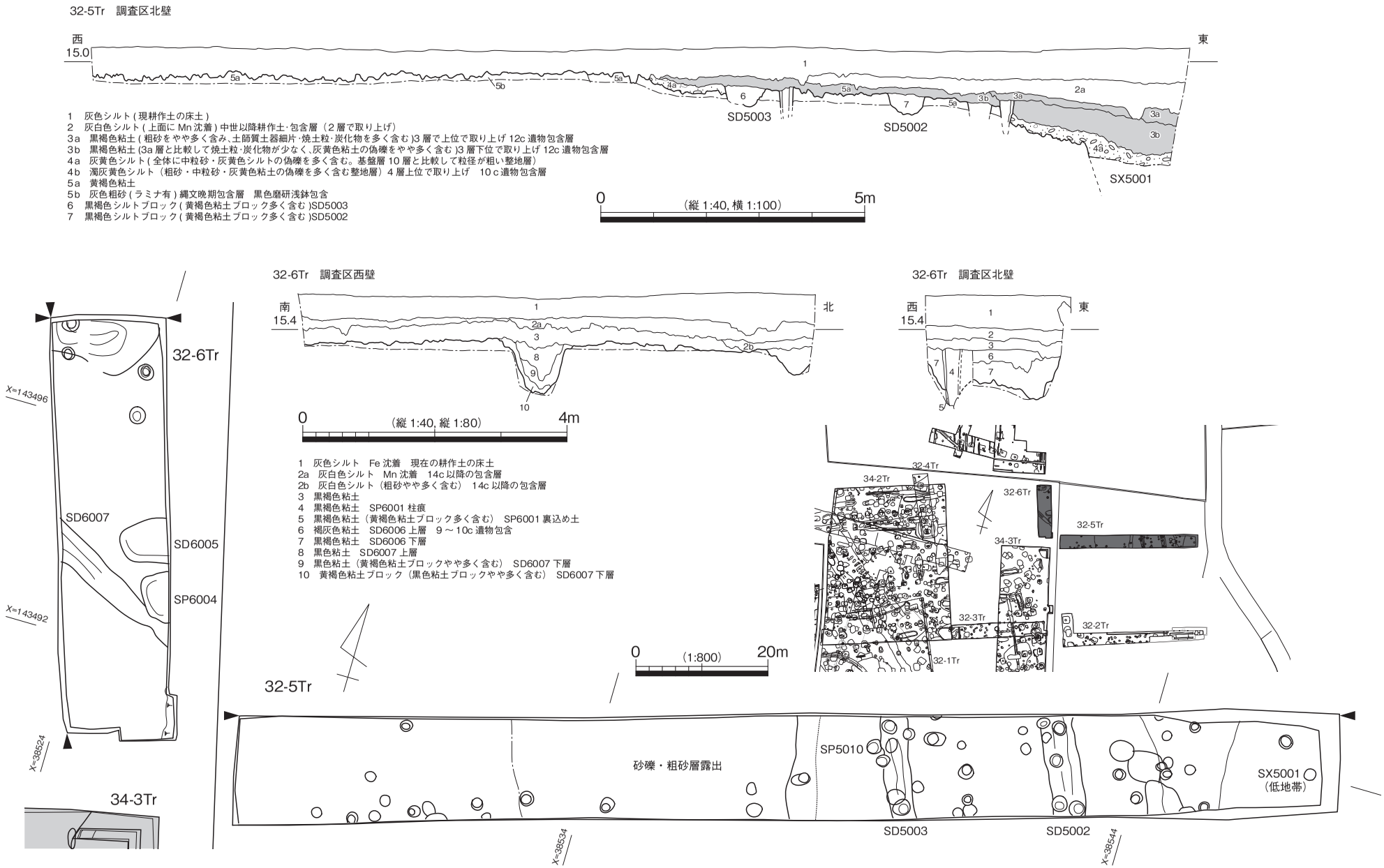


図 118　32-5・6Tr 遺構平面図、各壁断面図

とした黒褐色系粘土である。この３層は 32-1 トレンチ２層、32-4 トレンチ３層に層序対比されるものであるが、本トレンチでは焼土・炭化物を交えず、土器・瓦等の遺物を殆ど含んでいないという相違点が認められる。このため、本トレンチ３層の形成年代は不明とせざるを得ない。

３層の下位は古代以降の基盤層となる黄褐色シルトである。

各層からの出土遺物（図 119 ～ 122）

１～６は 32-1 トレンチ１層からの出土遺物である。１は畿内系土師器杯であり、７世紀中葉の所産とみられる。２は緑釉陶器椀であり、洛北産の９世紀後半の資料とみられる。３は須恵器甕の胴部の内面を利用した転用硯。４は小片ながら焼塩土器の口縁部片とみられる。５は白色凝灰岩の小片で、辛うじて加工面をとどめている。軒丸瓦（６）は KH106 型式であり、開法寺跡で８世紀前葉の年代が想定されている資料である。

７～ 51 は 32-1 トレンチ２層からの出土遺物である。黒色土器椀（９.10）は、形態からみて 11 世紀末から 12 世紀前葉の資料と考えられる。12 ～ 25 は施釉陶器である。緑釉陶器椀（12）は洛西産の９世紀中葉から後葉の資料。緑釉陶器小椀（13）は近江産の 10 世紀後半の資料とみられる。緑釉陶器椀（14 ～ 17）は近江産の 10 世紀後半の資料である。緑釉陶器椀（18）は洛西産、あるいは篠産と推定され、10 世紀前半に位置付けられるものである。19 は猿投産の緑釉陶器段皿であり、９世紀中葉の優品である。緑釉陶器椀（20.21）は近江産の 10 世紀後半の資料である。灰釉陶器椀（22）は猿投産の９世紀中葉の資料と考えられる。23 は近江産の緑釉陶器椀であり 10 世紀後半に、24 は洛北産の緑釉陶器椀とみられ９世紀後半に比定される。25 は近江産の緑釉陶器皿であり、小片ながら 10 世紀後半の資料とみられる。

軒丸瓦（29.30）は KH106 型式。軒丸瓦中房片（31）は KH105 型式と考えられる。軒平瓦の瓦当小片（32）は KH202 型式。33 は器壁の薄さや断面形状からみて、熨斗瓦と考えられる。平瓦（34）は焼成が極めて良好であり、凸面は施釉、自然釉とも区別がつかない資料である。35 ～ 38 は白色凝灰岩片である。

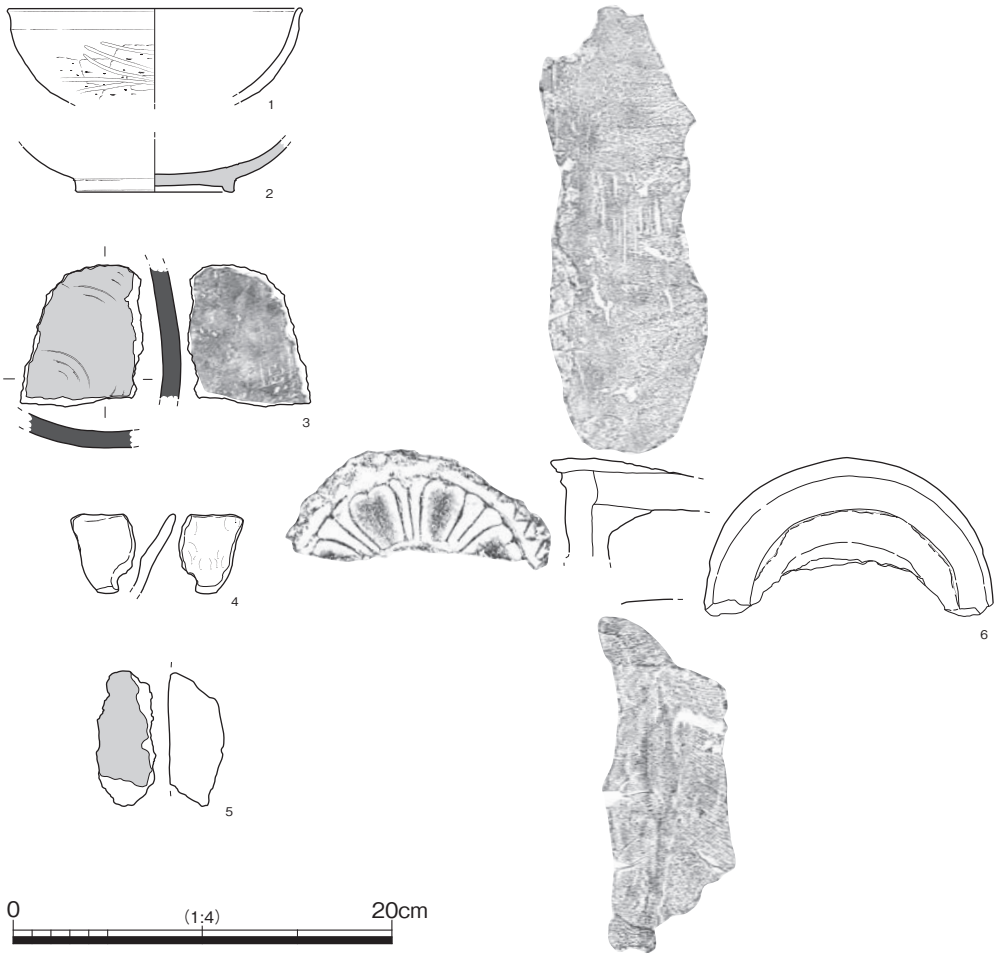


図 119　32-1Tr1 層出土遺物

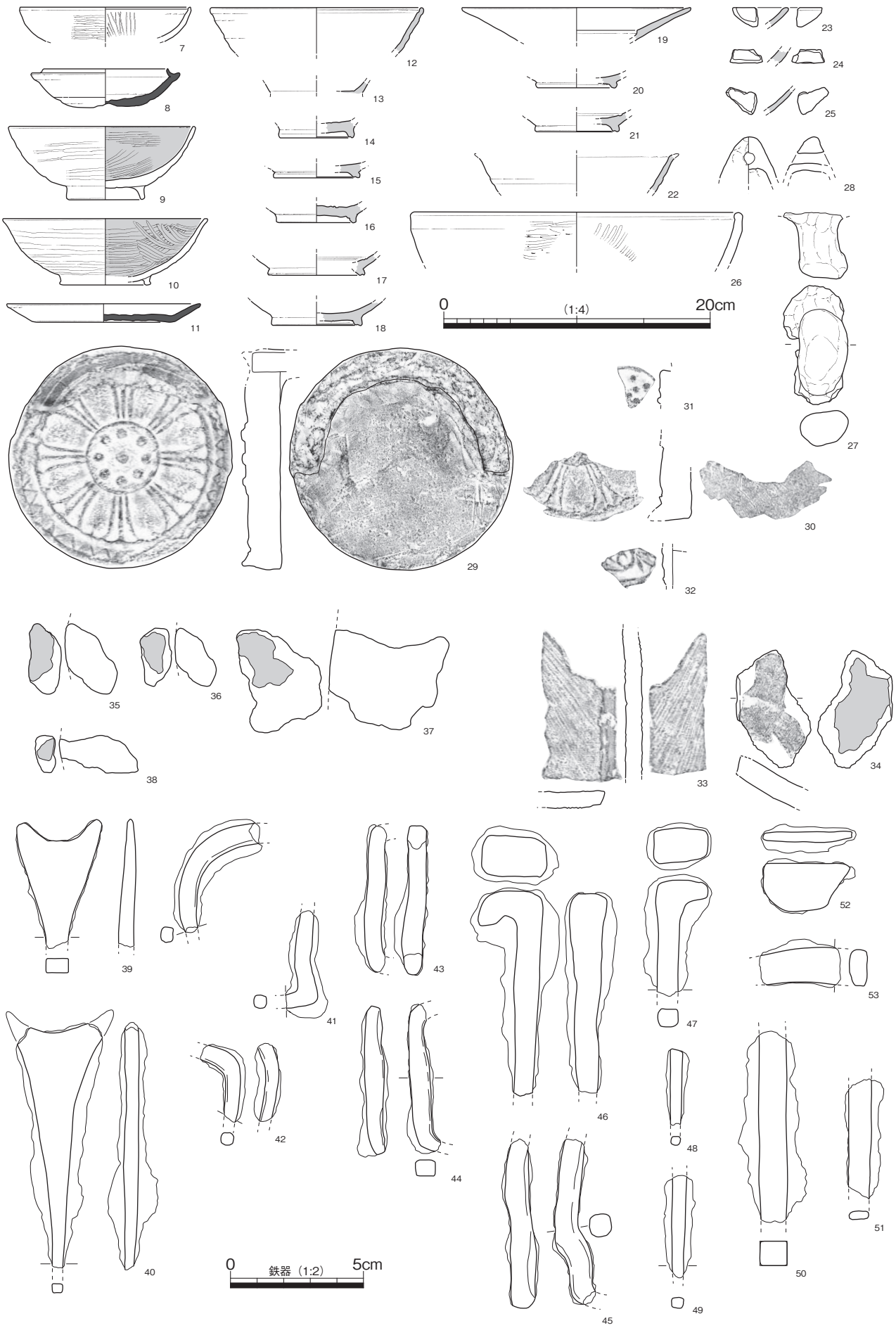


図 120　32-1Tr2 層出土遺物

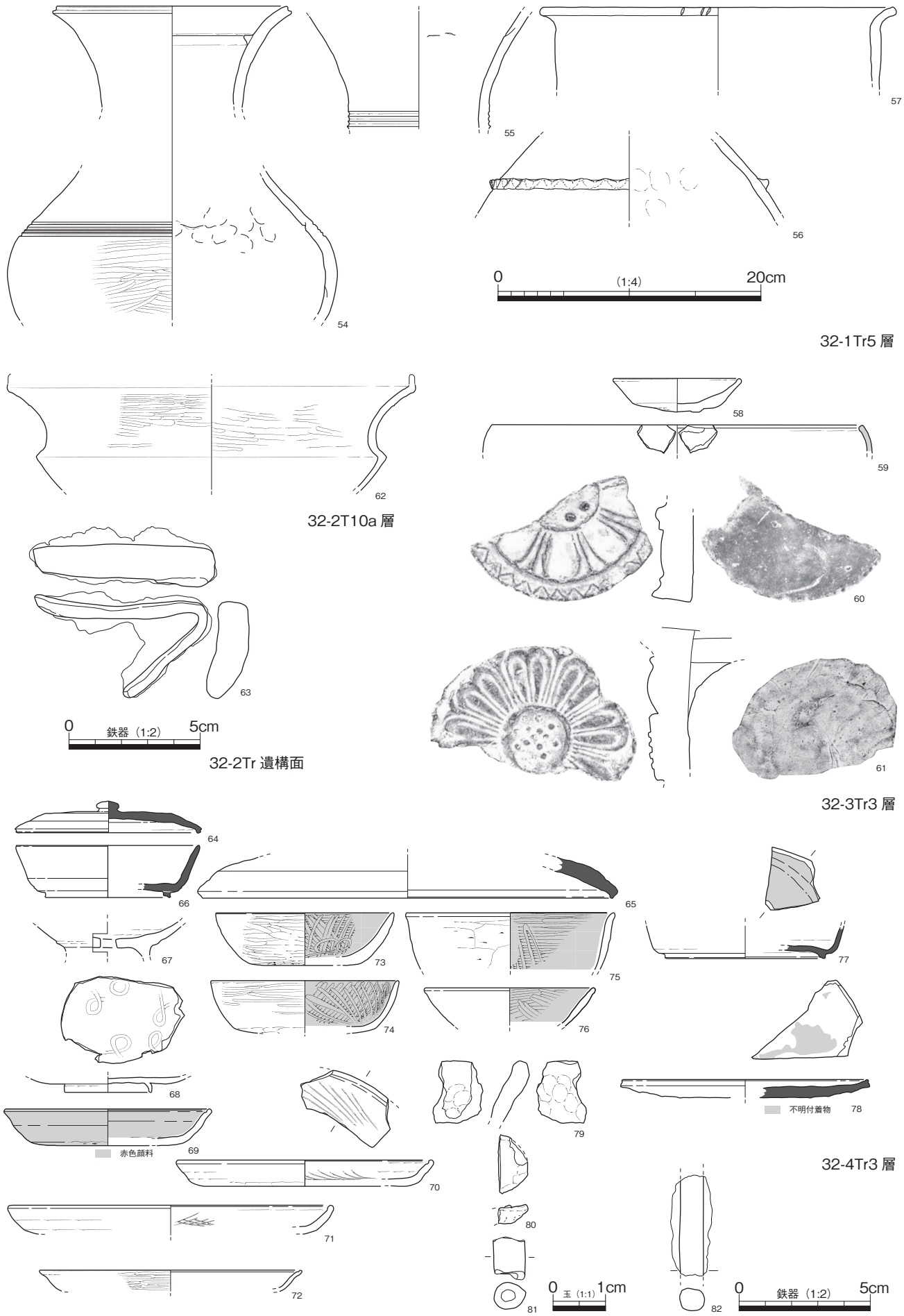


図 121　32-1Tr5 層・3Tr3 層・4Tr3 層出土遺物

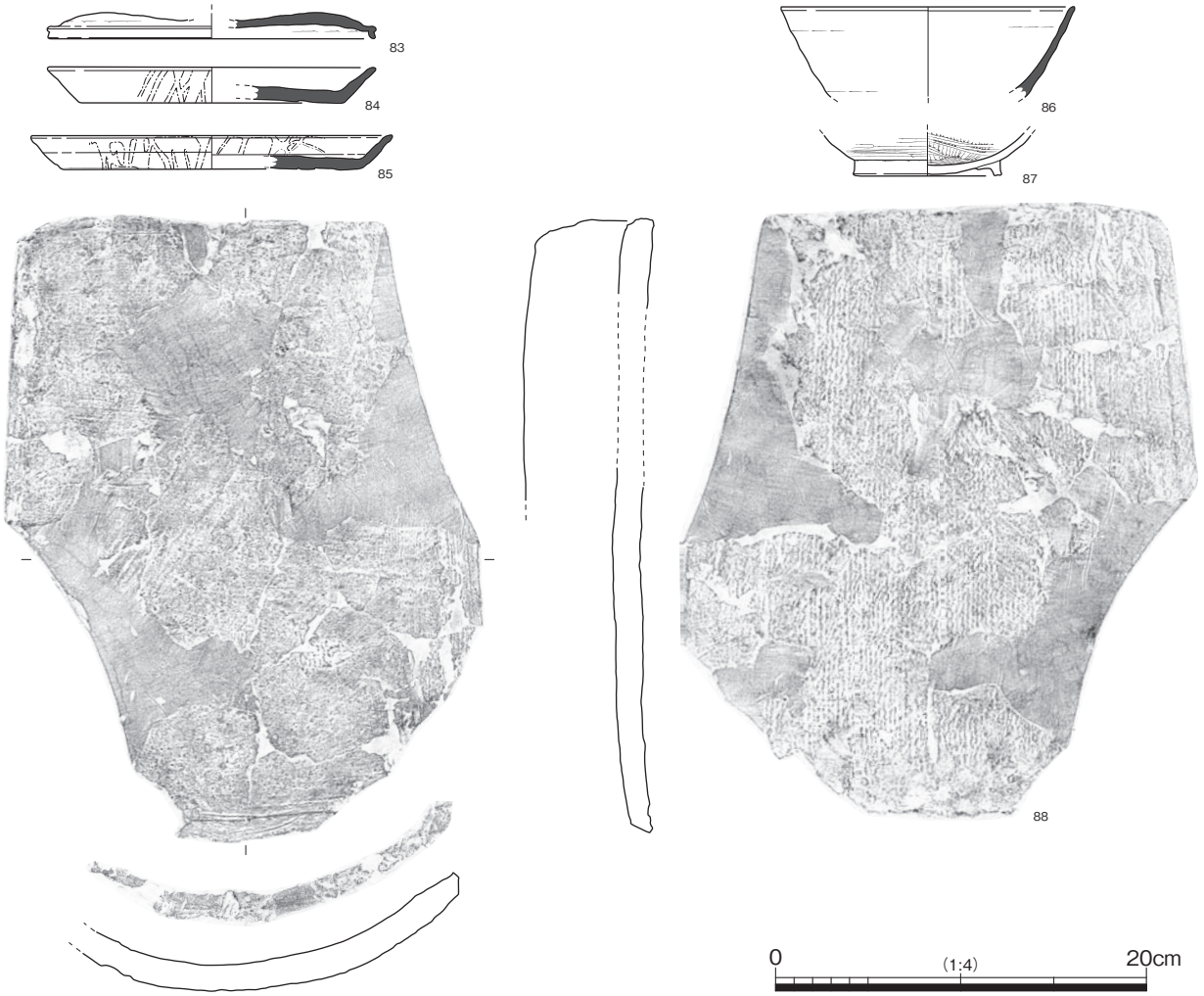


図 122　32-1Tr 南東部 4 層落ち込み出土遺物

39・40 は雁股型式の鉄鏃であり、８・９世紀の資料と考えられる。鉄器片（41 ～ 45）は、残存する形態からみて鉸具である可能性が高い。

54 ～ 57 は、32-2 トレンチ５層から出土した資料である。弥生土器壺（54 ～ 56）、同甕（57）は、発達した口縁部形態や、多条沈線、貼り付け突帯の形状から見て、弥生前期末葉の資料と考えられる。

62 は、32-2 トレンチ 10 a 層から出土した縄文土器浅鉢であり、形態から晩期前半期の所産とみられる。

63 は 32-2 トレンチの遺構面から出土した鉄器であり、折り曲げを受けた刀子であると考えられる。

58 ～ 61 は、32-3 トレンチ３層からの出土遺物。土師質土器杯（58）は 11 世紀前葉から中葉の資料と考えられる。軒丸瓦（60）は KH106 型式、同（61）は KH105 型式である。

64 ～ 82 は、32-4 トレンチ３層から出土した遺物である。73 ～ 76 は内黒の黒色土器杯であり、75 の外面には顕著なケズリ調整が確認できる。77 は須恵器杯内面を利用した転用硯。須恵器蓋（78）の内面には材不明の付着物がみられる。79 は焼塩土器であり、８世紀中葉の資料と考えられる。81 は滑石製の臼玉であり、下位の竪穴建物からの混入品と考えられる。

83 ～ 88 は、32-1 トレンチ南東部の４層とした SX1001 からの出土遺物である。須恵器蓋（83）、同杯（86）、同皿（84. 85）は概ね９世紀の資料。土師器椀（87）は 11 世紀代の資料と考えられる。

（3）検出遺構・出土遺物（32-1 トレンチ）

SB2008（図 123）

32-1 トレンチ北東部で検出した掘立柱建物である。梁行３間（５m）、桁行６間（9.8 m）の柱配置をもち、建物主軸は座標北から 72°西偏する東西棟となる。復元が正鵠を得たものであるならば、床面積は 49 ㎡となる。柱痕跡は平面で検出できず、東側桁行の SP1113 の断ち割りから外れた平面において径 0.15 mの柱痕跡を確認した。南側桁行の柱通りが悪いが、掘り方の芯々間で梁行 1.8 m、桁行 1.5 ～ 1.8 mと推定できる。

出土遺物に SP1090 の裏込土から出土した７世紀前葉から中葉とみられる土師器高杯（89）が存在するが、詳細な時期決定には至らない。正方位を指向する建物主軸からみて、７世紀後葉から末の所産と推定しておきたい。

SB2009（図 123）

32-1 トレンチ東部で確認した掘立柱建物である。SP1009. 1044 の検出のみにとどまるが、両柱穴とも平面的に明確な輪郭をもって検出されたことや、SP1009 の深度や埋没土の入念な埋め戻し状況を考慮し、建物として報告しておきたい。

検出状況から判断して、建物主軸が座標北から 70°西偏する東西棟と推定できる。時期決定可能な出土遺物がみられないが、SB1201 との方位の類似性や位置関係を考慮して、７世紀後葉から末の所産と推定しておきたい。

SB2010（図 124.125）

32-1 トレンチ南西部で検出した掘立柱建物であり、建物主軸は座標北に合致する。本次調査では、北側梁行１間、東側桁行４間を検出し、33 次調査により梁行２間（5.8 m）、桁行４間以上（5.4 m）の正方位を指向する南北棟であることが確認された。

出土遺物として、東側桁行 SP1072 の上層から出土した須恵器高杯（90. 91）と平瓦片（92）がある。これらの資料の柱穴内の帰属層位は不明であるが、遺物の年代観や建物方位から、７世紀後葉から８世紀初頭の大型建物であることは推定できるが、詳細は 33 次調査の報告に譲ることにしたい。

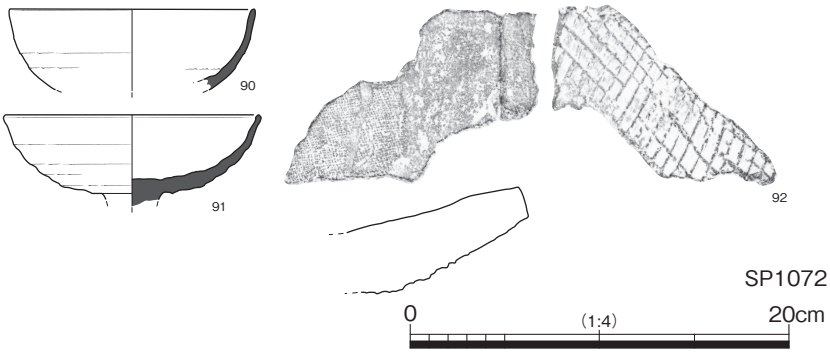


図 125　32-1Tr・SB2010 出土遺物

SB2011（図 126.127）

32-1 トレンチ西部で確認した大型建物である。30 次調査 30-3 トレンチにおいて、SP3005. 3006. 1051. 1050 を検出していたが、本次調査でその周囲の調査を進めた結果、梁行２間（６m）、南北３間（8.7 m）を検出した。更に平成 27 年度の西側隣接地で実施した 33 次調査において、梁行２間（7.6 m）、桁行（8.7 m）の柱配置をもち、建物主軸が座標北から 26°西偏する南北棟であることが確認された。

詳細については、33 次調査報告の項に譲るとして、ここでは出土遺物（93. 94）を提示することにとどめておきたい。

SB2012（図 128）

32- １トレンチ南西部で検出した掘立柱建物である。30 次調査 30-3 トレンチにおいて SP3005. 3007. 1027 を検出していたが、本次調査でその周囲の調査を進めた結果、梁行２間（4.8 m）、桁行２間以上（1.5 m）を測る東西棟の総柱建物であることが判明した。更に、平成 27 年度の西側隣接地における 33 次調査を経て、梁行２間（4.8 m）、桁行３間（7.8 m）の総柱建物であることが確定した。

詳細は、33 次調査の項において行うことにして、出土遺物（96 ～ 100）を提示することにとどめておきたい。

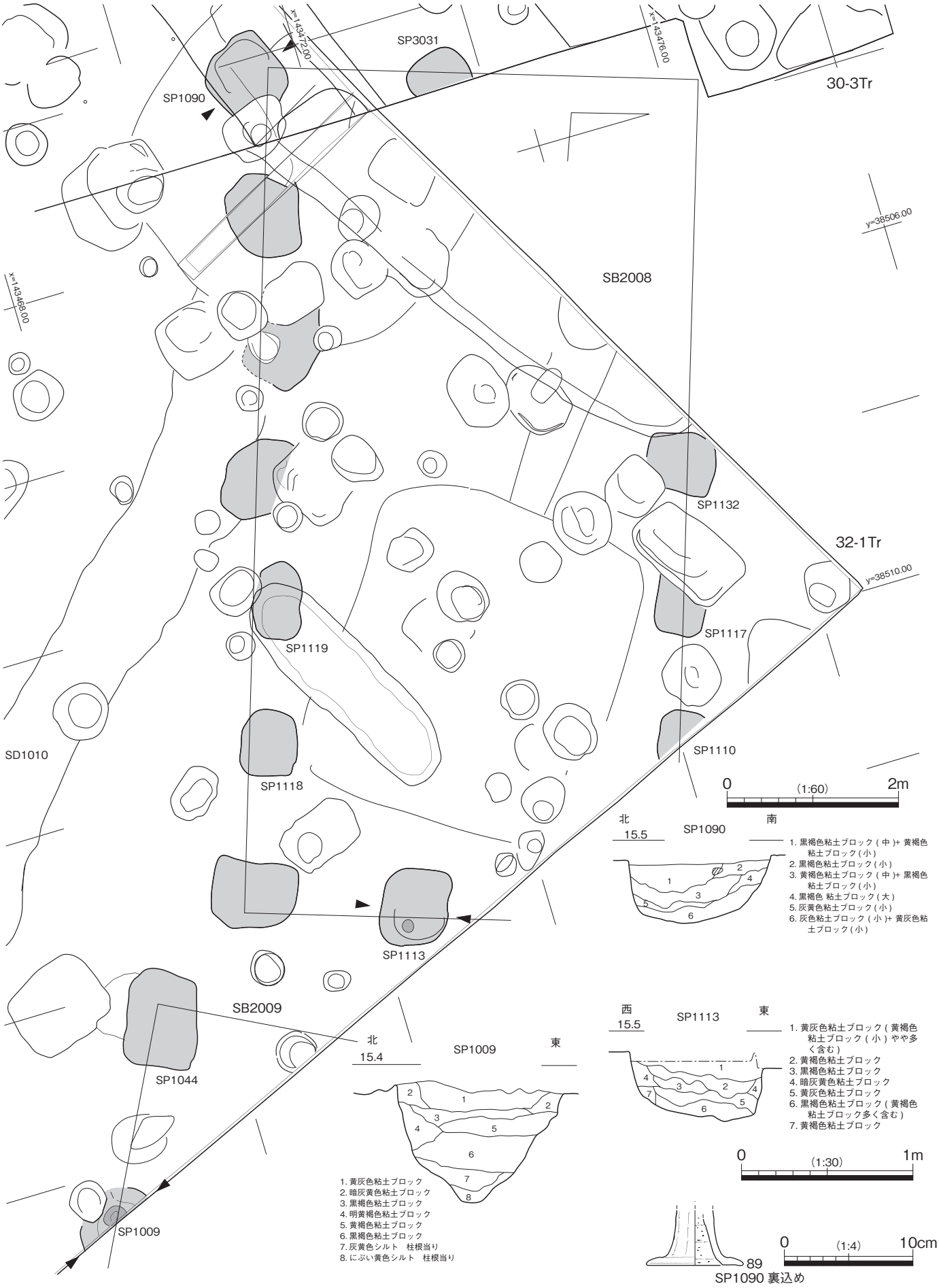
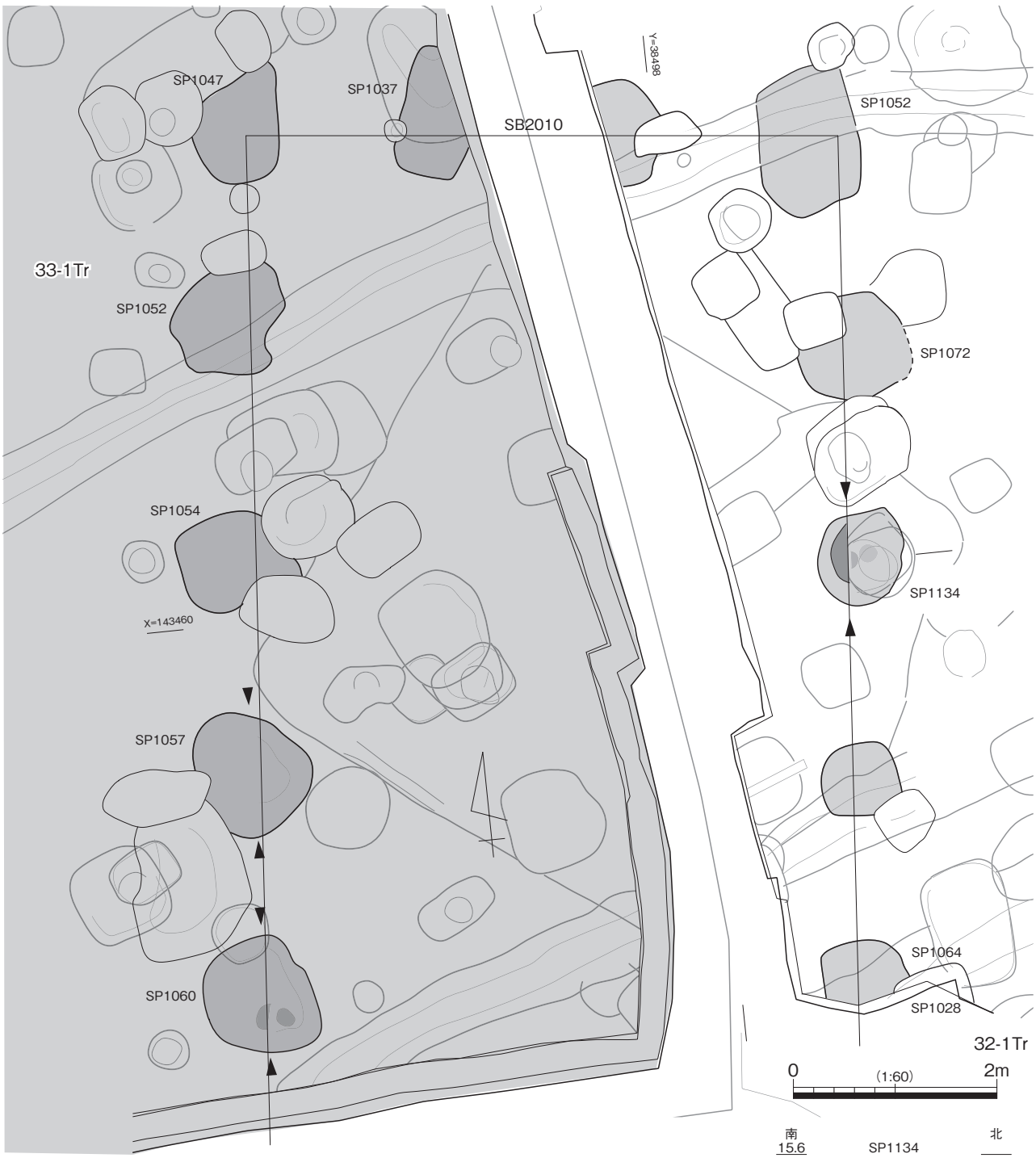
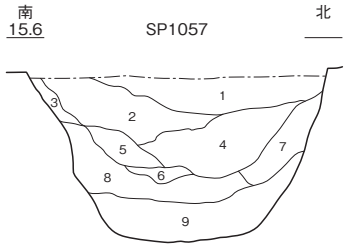
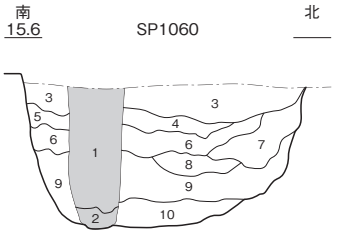


図 123　32-1Tr・SB2008.2009 平断面図及び出土遺物

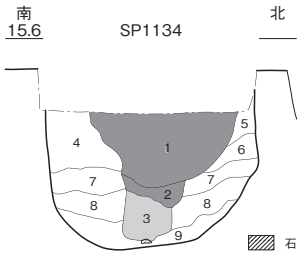




1　黒褐色粘土ブロックΦ5～８㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1～４㎝やや多く含む）
2　黒色粘土ブロックΦ5～８㎝
3　灰黄色粘土ブロックΦ1～４㎝
4　黒色粘土ブロックΦ9㎝以上
5　黒褐色粘土ブロックΦ5～８㎝
6　黒色粘土ブロックΦ9㎝以上
7　黒灰色粘土ブロックΦ5～８㎝
8　黒色粘土ブロックΦ5～８㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1～４㎝やや多く含む）
9　黒色粘土ブロックΦ1～４㎝（黄褐色粘土ブロックΦ5～８㎝多く含む）
※柱痕不明確



1　黒色粘土ブロックΦ5～８㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1～４㎝やや多く含む）柱痕
2　黄褐色粘土ブロックΦ1～４㎝柱痕
3　黒褐色粘土ブロックΦ9㎝以上（黄褐色粘土ブロックΦ1～４㎝やや多く含む）
4　灰褐色粘土ブロックΦ5～８㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1～４㎝やや多く含む）
5　黒色粘土ブロックΦ1～４㎝
6　黒褐色粘土ブロックΦ5～８㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1～４㎝やや多く含む）
7　灰黄褐色粘土ブロックΦ5～８㎝
8　黒色粘土ブロックΦ9㎝以上
9　黒色粘土ブロックΦ9㎝以上（黄褐色粘土ブロックΦ5～８㎝やや多く含む）
10　黒色粘土ブロックΦ9㎝以上（黄褐色粘土ブロックΦ9㎝以上やや多く含む）
※半裁位置やや柱痕からずれる．底面で柱の当たりを確認



1　黒褐色粘土ブロックΦ1～４㎝（灰色，黄色粘土ブロックΦ1～４㎝多く含む）抜き取り
2　灰黄色粘土ブロックΦ1～４㎝（黄色粘土ブロックΦ1～４㎝やや多く含む）抜き取り
3　黒褐色粘土　柱痕
4　黒色粘土ブロックΦ9㎝以上（灰色粘土ブロックΦ5～８㎝多く含む）
5　灰オリーブ色粘土ブロックΦ9㎝以上
6　黒褐色粘土ブロックΦ9㎝以上（黄褐色粘土ブロックΦ5～８㎝多く含む）
7　灰黄色粘土ブロックΦ1～４㎝（粗砂多く含む）
8　灰黄色粘土ブロックΦ5～８㎝（黒色粘土ブロックΦ5～８㎝多く含む）
9　黄褐色粘土ブロックΦ1～４㎝（黒褐色粘土ブロックΦ1～４㎝多く含む）

0　(1:30)　1m

図 124　32-1Tr・SB2010 平断面図

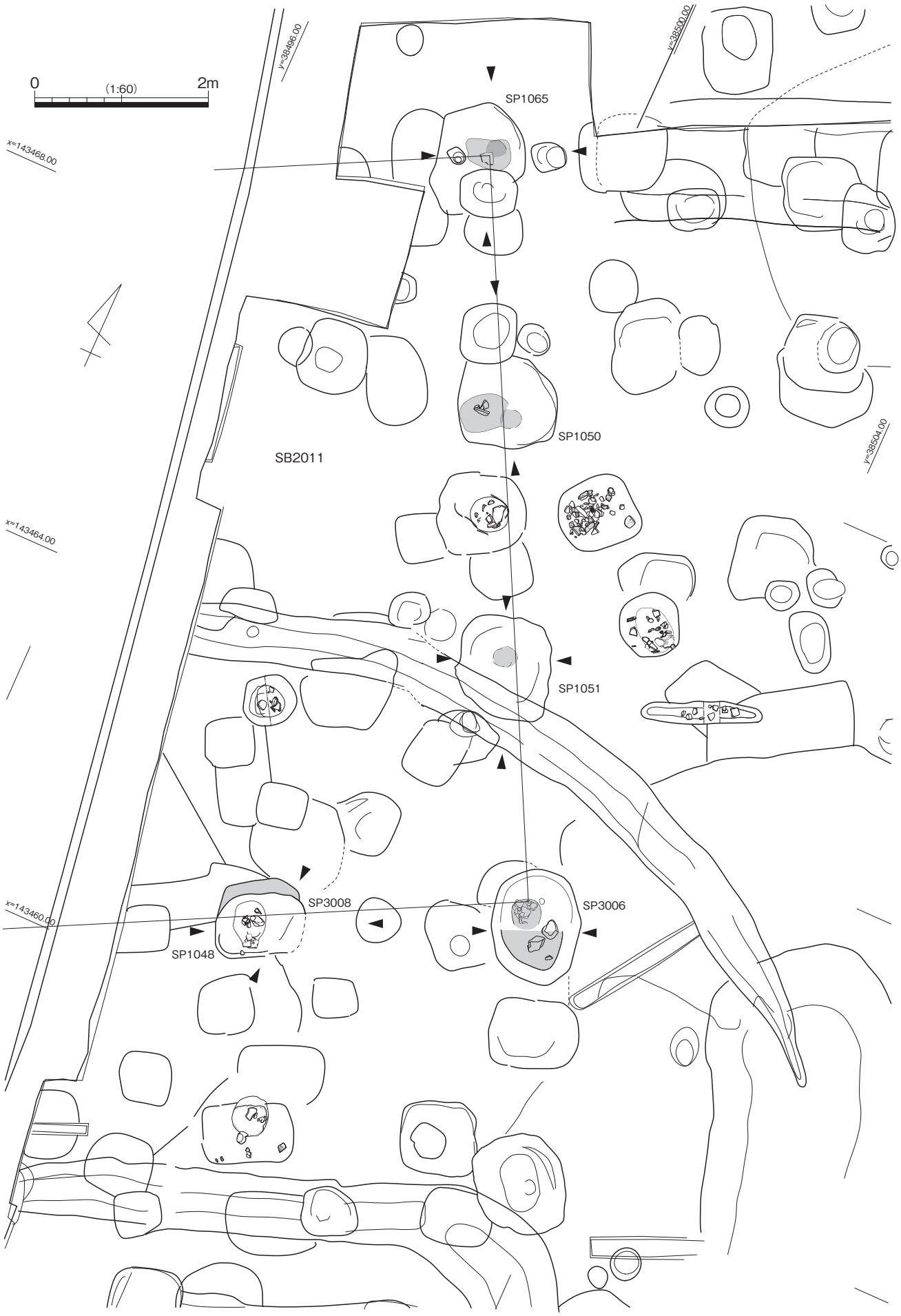
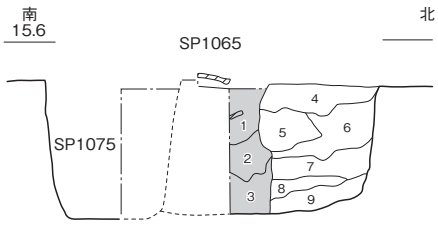
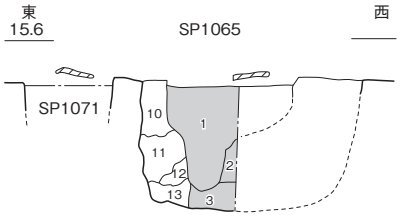
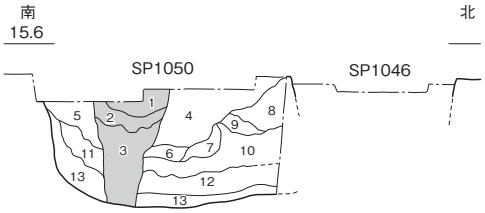


図 126　32-1Tr・SB2011 平面図



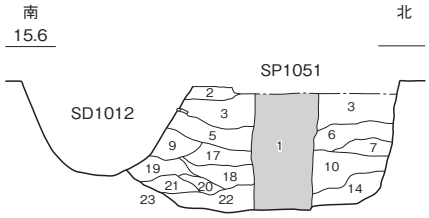


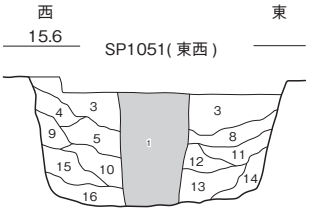
1. 黒褐色粘土　抜き取り
2. 暗灰黄色粘土ブロック　抜き取り
3. 黄灰色粘土ブロック　抜き取り
4. 黒褐色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロック多く含む)
5. 灰黄色粘土ブロック
6. 明黄褐色粘土ブロック
7. 黄灰色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロック多く含む)
8. 明黄褐色粘土ブロック
9. オリーブ褐色粘土ブロック
10. 黒褐色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロック多く含む)
11. 暗灰黄色粘土ブロック
12. 黄灰色粘土ブロック
13. 明黄褐色粘土ブロック



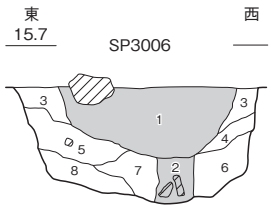
1. 黒色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロック多く含む) 抜き取り
2. 黄褐色粘土ブロック　抜き取り
3. 黒色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロック多く含む) 抜き取り
4. 褐灰色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロック少量含む)
5. 黒褐色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロック少量含む)
6. 灰黄褐色粘土ブロック
7. にぶい黄褐色粘土ブロック
8. 暗褐色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロック少量含む)
9. 黒褐色粘土ブロック
10. 灰黄褐色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロック少量含む)
11. 暗灰黄色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロック少量含む)
12. 黒褐色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロック少量含む)
13. 黄褐色粘土ブロック

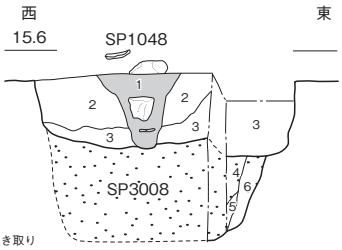
0　(1:30)　1m

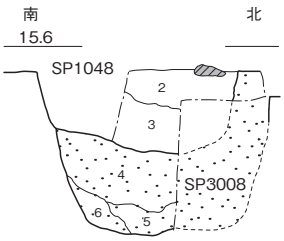




1. 灰色粘土 (焼土粒を少量含む) 柱痕
2. 黄灰色粘土ブロック
3. 暗灰黄色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロックやや多く含む)
4. 暗灰色粘土ブロック
5. 灰オリーブ色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロック少量含む)
6. 黄灰色粘土ブロック
7. 灰オリーブ色粘土ブロック (焼土粒少量含む)
8. 黄褐色粘土ブロック (黒褐色粘土ブロックやや多く含む)
9. 黒褐色粘土ブロック
10. 黒色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロックやや多く含む)
11. 暗灰黄色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロックやや多く含む)
12. 黒色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロックやや多く含む)
13. オリーブ黒色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロックやや多く含む)
14. 明黄褐色粘土ブロック
15. 黒褐色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロックやや多く含む)
16. 黄灰色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロックやや多く含む)
17. 黒褐色粘土ブロック
18. 暗褐色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロック少量含む)
19. 黒褐色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロック少量含む)
20. 黒色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロック少量含む)
21 褐灰色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロック少量含む)
22. 黄灰色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロック少量含む)



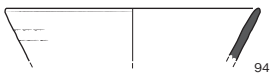




1. 黒褐色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロック (小) 焼土･炭化物やや多く含む) 抜き取り
2. 黒褐色粘土ブロック (下部に平瓦片多く含む) 抜き取り
3. 黄灰色粘土ブロック（黄褐色粘土ブロック多く含む）
4. 暗灰黄色粘土
5. 褐灰色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロックやや多く含む)
6. 黒灰色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロックやや多く含む)
7. 暗灰黄色粘土ブロック
8. 黄褐色粘土ブロック

1. 黒褐色粘土ブロック (焼土･炭化物多く含む) 抜き取り　SP1048
2. 黒褐色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロック多く含む)　SP1048
3. 灰褐色粘土ブロック (焼土･炭化物少量含む)　SP1048
4. 褐灰色粘土ブロック (焼土･炭化物やや多く含む)　SP3008
5. 黒色粘土ブロック (黄褐色粘土ブロック少量含む)　SP3008
6. 黄褐色粘土ブロック　SP3008

SP1051 柱痕



SP1065 柱痕

SP3006 裏込め（再掲載）

0　(1:4)　10cm

SB2011

図 127　32-1Tr・SB2011 断面図及び出土遺物

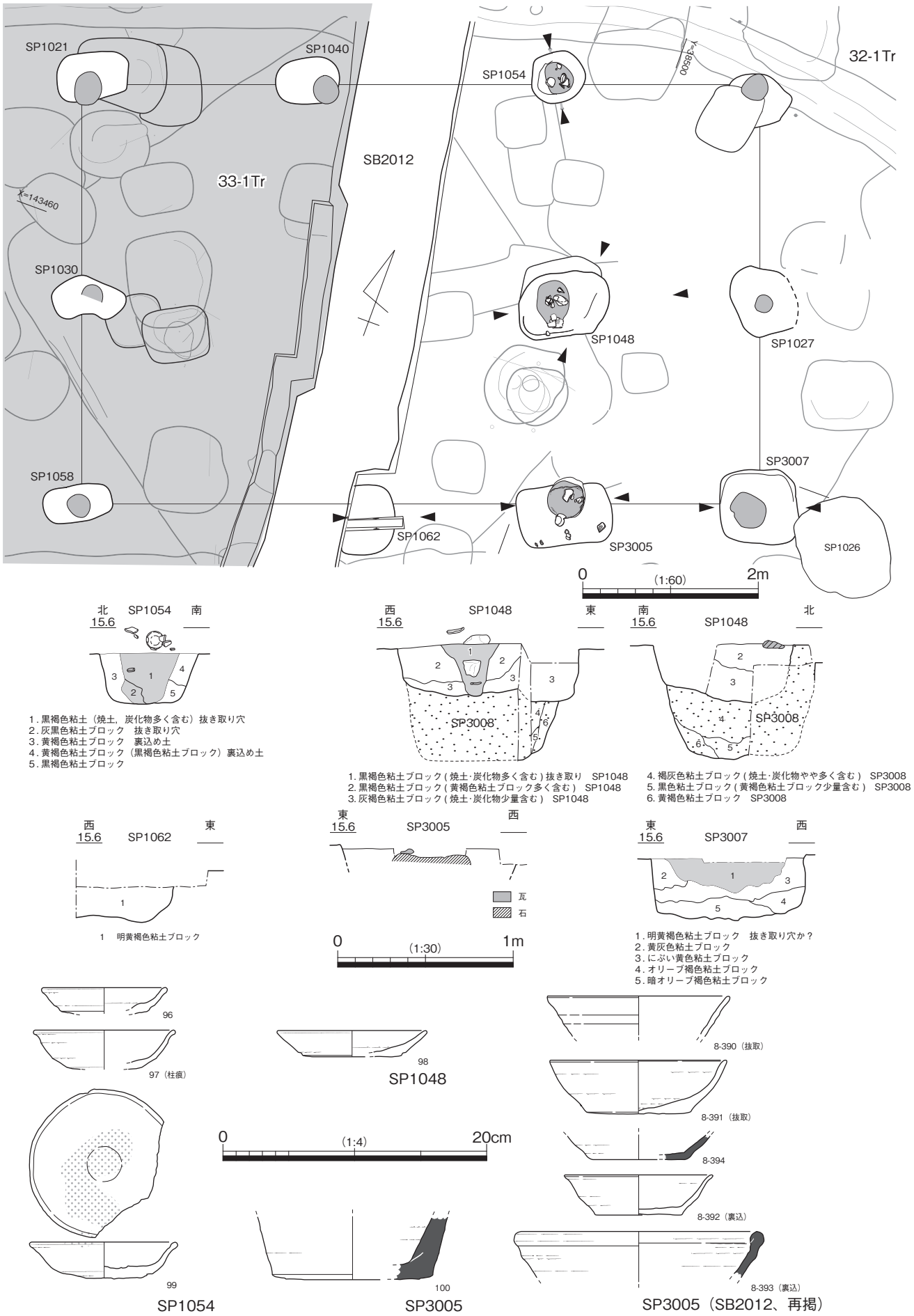


図 128　32-1Tr・SB2012 平断面図及び出土遺物

SA2009（図 129 ～ 131）

32-1 トレンチ北部で検出した東西方向の柱列である。本次調査においては建物と柵の判別を行うことはできなかった。西より、SP1075. 1079. 1078. 1083. 1082. 1081. 1085 が柱列を形成し、列の主軸方位は座標北から 111゜西偏する。抜き取りが行われた SP1079 を除く柱穴において、径 0. 15 ～ 0. 2 mの柱痕を確認しており、柱間は 1. 8 ～ 2. 4 mとバラツキがみられる。

また、SP1081 の柱の当たりには、安山岩製の礎盤石が据え付けられていた。礎盤石の据え付け高が、他の柱穴の柱の当たりより上位にあるため、改修等に伴い設置された可能性が高い。

101 ～ 104 は出土遺物である。土師質土器杯（101）は、SP1075 の上層から出土したもので、帰属する層位は不明確である。須恵器皿（102）は SP1078 の裏込土から出土した資料である。須恵器杯（103）は SP1079 の上面、土師器甕（104）は SP1079 の裏込土から出土したものである。

土師質土器（101）、須恵器杯（103）は 10 世紀前葉の資料とみられる。これらの帰属する層位は不明であるが、抜き取り等の廃絶に伴うものとして考え、本柱列の年代を 9 世紀から 10 世紀前葉と推定しておきたい。

SA2010（図 129 ～ 131）

32-1 トレンチ北部で検出した東西方向の柱列である。本次調査においては建物と柵の判別を行うことはできなかった。西から SP1049. 3009. 1024. 1023. 1018. 1014. 1013 が座標北から 111゜西偏する方位で並ぶ。後述する SA1204 を切り込むが、検出位置からみて同遺構の建て替え等により構築されたとみてよい。

SP1049 を除いた柱穴では抜き取りが行われているが、断ち割りを行った SP1014 では抜き取り下位において 0. 15 m の柱痕が確認された。現状からの推定される柱間は、1. 8 mと 2. 1 mのものが混在している。

105 ～ 107、8-397 ～ 8-400（30 次調査再掲）は出土遺物である。黒色土器椀（106）は京都系であり、9 世紀末から 10 世紀初頭の資料と考えられる。

これらのうち、SP3009 から出土した土師質土器杯（8-398）の年代観から、本遺構は 11 世紀前葉に廃絶したものと推定しておきたい。

上限年代については、先行する SA1204 の廃絶年代から、10 世紀中葉と推定しておきたい。

SA2011（図 129 ～ 131）

32-1 トレンチ北部で検出した東西方向の柱列である。本次調査においては建物と柵の判別を行うことはできなかった。西から SP1046. 3026. 1084. 1080. 1092. 1103. 1115 が座標北から 109゜西偏した方位で並ぶ。

110 ～ 114、8-402 ～ 8-407（再掲）は各柱穴からの出土遺物である。全体として出土遺物は古相を占めるものが多いが、SP3026 上層から出土した土師質土器杯（8-404）や、先行建物である SA1203 の年代観から、本遺構は 10 世紀中葉に廃絶したものと推定しておきたい。

柱穴等の出土遺物（図 132）

115 ～ 120 は、32-1 トレンチにおける建物復元に至らなかった柱穴や、溝等の遺構から出土した資料である。トレンチ全体の遺構形成時期を示す資料として提示しておきたい。

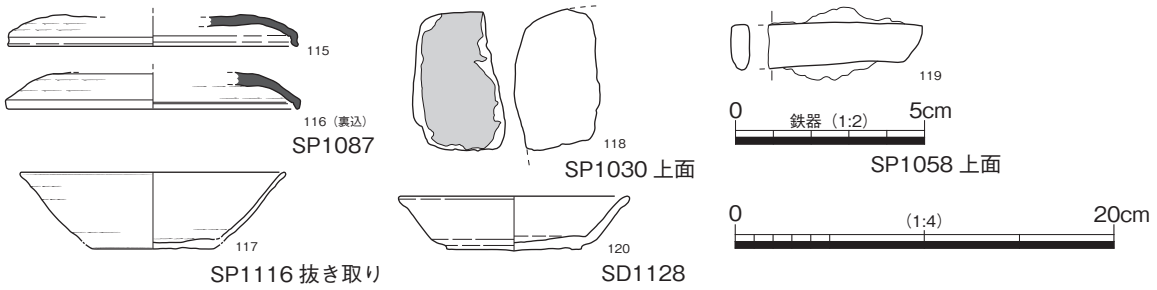


図 132　32-1Tr・柱穴、溝出土遺物

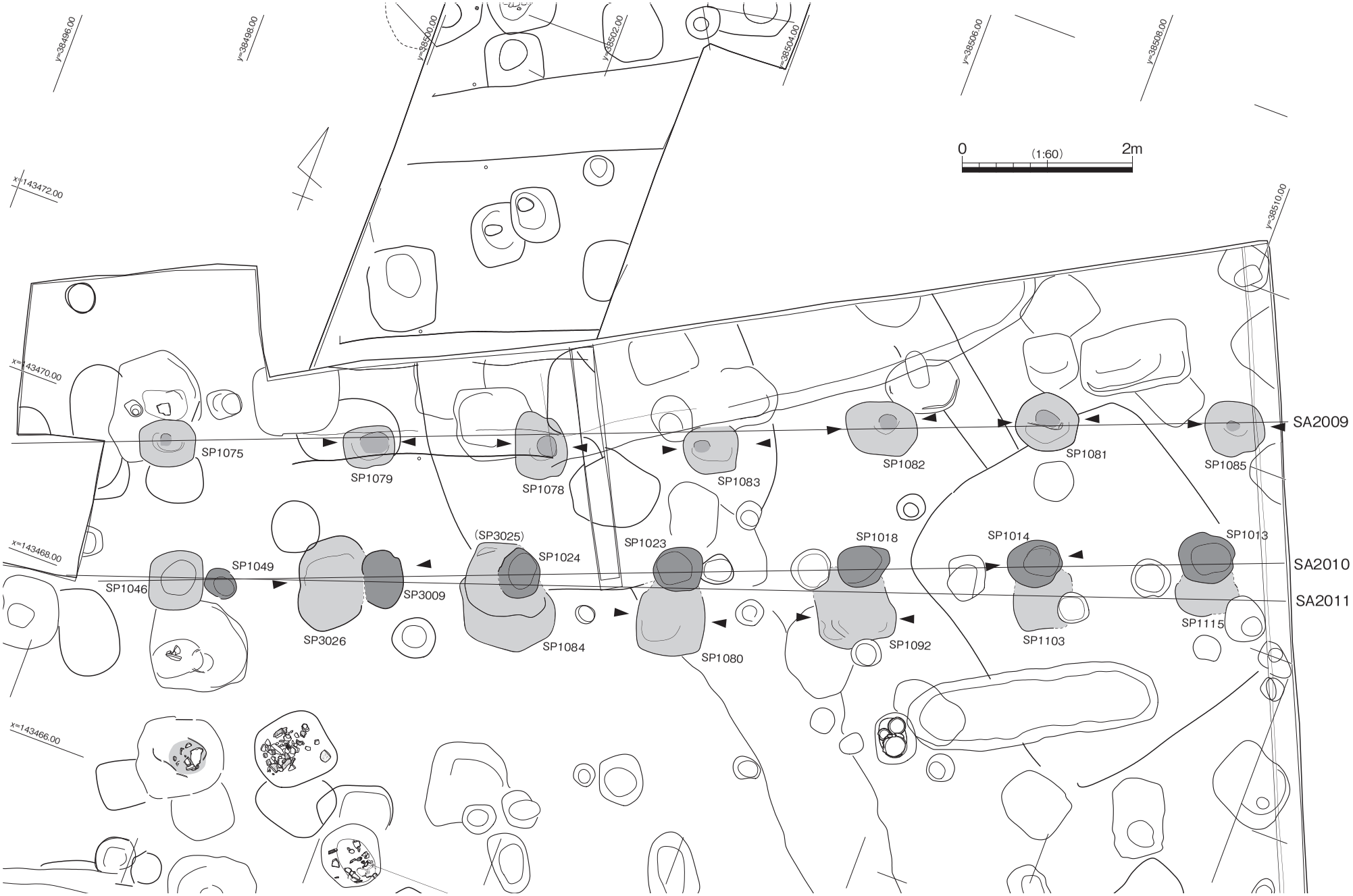


図 129　32-1Tr・SA2009 ～ 2011 平面図

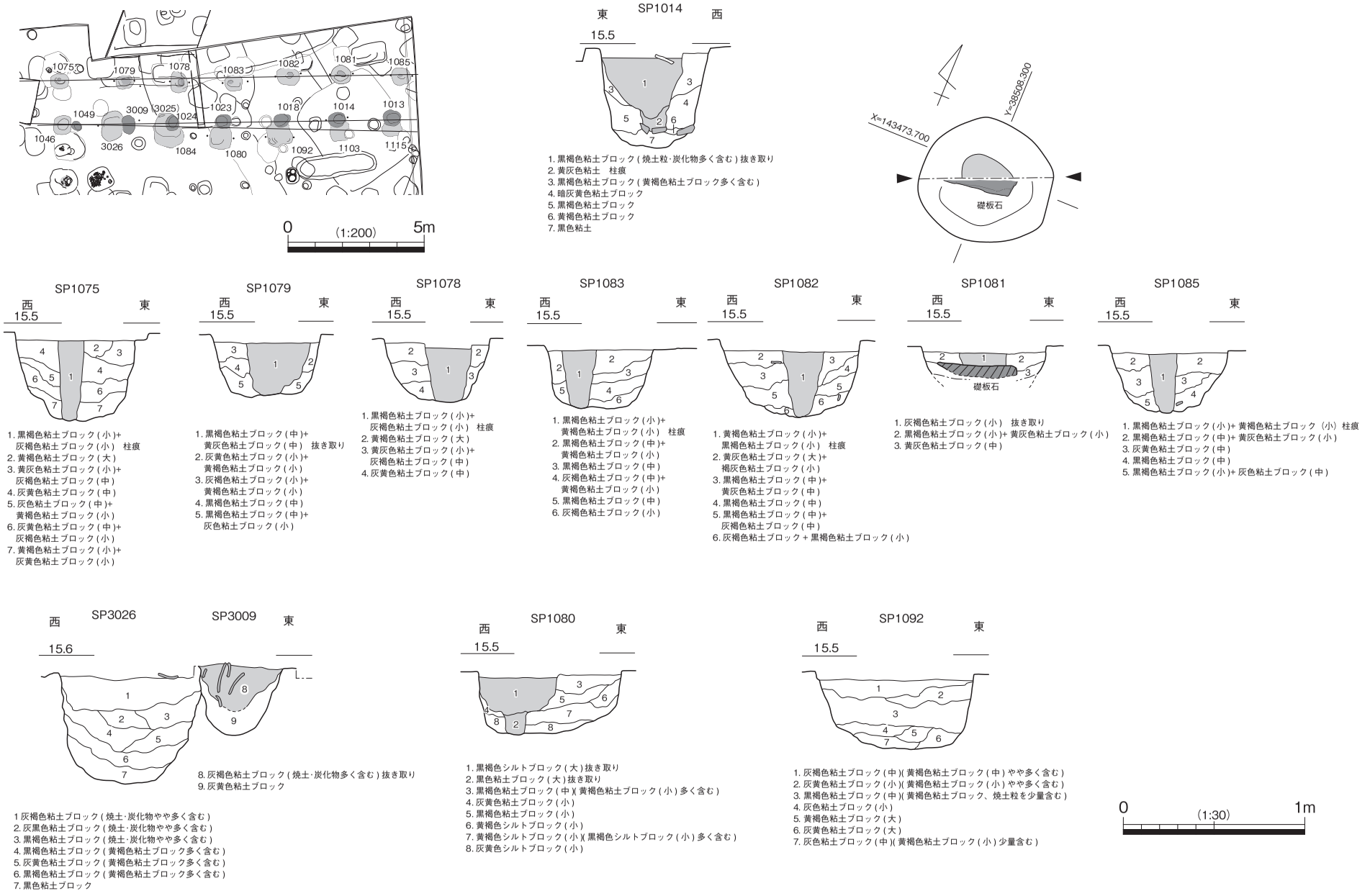


図 130　32-1Tr・SA2009 ～ 2011 断面図

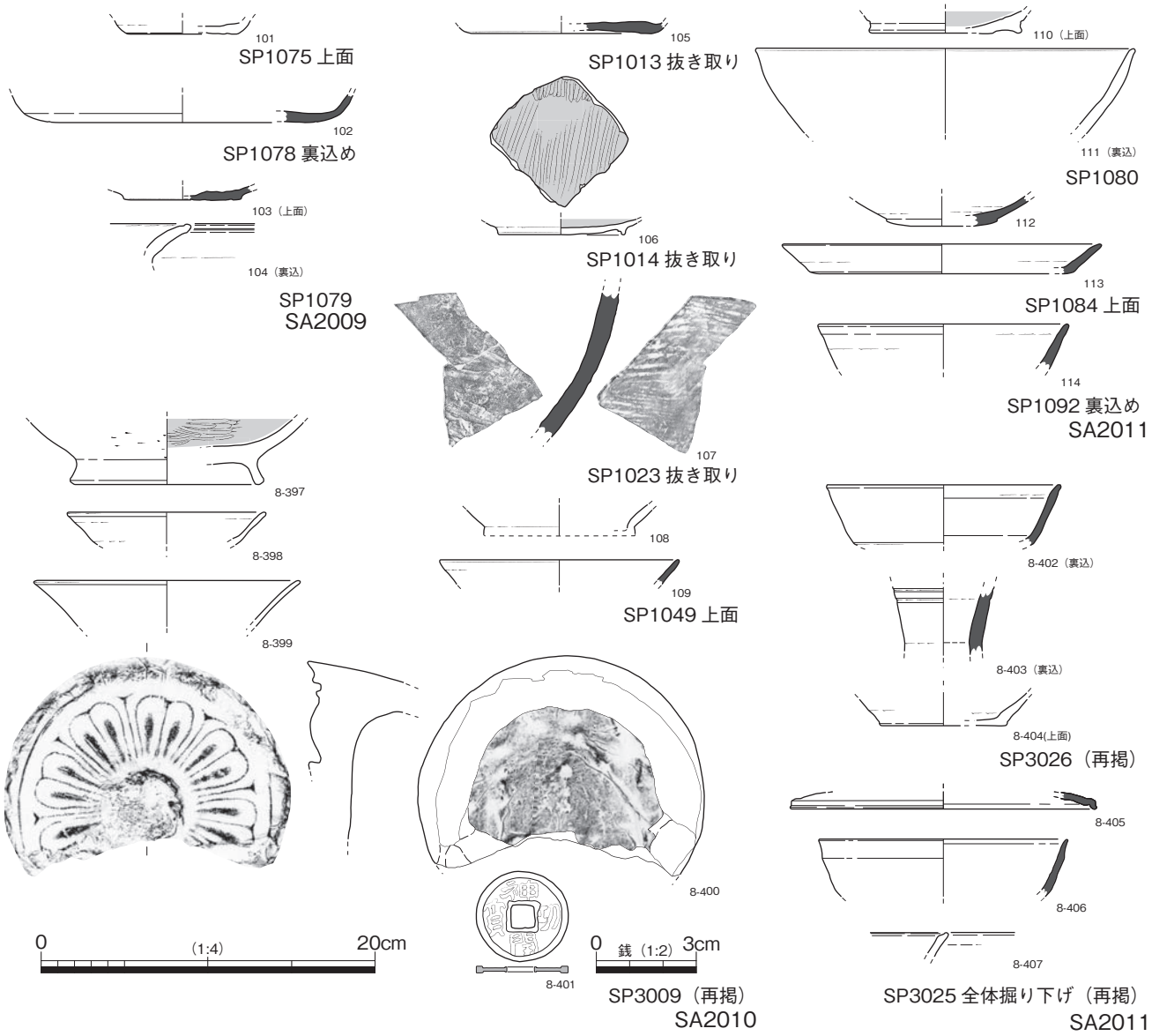


図 131　32-1Tr・SA2009 ～ 2011 出土遺物

SH1127.1129.1131（竪穴建物群）（図 133）

32-1 トレンチにおいては、竪穴建物を多く検出している。特にトレンチ南西部の SH1131 周辺で 7 棟、同北東部で SH1127. 1129 付近では 3 棟の竪穴建物を検出している。これらの平面形は、一辺が 4 ～ 6 mの隅丸長方形を呈し、0. 15 ～ 0. 25 m壁高を測る。SD1010 以外の全ての全ての遺構に切られる。

121 ～ 124 は出土遺物である。121. 122 は、SH1127 の床面から出土した須恵器高杯である。122 は焼成が極めて良好な完形品で、全体に自然釉を被っている。123 は SH1129 の上層から出土した須恵器高杯。124 は SH1131 の床面から出土した須恵器高杯である。

これらは、7 世紀中葉に位置付けられるもので、時間幅を感じさせないものである。竪穴建物群は、短期間に建て替えられたものと推定される。

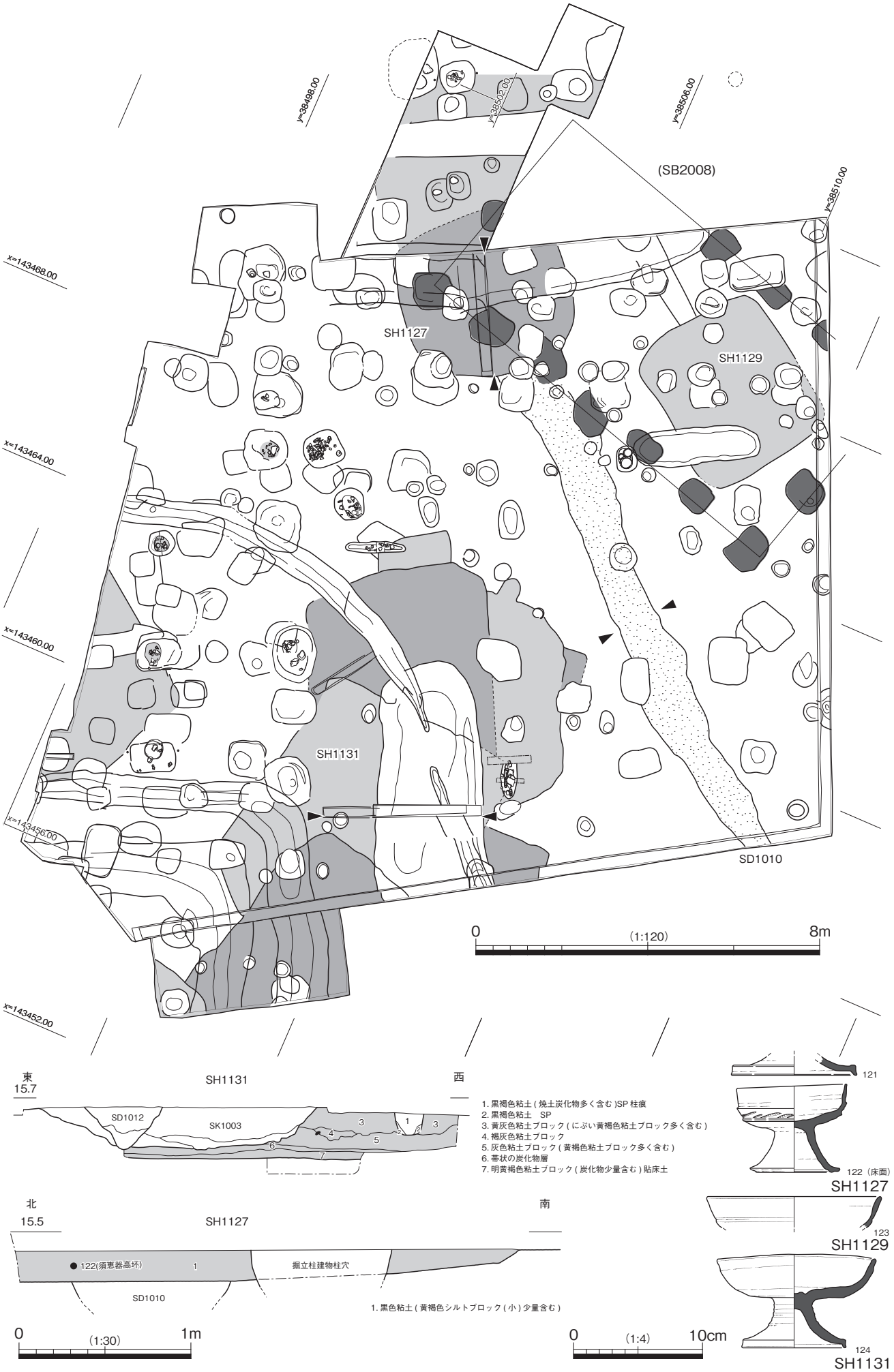


図 133　32-1Tr・SH1131.1127 平断面図及び出土遺物

SP1125（土器埋設遺構）（図 134）

32-1 トレンチ北東部で検出した土器埋設遺構であり、SB1201 を構成する SP1119 を切る。長軸 0.6 m、短軸 0.45 m、深さ 0.25 mを測る隅丸長方形の掘り方に、土師器甕２個体が正位で据え置かれている。大型甕（125）を南側に、中型甕（126）は北側に据え置き、小型甕（127）を西側に添えた状態で埋置している。掘り方内の埋土には細かな黄褐色粘土の偽礫を含むが、甕内部のそれには偽礫が目立たないため、有機物の蓋の存在が想定できる。

甕内部のすべての埋土に対して水洗選別を行ったが、内容物の残滓を確認することはできなかった。甕の形態からみて、本遺構は８世紀後半に形成されたものと考える。

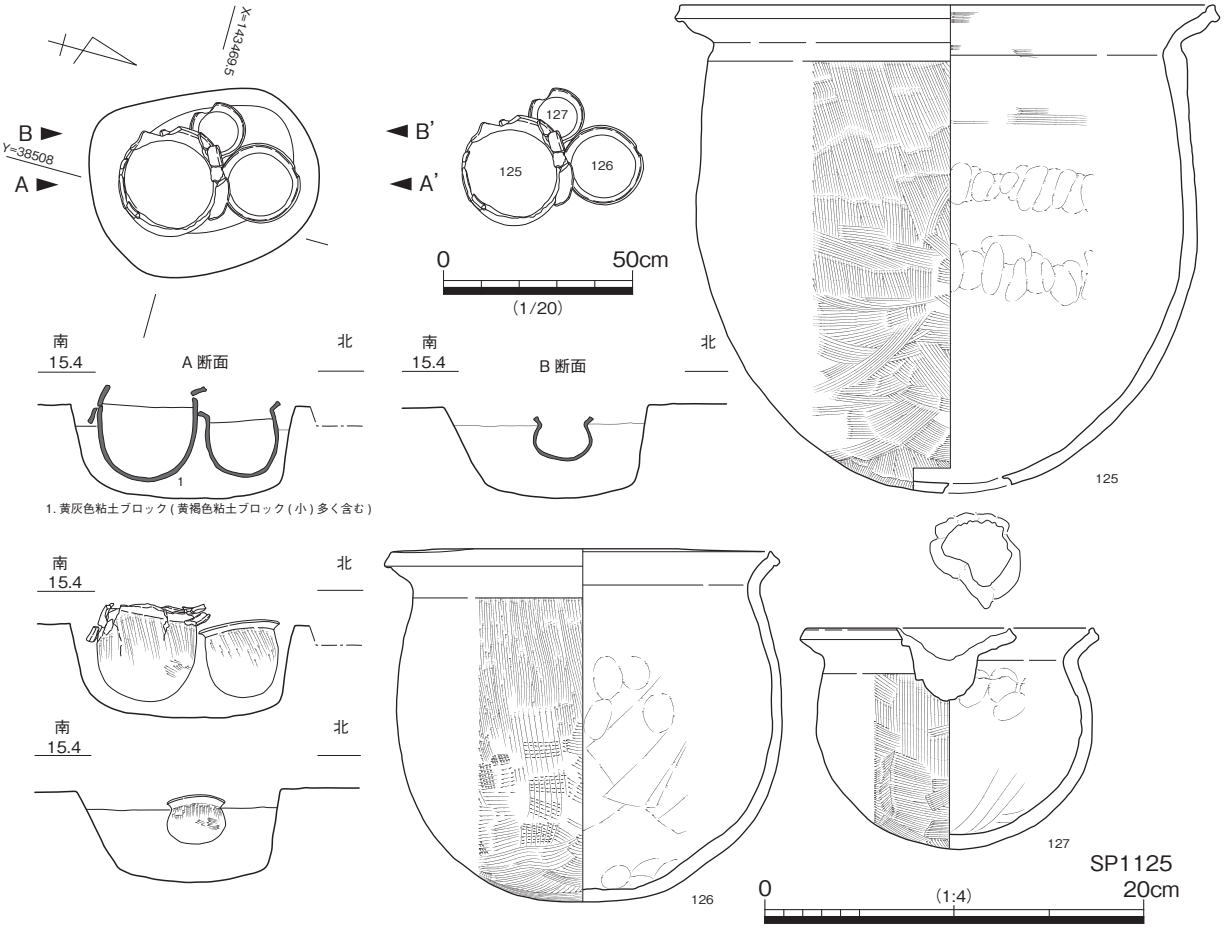


図 134　32-1Tr・SP1125 平断面図及び出土遺物

SK1003（図 135 ～ 139）

32-1 トレンチ南部で検出した大型土坑である。SH1131 等の竪穴建物を切り、SD1012 に切られる。長軸 3.4 m以上、短軸 1.7 mの舟形を呈し、残存深度は 0.25 mを測る。断面は逆台形を呈し、底面は極めて平坦となる。埋没土は概ね３層に区分できるが、焼土・炭化物、黄褐色粘土の偽礫を多く含むことで共通しており、掘開後早期に一括して埋め戻された可能性が高い。火災等に伴う塵芥処理に伴い形成された大型廃棄土坑であると考えられる。

土器・瓦等の遺物は上位から下位まで散発的に含まれているが、南部の下位においては平面的なまとまりをもって検出されている。

遺物の取り上げは、便宜上、上・下位の区分を行ったが、これらに層位的な差違はみられない。

128 ～ 140 は上位出土遺物である。135 は篠産の須恵器皿であり、10 世紀前半の資料とみられる。136 は土師質土器杯底部の周囲を打ち欠き、灯明皿に転用するもので、内面にタール状物質の付着が顕著である。須恵器杯（134）は外底面に糸切り痕が確認できるもので、篠産と考えられる。軒丸瓦（139）は、KH105 型式。

141 ～ 152 は、北部下位出土資料である。147 は須恵器蓋の内面を利用した転用硯であり、磨滅が顕著である。軒丸瓦（148）は KH105 型式。152 は白色凝灰岩製の不明石製品。湾曲した断面形をもち、外面に突帯、内面は手斧と

図 135　32-1Tr・SK1003 平断面図

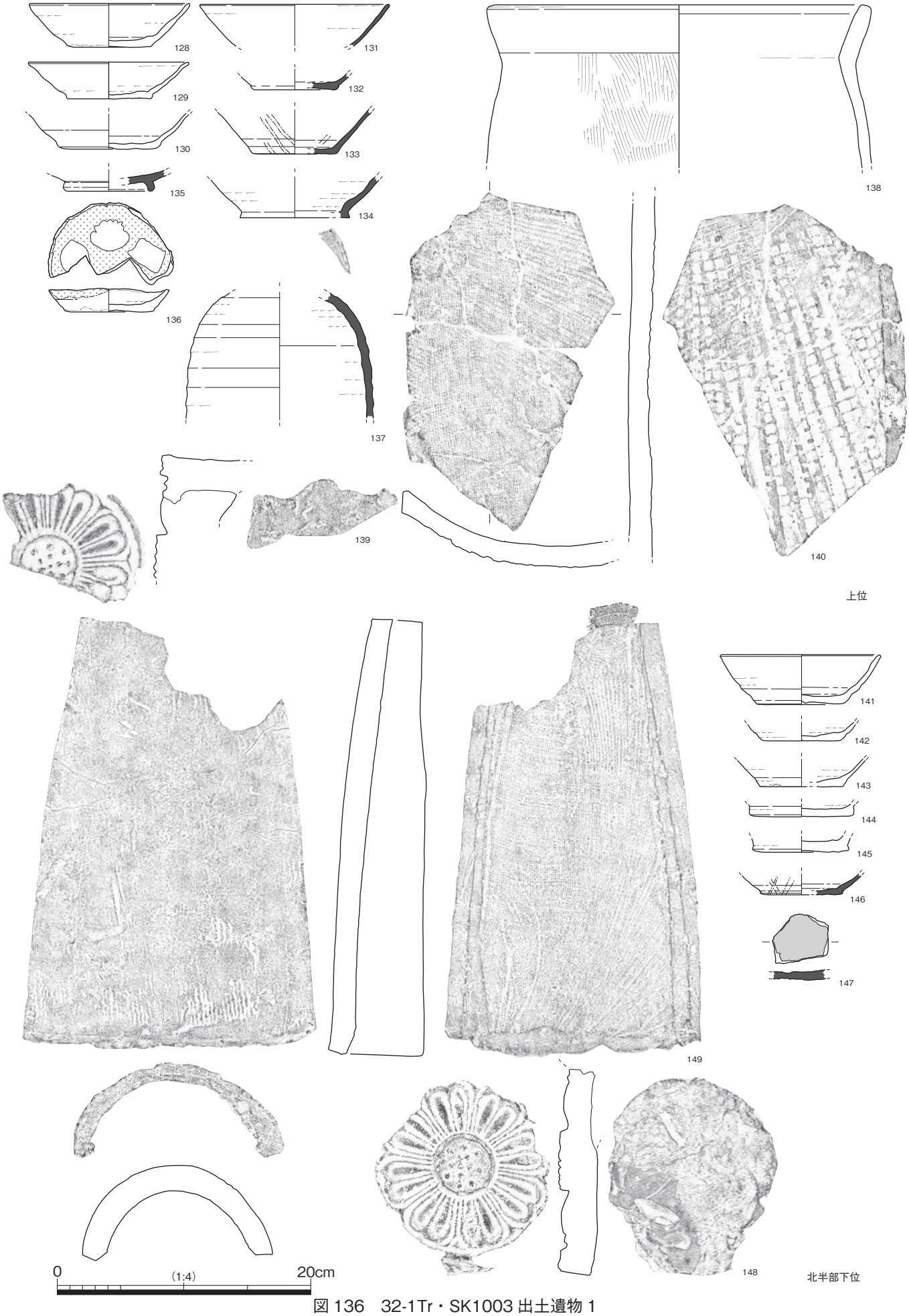


図 136　32-1Tr・SK1003 出土遺物 1

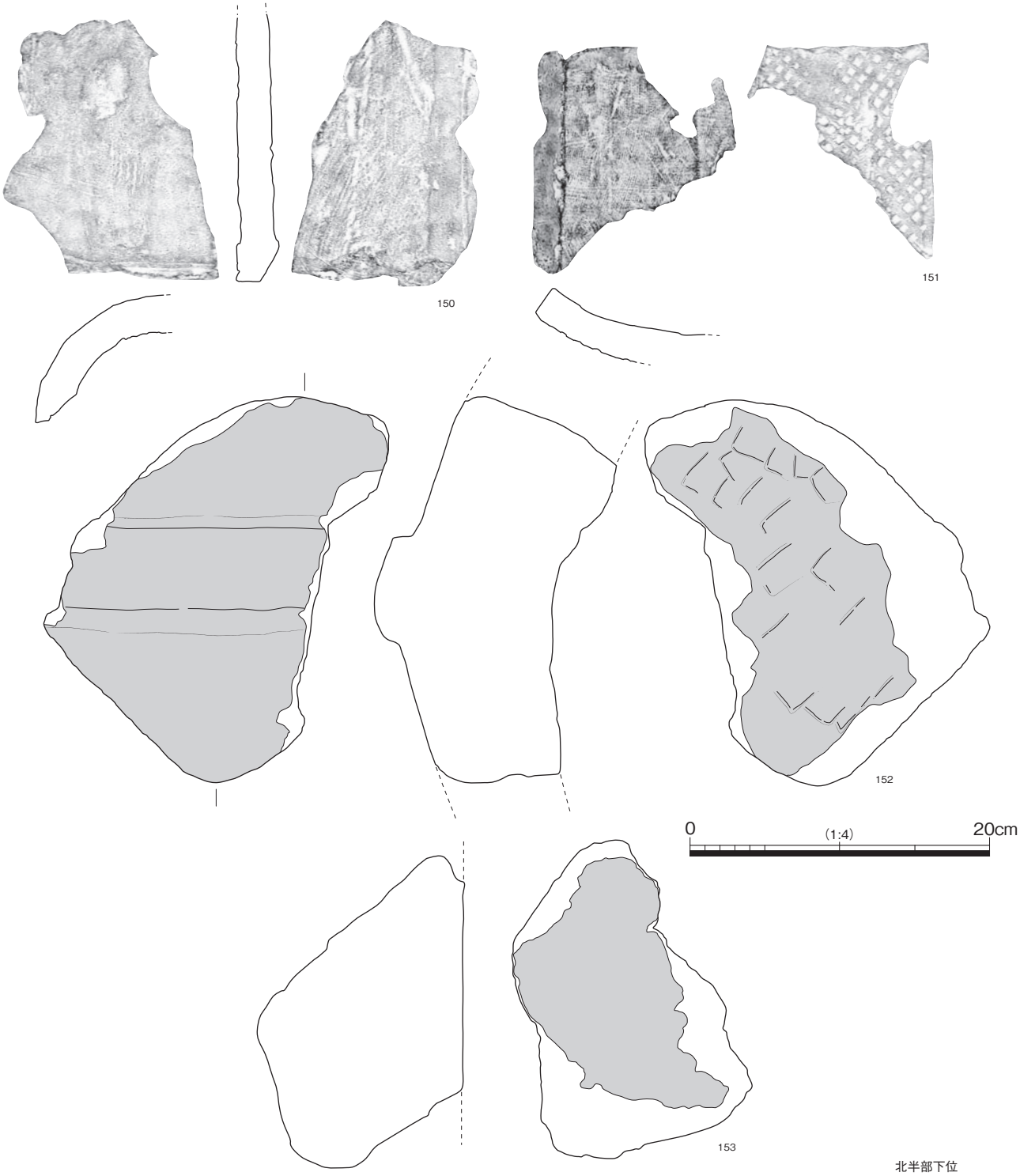


図 137　32-1Tr・SK1003 出土遺物 2

みられる加工痕が確認できる。153 は厚みのある白色凝灰岩製の不明石製品である。154 ～ 179 は南部下位の遺物集中からの資料であり、一括性が高い。154 ～ 169 は土師質土器杯である。薄手の精製な胎土をもつことで共通性がある一群である。170 は土師質土器杯底部の周囲を打ち欠くことで、灯明皿として転用するもので、内部にタール状物質が付着している。175 は京都系の黒色土器椀であり、10 世紀中葉の資料と考えられる。軒丸瓦（176）は、KH106 型式である。焼成は須恵質。179 は白色凝灰岩製の不明石製品であり、側面に印籠蓋の組み合わせ部の加工と、外面に建物棟部の鴈のような三角形状の加工を施す。180 ～ 194 は下位出土資料である。188 は洛北産の緑釉陶器皿であり、９世紀中葉の資料。189 は美濃、あるいは近江産の緑釉陶器椀であり、９世紀末から 10 世紀初頭の資料である。190 は洛北産の緑釉陶器椀。191 は猿投産の灰釉陶器皿であり、９世紀末から 10 世紀初頭の資料と考えられる。

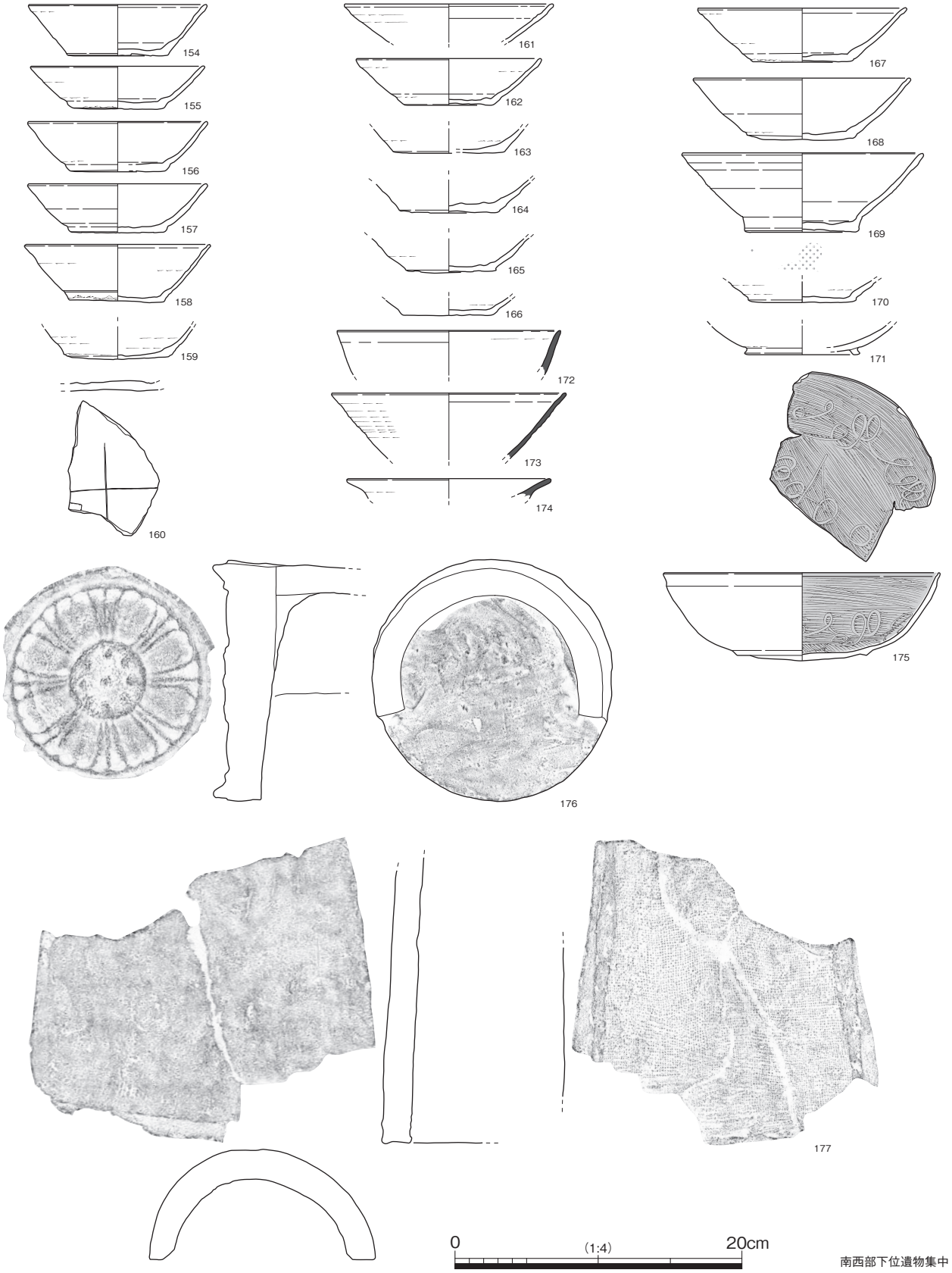


図 138　32-1Tr・SK1003 出土遺物 3

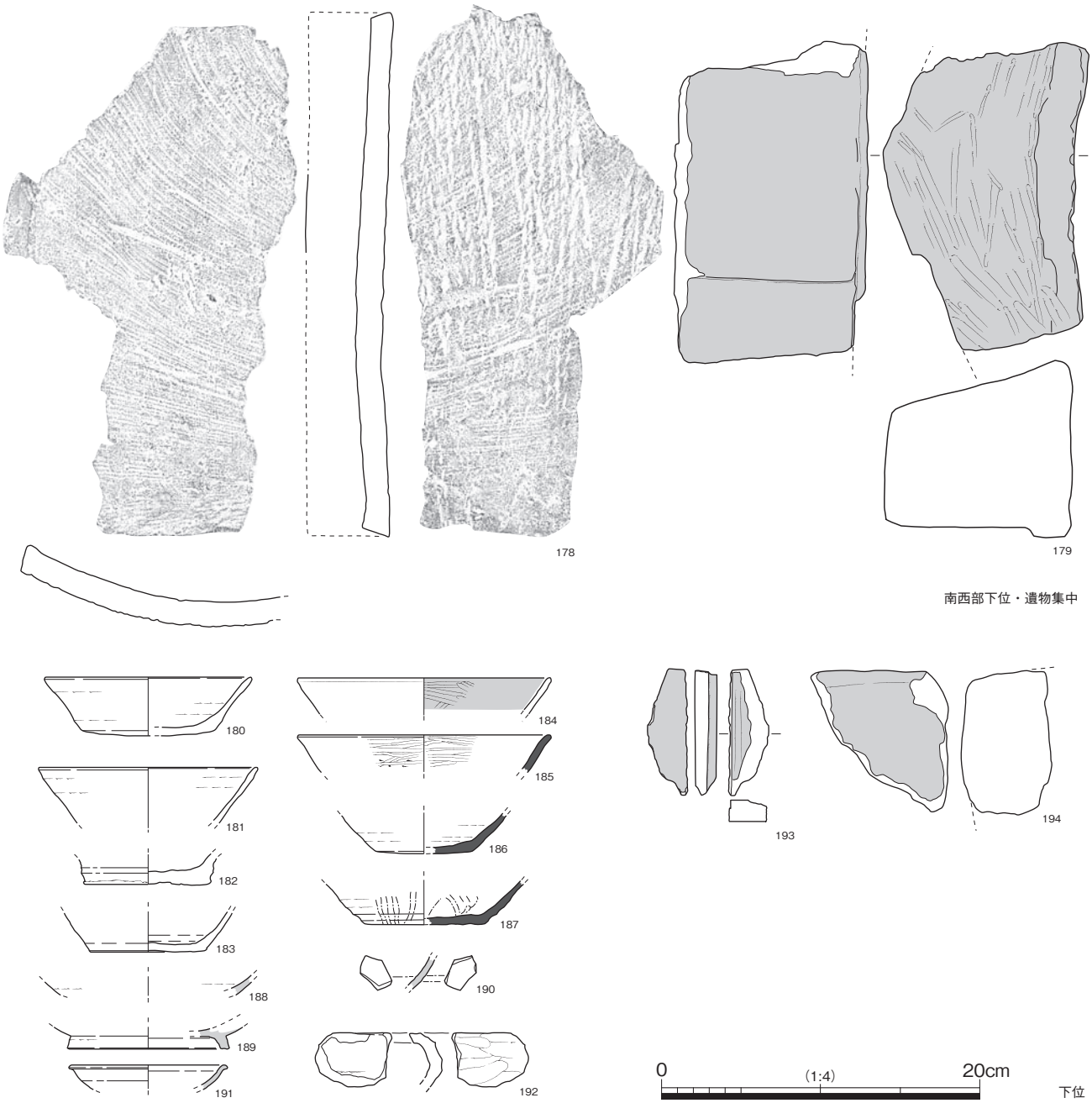


図 139　32-1Tr・SK1003 出土遺物 4

193 は結晶片岩製の石帯と考えられる。表裏に粗い研磨、側面に擦切りによる分割痕をもつことから、未成品であろう。194 は白色凝灰岩片である。

なお、瓦出土量は破片数 248 点（丸瓦 93 点（40%）、平瓦 155 点（63%））、総重量 77,173 g（丸瓦 31,188 g（40%）、平瓦 45,985 g（60%））を数える。平瓦の凸面調整の格子叩きと縄叩きの比率は破片数では 23%：77%、重量比では 21%：79%となる。

以上の出土遺物から、施釉陶器にやや古相を示す資料がみられるが、土師質土器及び須恵器の年代観より、本遺構は 10 世紀中葉に形成されたと考えておきたい。

SD1002（図 140）

32-1 トレンチ北部で検出した東西溝であり、30 次調査 30-3Tr・SD3010 に対応するものである。上面幅 1.1 m以上、残存深度 0.15 mを測る。２層掘り下げ途上においてその存在を確認したもので、埋没土の黒褐色粘土の識別に手間取り、十分な確認ができなかった。

195 ～ 207 は出土遺物である。土師質土器杯（195 ～ 199）は 10 世紀中葉から 11 世紀前葉の資料。200 は黒色土器椀であり、11 世紀末から 12 世紀初頭の資料と考えられる。須恵器鉢（201）は 11 世紀に比定される。軒平瓦（202）は KH202 型式。鉄器（203）は鉸具と考えられる。204 は方環状の不明鉄器。205 は鉄製刀子､206 は同袋状鉄斧である。207 は薄手の不明銅製品であり、かなりの変形を受けているが、帯金具である可能性もある。

これらの出土遺物から、本遺構は 11 世紀から 12 世紀初頭に帰属すると考えておく。

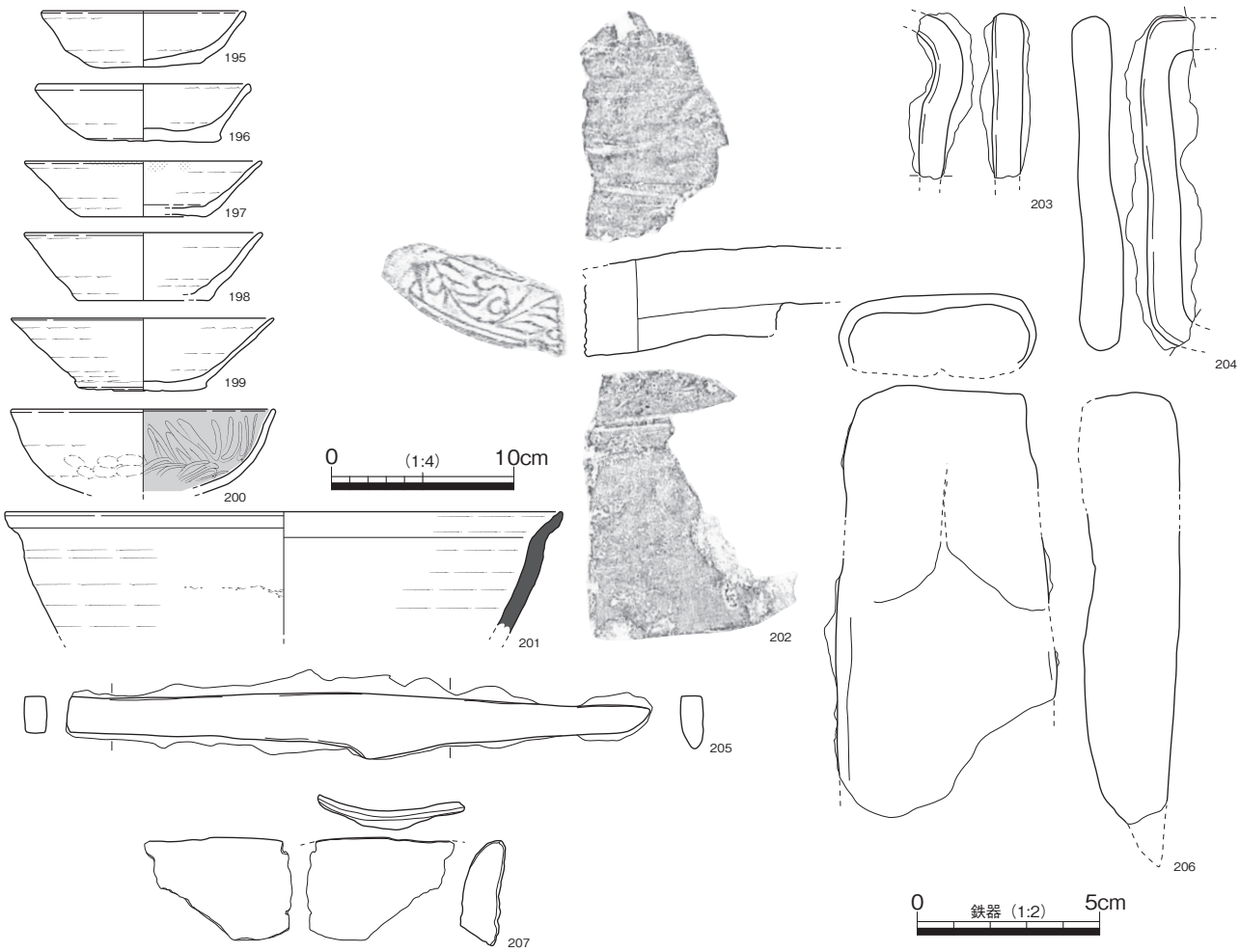


図 140　32-1Tr・SD1002 出土遺物

SD1012（図 141）

32-1 トレンチ南西部で検出した弧状溝であり、SB1200、SK1003 を切り込む。上面幅 0.6 m、深さ 0.35 mを測り、逆台形の断面形をもっている。埋没土は３つに区分できる。最下層は、ラミナがみられる灰色粗砂層であり、機能時堆積層と考えられる。下層は、大振りの偽礫を含む灰黄色シルトと黄灰色粘土の偽礫であり、埋め戻し土とみられる。上層は焼土・炭化物を多く交える黒褐色粘土の偽礫からなり、これについても埋め戻し土と考えられる。混入する偽礫の状況により、上・下層に区分したが両層位とも一括した埋め戻し土として捉えられる。

208 ～ 240 は出土遺物である。土師質土器杯 208 ～ 227 は底部付近の立ち上がりが丸みを帯びるもので、11 世紀前葉の特徴をもつ。土師質土器台付杯（236）、土師質土器台付皿（228 ～ 230）、土師器甕（237）、土師器鍋（238. 239）についても、11 世紀前葉以降に出現するものとみられる。転用硯（235）は須恵器甕胴部の内面を利用する。240 は白色凝灰岩片である。

以上の出土遺物の様相からみて、本溝は 11 世紀前葉に廃絶したものと考えたい。

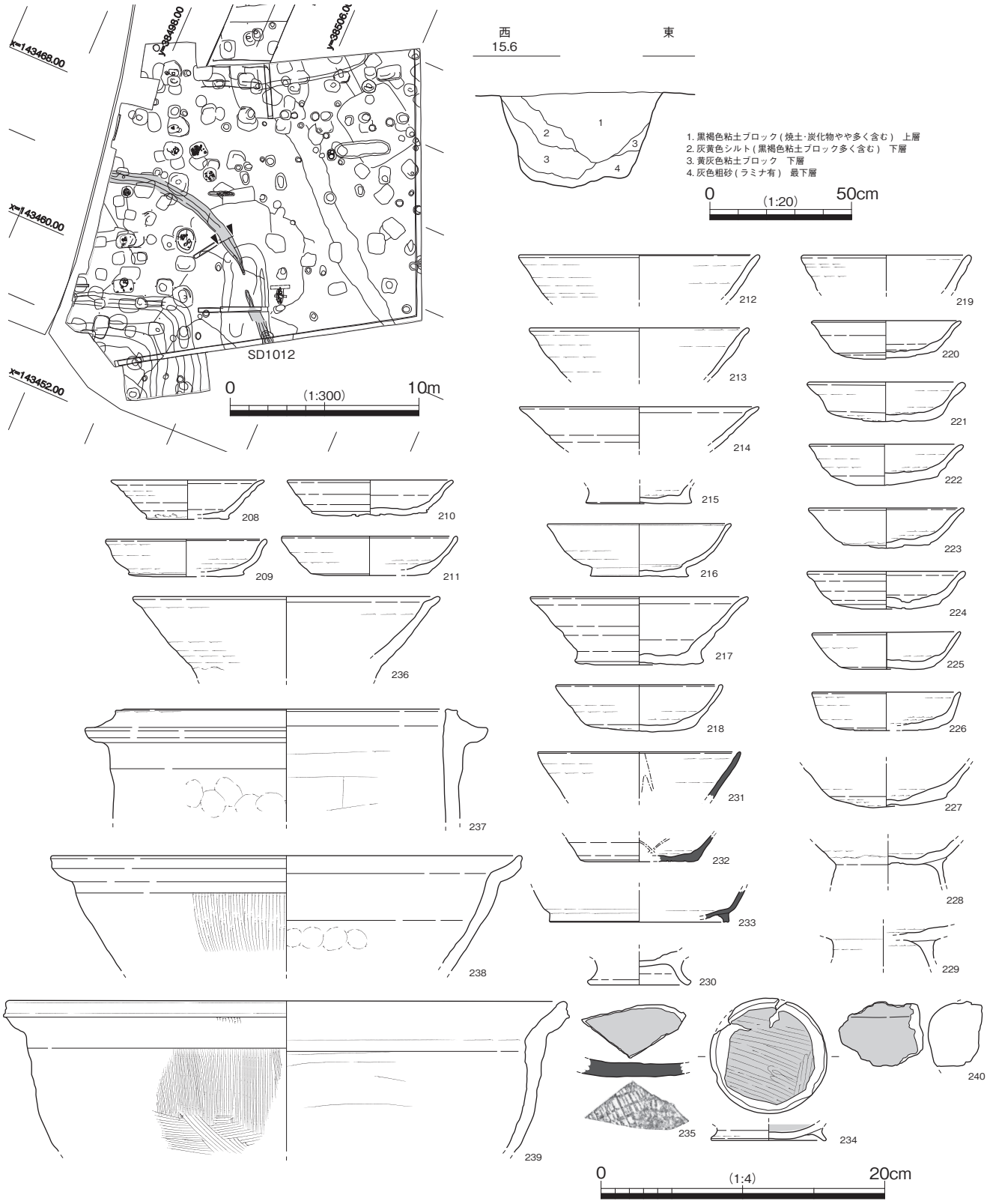


図 141　32-1Tr・SD1012 平断面図及び出土遺物

SD1005.1006（図 142）

32-1 トレンチ南西部で検出した２条並行の溝であり、調査区内で西へ 90°屈曲する。30 次調査 30-3 トレンチにおいても検出しており、SD1005 が 30 次調査 SD3003、SD1006 が 30 次調査 SD3002 に対応する。埋没土は、灰色シルトであり、本トレンチの１層に類似している。図示した以外に中世後半の土師質土器足釜を含んでおり、時期的に下る遺構と考えられる。

241 ～ 243 は SD1006 からの出土遺物。242 は猿投産の緑釉陶器段皿であり、９世紀中葉の資料と考えられる。243 は須恵器風字硯の小片とみられ、外面に小さな脚部、内面に磨滅痕をとどめる。

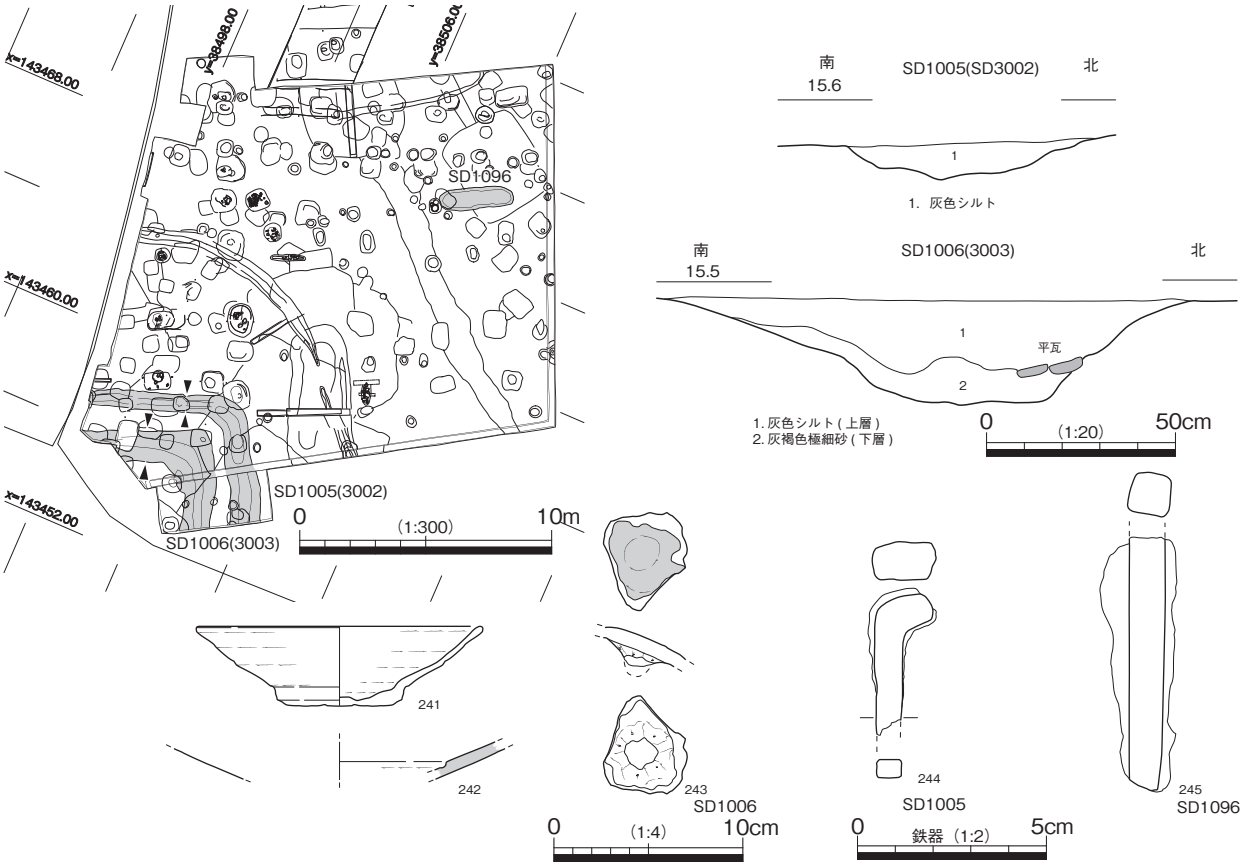


図 142　32-1Tr・SD1005.1006 平断面図及び出土遺物

SD1096（図 142）

32-1 トレンチ北東部で検出した東西溝である。上面幅 0.9 m、残存深度 0.1 mを測る。基本層序２層の黒褐色粘土に類似した埋没土をもつ。不明鉄器（245）以外に出土遺物はみられない。

SD1010（図 143）

32-1 トレンチ東部で検出した南北溝であり、全ての遺構に切り込まれる。上面幅 0.6 m、深さ 0.3 m、U字形の断面をもつ。本トレンチから北西方向に延びた後、30-1Tr・SD1002. 1040 間の溝に繋がるものと推定される。埋没土は数層に区分されるが、全て大振りの黄褐色粘土の偽礫を含み、機能時堆積層は一切みられない。掘開後の浚渫等を経て、一括して埋め戻された可能性が高い。

246 ～ 248 は出土遺物である。246 は土師器杯であり、胎土中には砂粒が目立つ。須恵器杯（247）、土師器甕（248）は７世紀中葉の資料と考えられる。

竪穴建物を含めたすべての遺構に切り込まれることや、上記出土遺物の年代観から、本遺構は７世紀中葉に廃絶したものと推定しておきたい。上限年代については、不明とせざるを得ない。

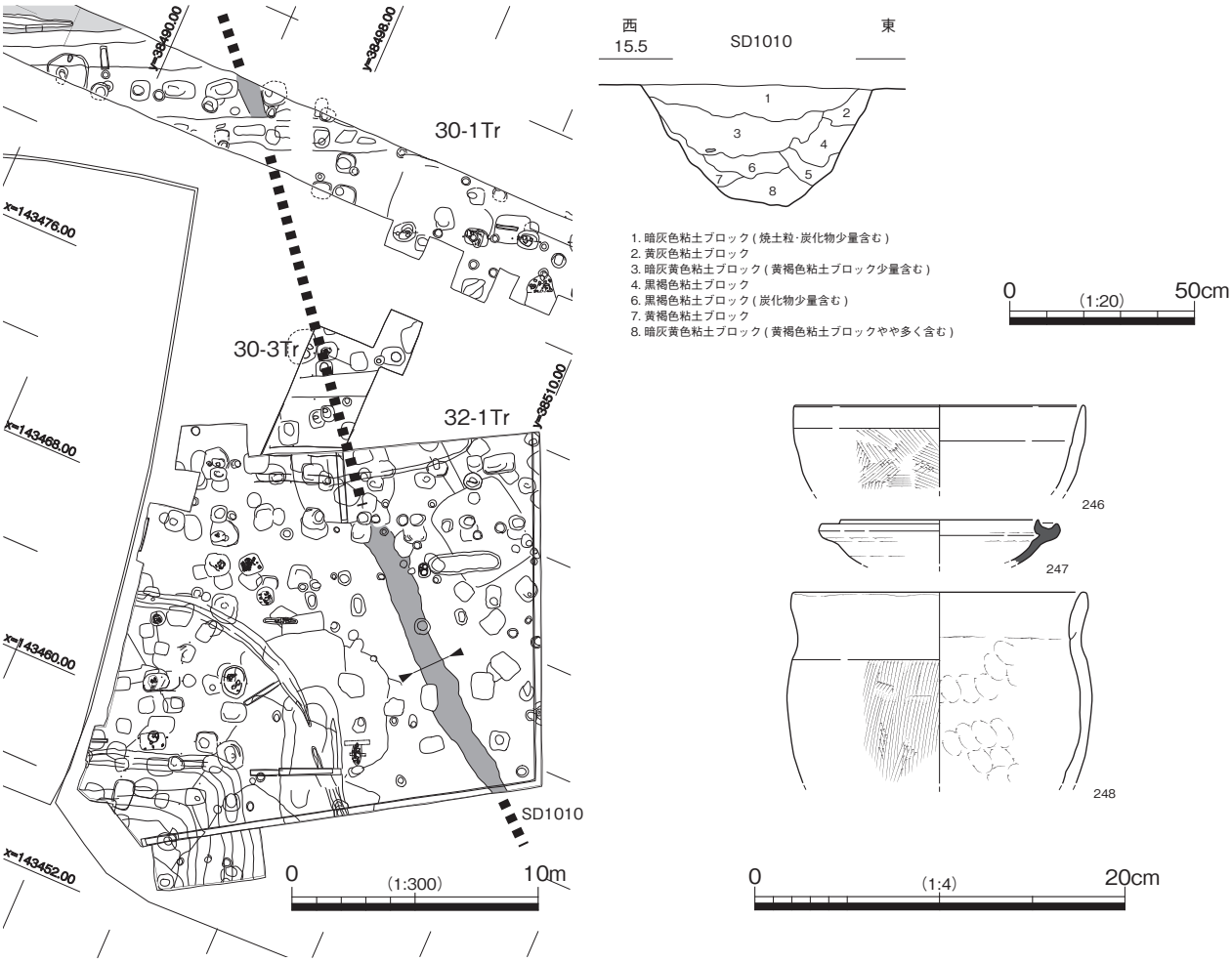


図 143　32-1Tr・SD1010 平断面図及び出土遺物

（4）検出遺構・出土遺物（32-2・3 トレンチ）

SB2013（図 145）

32-2 トレンチ西部で検出した掘立柱建物である。現状では、南北 1 間（1.8 m）、東西 3 間（7.2 m）の柱配置をもち、建物主軸は座標北から 86°西偏する正方位を基準としたものとなる。柱穴掘り方は、長辺 0.9 ～ 1.1 m、短辺 0.6 ～ 0.7 mの隅丸長方形を呈し、前述したように著しく近現代の削平を被るために残存深度は 0.25 mと浅いものとなる。平・断面ともに、柱痕跡は不明確であったが、断ち割りを行った SP2005. 2006 では、掘り方底面が局所的に落ち込む箇所があり、これを柱のあたりを反映したものと推定した。柱痕跡は径 0.3 m以内となり、東西方向の柱間は 2.4 m と推定できる。

柱穴掘り方の平面形や、柱間の状況を考慮すれば、正方位を基準とした東西棟であった可能性が高い。

出土遺物はみられないが、建物主軸や検出状況からみて、7 世紀後葉から 8 世紀初頭に帰属する大型建物と考えられる。

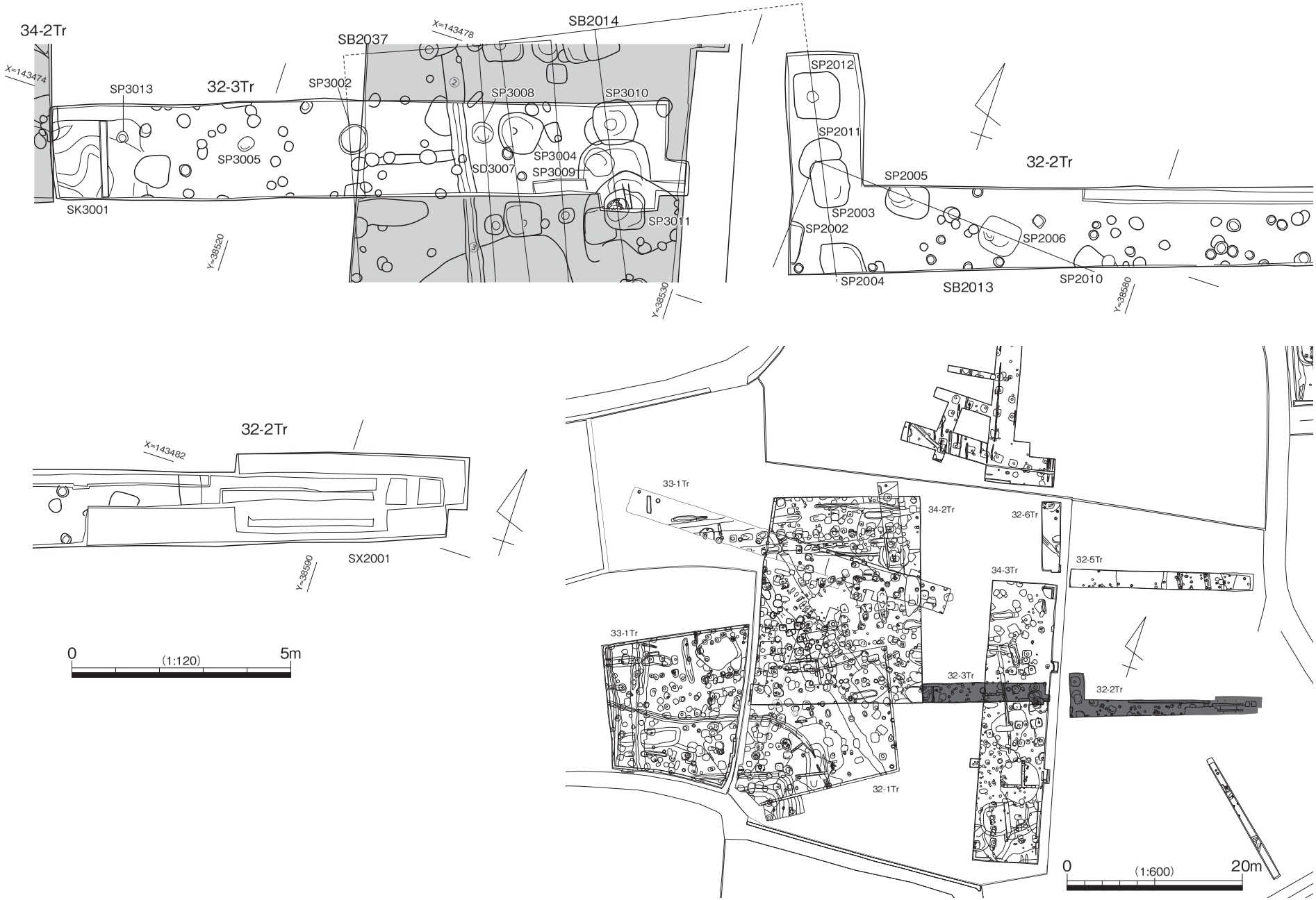


図 144　32-2・3Tr 遺構平面図

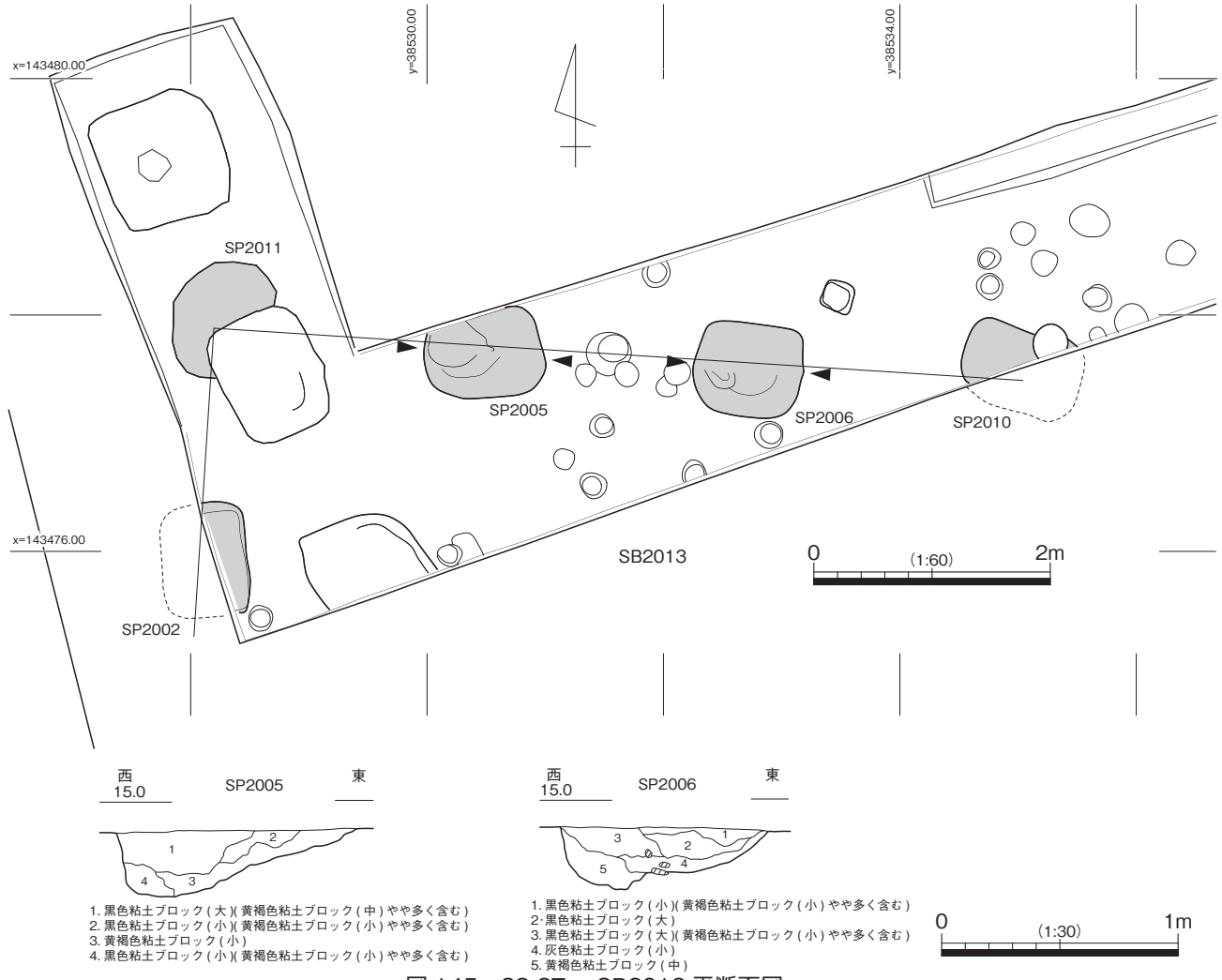


図 145　32-2Tr・SB2013 平断面図

SB2014（図 146）

32-2 トレンチ西端と 32-3 トレンチ東端で検出した掘立柱建物である。32-2 トレンチでは北より SP2012. 2003. 2004 の南北方向の２間の柱列、32-3 トレンチでは SP3010. 3011 の１間の柱列を検出し、位置関係からみて両者は組み合うことで建物を構成すると考えられる。建物主軸は座標北から 27゜西偏する。

32-2Tr・SP2003. 2004 は、長軸１m、短軸 0. 8 ～ 1 mを測る大型の掘り方をもつものであるが、後世の削平を受けることで深さは 0. 2 m程しか遺存していない。柱痕は SP2012 の平面において径 0. 2 mの柱痕跡を確認したのみであるが、柱間は 2. 1 mと推定できる。

32-3Tr・SP3010 は、長軸 0. 8 m以上、短軸１m、深さ 0. 45 mの規模をもち、径 0. 2 mの柱痕跡が確認されている。SP3011 は大半が調査区となるが、SP3010 と同等の規模をもつものと考えられ、上部に礎石とみられる安山岩製の板石が据え付けられている。安山岩製礎石は、0. 3 m四方、厚さ 0. 5 mの法量をもち、現状はやや東へ傾く。本建物が礎石化したことを示すものと考えられる。

出土遺物には SP2003 の裏込土から出土した土師器杯（254）、須恵器高杯（255）の他、SP2004 裏込土から出土した黒色土器杯（256）がある。須恵器高杯（255）は７世紀後半代と推定され、切り合い関係にある SP 土師器杯（254）は時期決定に至らない。黒色土器杯（256）は異形品であるが、30 次調査 30-1Tr・SD1002. 1040 など８世紀後葉から９世紀前葉の遺構から出土する資料に類似する。

以上のことから、本建物は８世紀後葉から９世紀前葉に機能したものと推定しておきたい。

32-3 トレンチ柱穴出土遺物（図 148）

257 ～ 262 は、32-3 トレンチで検出した柱穴のうち、建物復元に至らなかったものからの出土遺物を掲載している。遺構形成時期を示す資料として提示しておきたい。

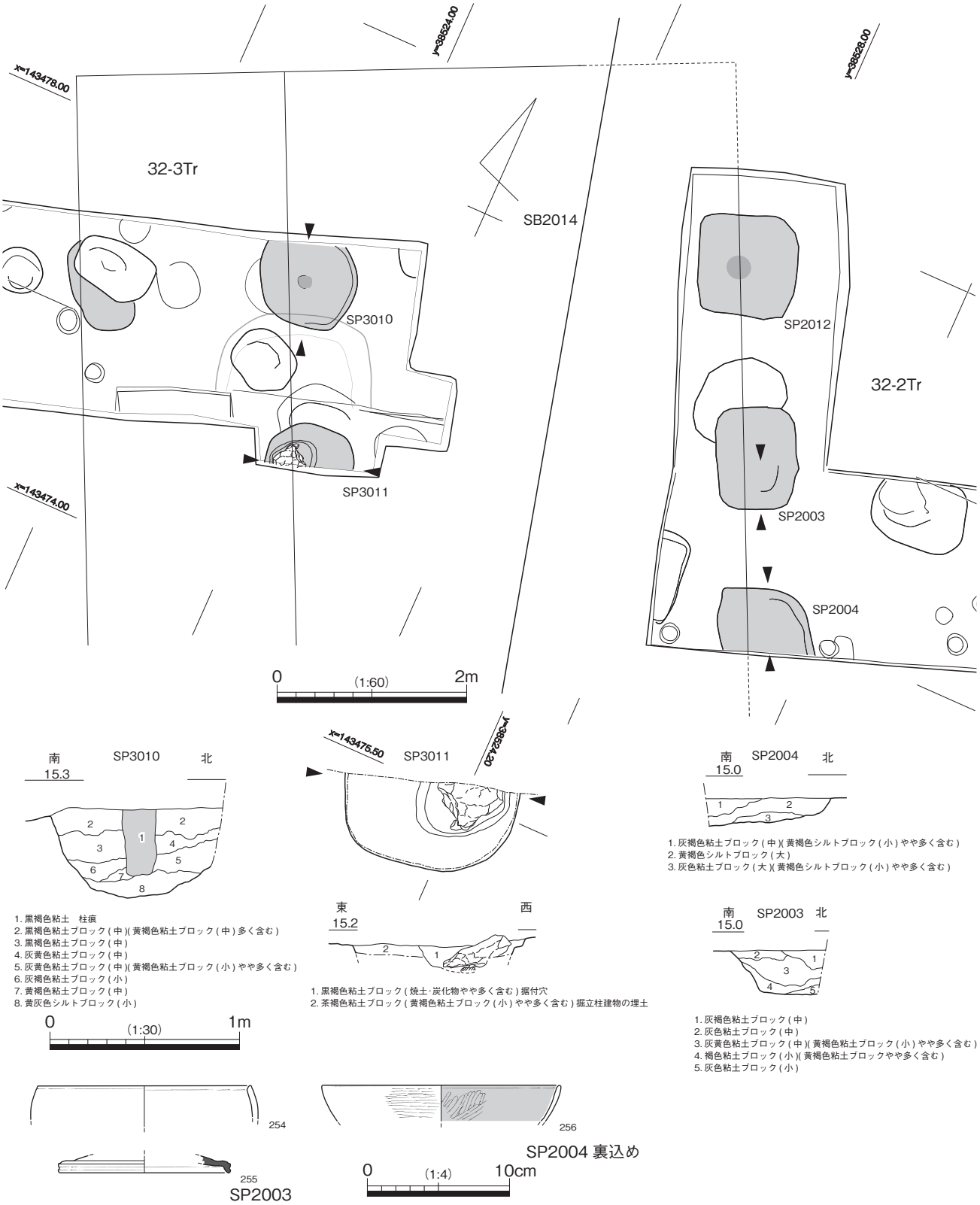


図 146　32-2・3Tr・SB2014 平断面図及び出土遺物

SK3001（図 147）

32-3 トレンチ西端で検出した大型土坑である。検出範囲で、南北 1.8 m、東西 2 mの不定形の平面形態を採る。残存深度は 0.2 mを測り、底面には凹凸が激しい。埋没土は、焼土・炭化物を多く含む黒褐色粘土の偽礫を主体としており機能時堆積層が存在しないことから、掘開後の早期に埋め戻されたと考えられる。

263 ～ 271 は出土遺物である。265 は土師質土器の見込み部にタール状の付着物がみられることから、灯明皿として転用されたと考えられる。268 は、大きく外側へ開く器形をもつもので、器種不明とせざるを得ない。270 は白色凝灰岩片であり、稜線状の加工を施している。軒丸瓦（271）は、KH101 型式である。

出土土器のうち、灯明皿に転用された土師質土器杯（265）のみ 10 世紀後葉に下る可能性があるが、他の資料の年代観から、本遺構は 10 世紀中葉に形成されたものと考える。また、掘開後の早期に埋め戻された点や、焼土・炭化物を多く含む点からみて、火災等の塵芥物処理に伴う廃棄土坑の性格を想定しておきたい。

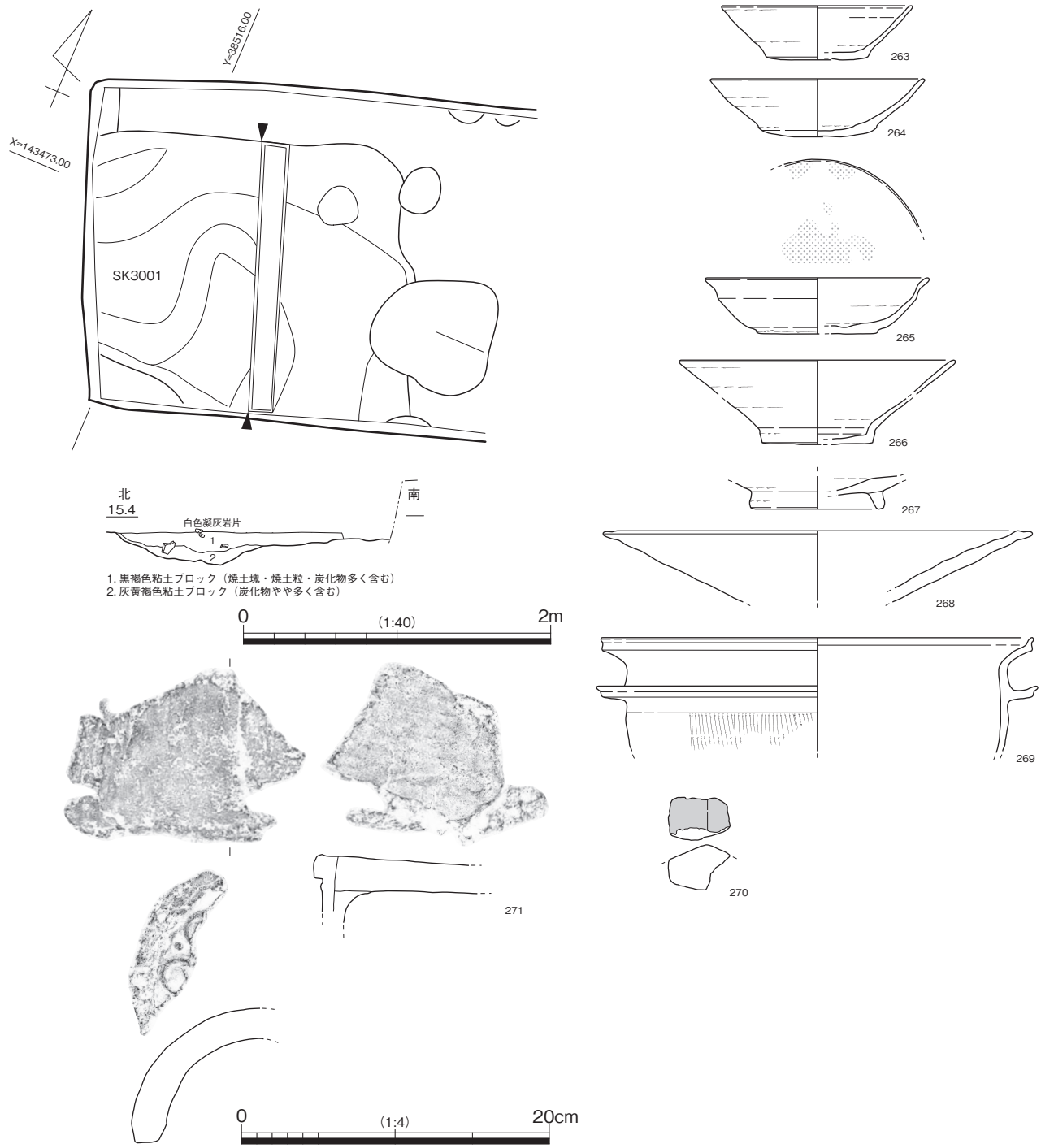


図 147　32-2Tr・SK3001 平断面及び出土遺物

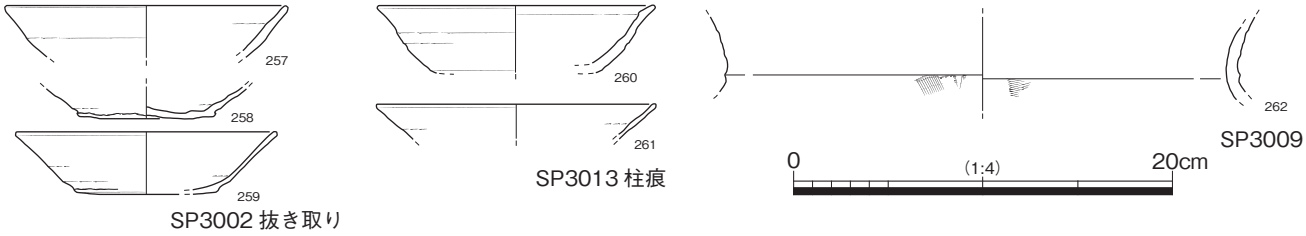


図 148　32-3Tr 柱穴、溝出土遺物

（5）検出遺構・出土遺物（32-4 トレンチ）

SB2004（図 149）

32-4 トレンチで検出された掘立柱建物である。30 次調査において確認されており、本次調査では東側梁行の３基の柱穴（SP4011.4005.4006）を検出したことになる。これにより、座標北から 113°西偏した主軸方位をもつ梁行３間（5.5 m）、桁行４間以上（6.4 m以上）の東西棟であることが確定した。

梁行の３基の柱穴（SP4011.4005.4006）は、8 世紀中葉の SK4002、8 世紀後葉から 9 世紀前葉の SD4003 を切り込む。また、SP4005.4006 は柱抜き取りが確認されているが、梁行柱間は 2.1 mと推定される。

272 ～ 279 は出土遺物である。これらのうち、SP4005 の上層から出土した土師質土器台付皿（274）、SP4006 掘り方上面から出土した土師質土器杯（277）は、10 世紀後葉より 11 世紀前葉に下る可能性がある。

本建物は、34 次調査において全容が明らかにされているため、詳細な時期決定はそちらに委ねることとしたい。

SK4002（図 150 ～ 154）

34-4 トレンチ中央で検出した大型土坑であり、SB1086、SD4003 に切られる。東西の掘り方が未検出となるが、上面で南北 3.1 mを測り、全体では隅丸方形を呈するものと推定される。断面形は逆凸形を呈し、検出面より 1.5 m下まで掘り下げたが、湧水が激しく底面に達することはできなかった。埋没土は、上・中・下層の３つに区分され、いずれにおいても基盤層を起源とする黄褐色粘土の偽礫を多く交えている。これに加えて、上層では炭化物、中層においては焼土塊・粒の混入が著しい。また、中層とした６層下部の両側においては、貼土とみられる精良な黄色粘土が壁面に確認された。

深度及び断面形から判断して、井戸としての機能が推定されるが、下位の貼土は井側の固定用とも考えることができる。

また、廃絶に関しては、偽礫を含む埋没土の層相から判断して、一括して埋め戻された可能性が高いと考えられるが、中層の焼土塊の集中は、本遺構周辺の土堤等の構造物の除却に起因するものと考えられる。

280 ～ 333 は上層出土遺物である。須恵器蓋（292. 294）の内面には字義不明の墨書が確認できる。須恵器蓋（306）の内面、同蓋（291）の内外面には不明の付着物がみられる。305 は須恵器蓋の内面を利用した転用硯である。土師器蓋（312）の内外面にはベンガラとみられる赤色顔料が塗布されている。321 ～ 323 は、器形及び胎土からみて焼塩土器と考えられる。318 ～ 320 は、両黒の黒色土器鉢であり、当該期の須恵器等の土器類との共伴関係を示す類例に乏しい。324 は白色凝灰岩片である。軒丸瓦（332）は KH106 型式。

334 ～ 370 は中層出土遺物である。須恵器蓋（337）内面には、刻書、あるいはヘラ記号がみられる。須恵器杯（342）の外底面には「官」の墨書が鮮明に確認できる。343 は須恵器杯の内面を利用した転用硯である。353 は焼塩土器であり、口縁部の内外面にカルシウムとみられる白色物質が付着している。354 は両黒の黒色土器鉢。355 は須恵器杯、または皿の口縁部片であり、口縁端部に被熱による発泡がみられる資料である。356 は坩堝片であり、被熱によるガラス化が著しい。357 ～ 360 は鞴羽口である。361 ～ 364 はスサ状の圧痕をもち、被熱痕をとどめた粘土塊である。369 は花崗岩製の砥石の小片である。370 は鉄製刀子。

371 ～ 378 は下層出土資料である。376 は須恵器蓋の内面を利用した転用硯。内面に顕著な磨滅痕、外面に二条の沈線が確認できる。

379 ～ 392 は、トレンチ等からの出土遺物で、帰属する層位を限定できない資料である。389 は両黒の黒色土器鉢。390 はスサ状の圧痕をもち、被熱痕の認められる粘土塊である。392 は白色凝灰岩片、393 は完形の鉄製刀子である。なお、全層位を一括した瓦出土量は破片数 25 点（丸瓦 7 点（28%）、平瓦 18 点（72%））、総重量 3,463 g（丸瓦 871 g（25%）、平瓦 2,592 g（75%））を数える。平瓦の凸面調整の格子叩きと縄叩きの比率は破片数では 73%：27%、重量比では 82%：18%となる。

両黒の黒色土器鉢の編年的位置付けに課題が残るが、これらの出土遺物からみて、本遺構は 8 世紀中葉に廃絶したものと考える。また、坩堝、羽口、砥石等の出土遺物の存在からみて、当該期の本遺構周辺における工房等の施設の存在を推定することができる。

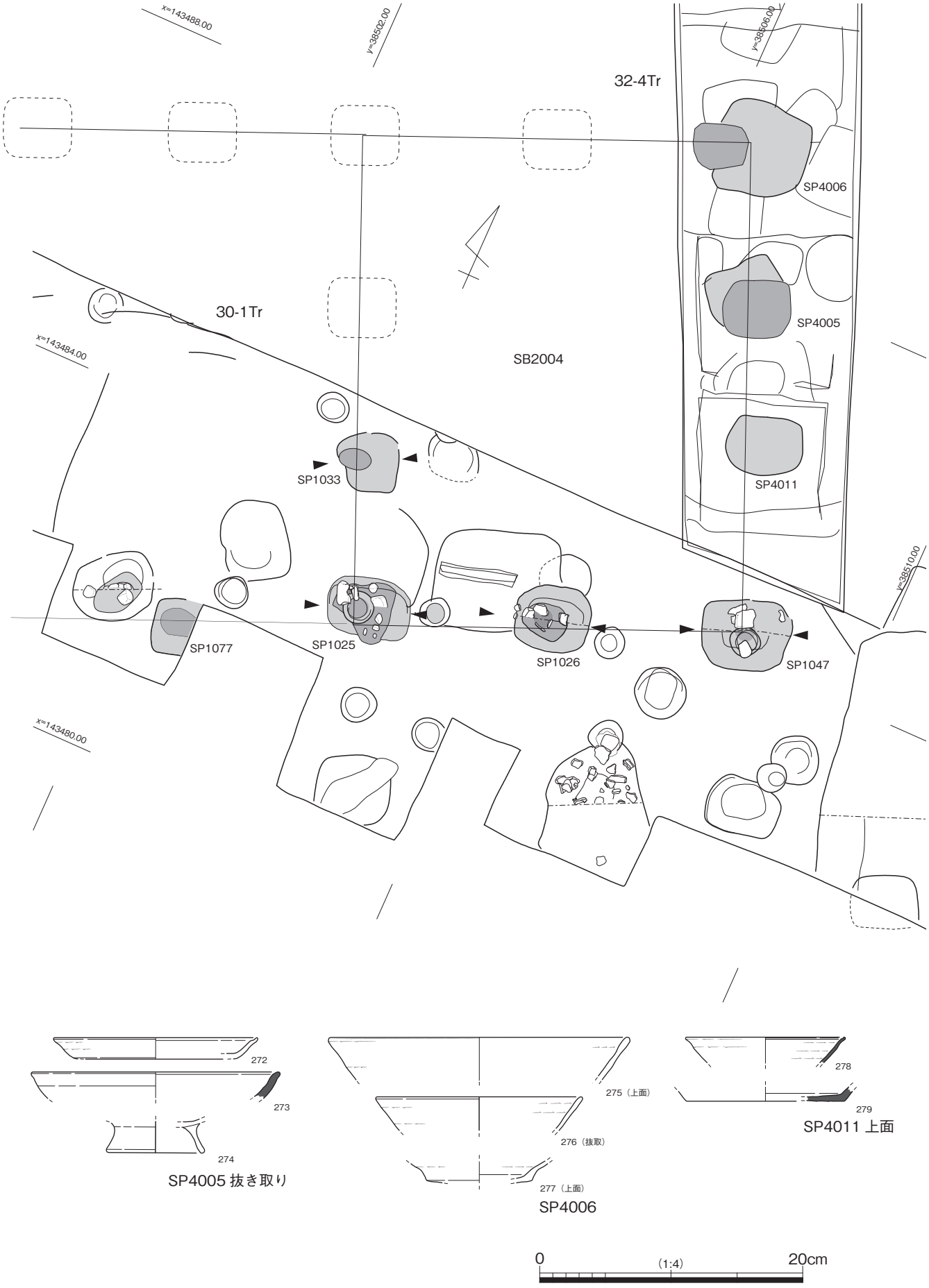
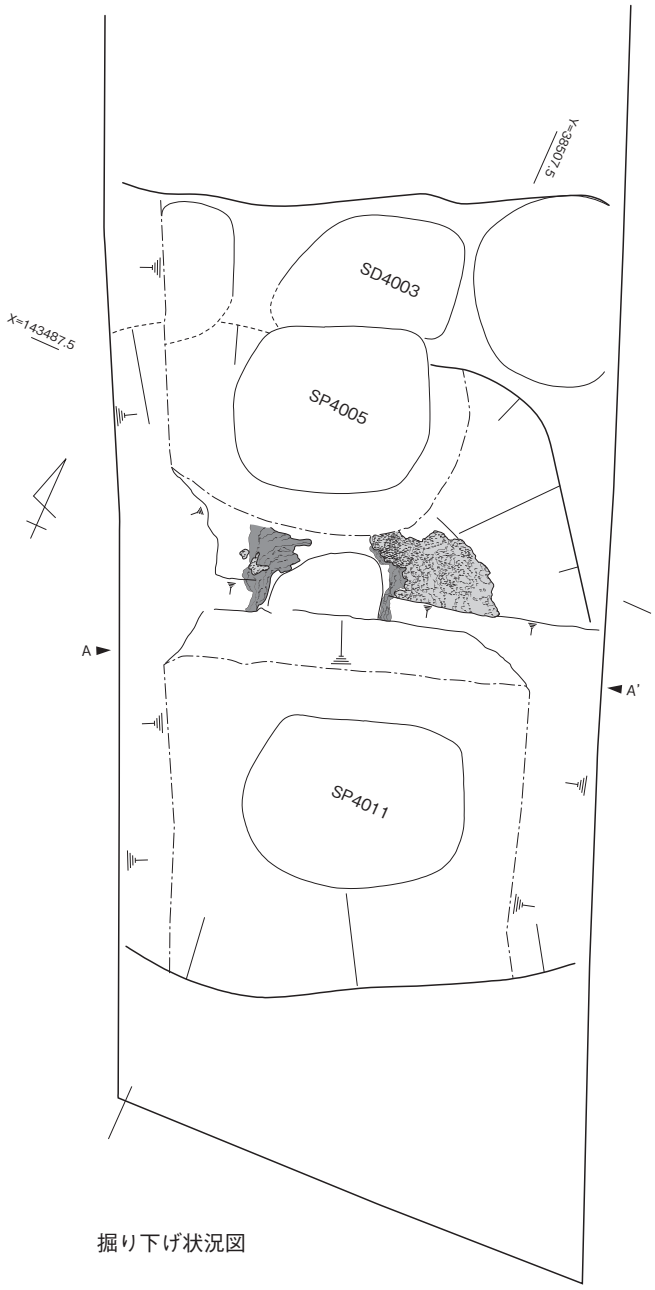
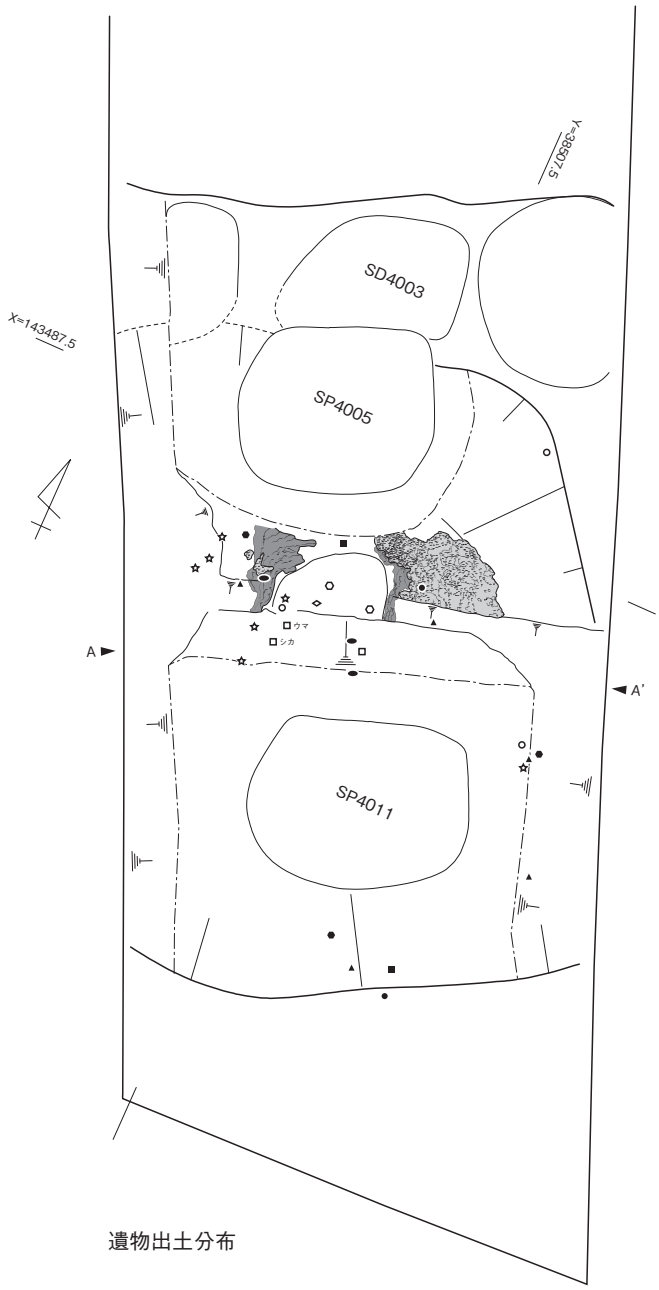


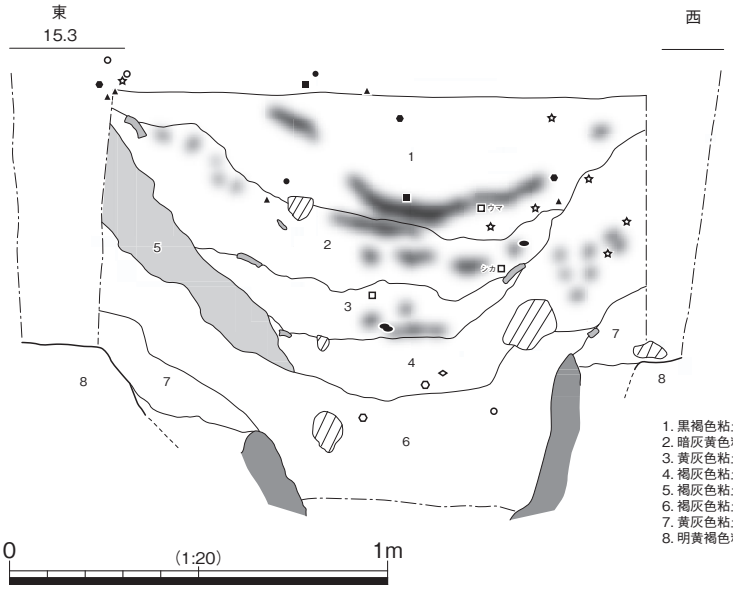
図 149　30-1Tr・SB2004 平面図及び出土遺物

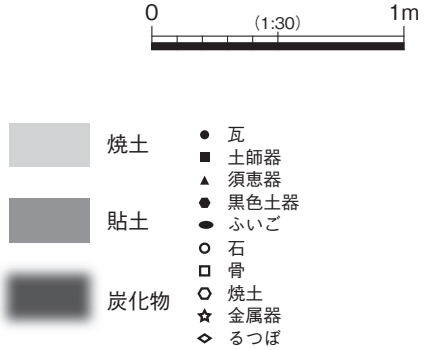


掘り下げ状況図



遺物出土分布





1. 黒褐色粘土 (焼土塊･炭化物をやや多く、黄褐色粘土ブロックを少量含む)　上層
2. 暗灰黄色粘土 (焼土塊･炭化物をやや多く、黄褐色粘土ブロックを少量含む)　上層
3. 黄灰色粘土 (焼土塊･炭化物をやや多く、黄褐色粘土ブロックを少量含む)　中層
4. 褐灰色粘土 (焼土塊をやや多く、炭化物を少量含む)　中層
5. 褐灰色粘土ブロック (焼土塊集中)　中層
6. 褐灰色粘土　中層下位
7. 黄灰色粘土 (炭化物をやや多く含む) 下層
8. 明黄褐色粘土　基盤層　最下層

図 150　32-4Tr・SK4002 焼土検出状況

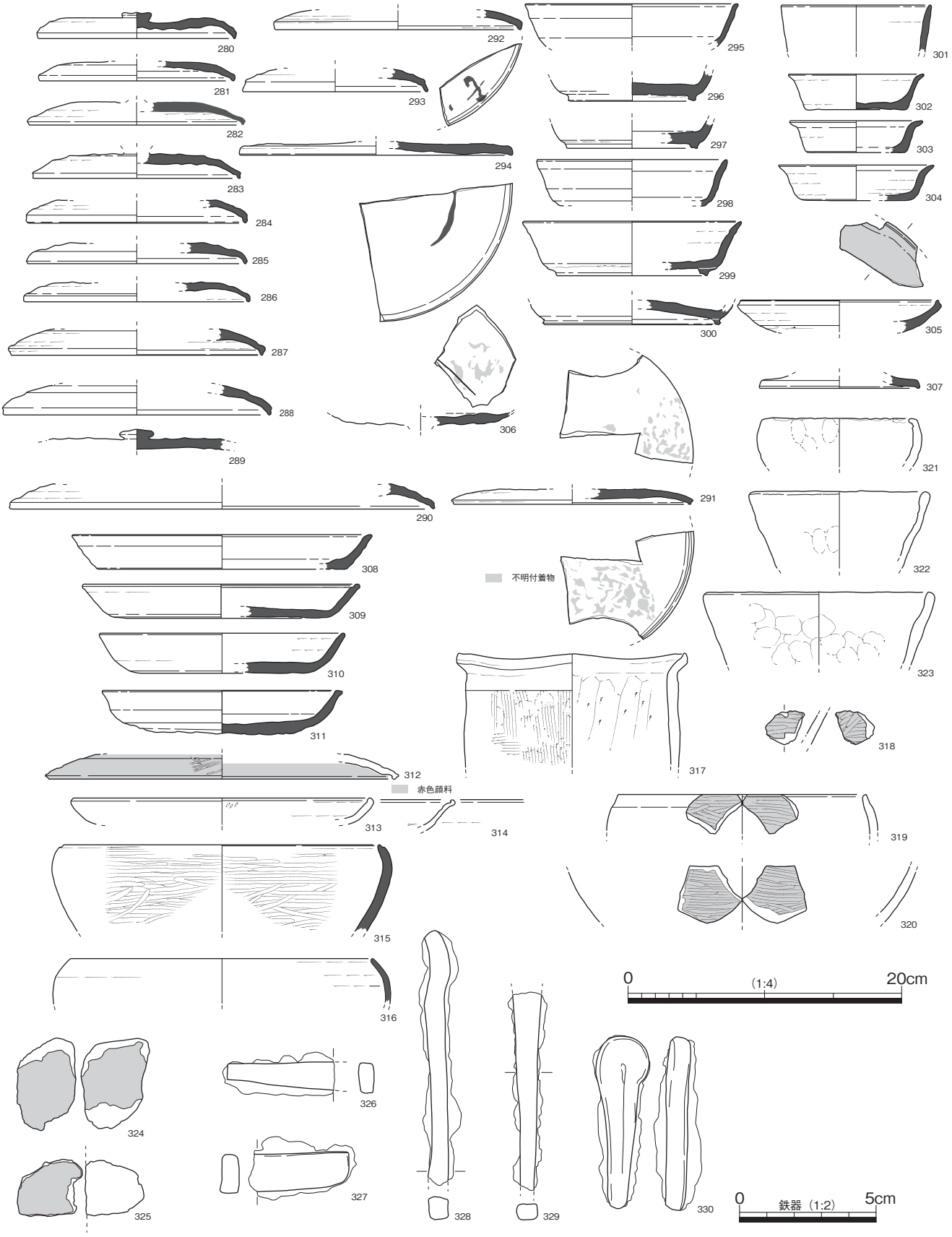


図 151　32-4Tr・SK4002 上層出土遺物

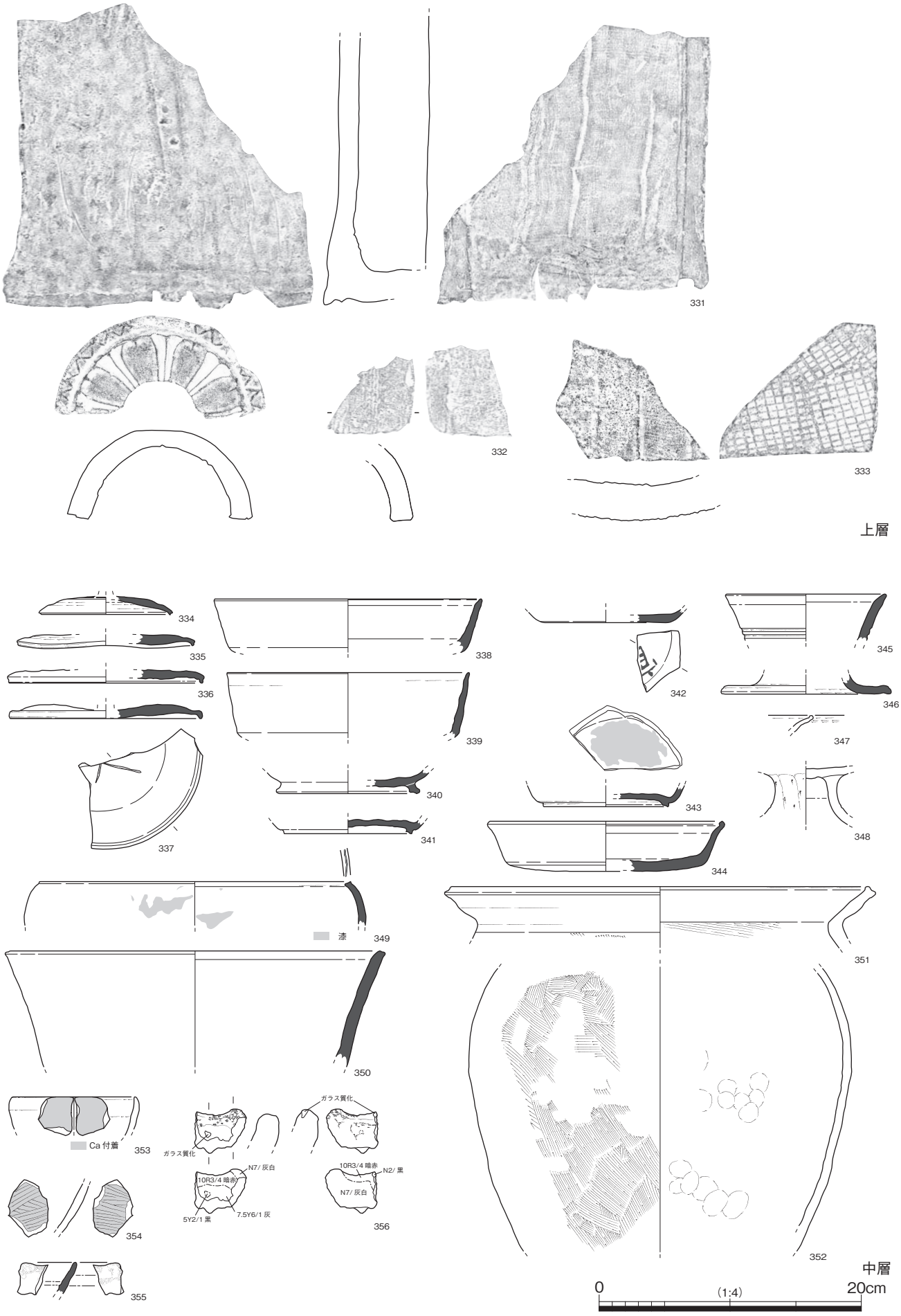


図 152　32-4Tr・SK4002 上層 . 中層出土遺物

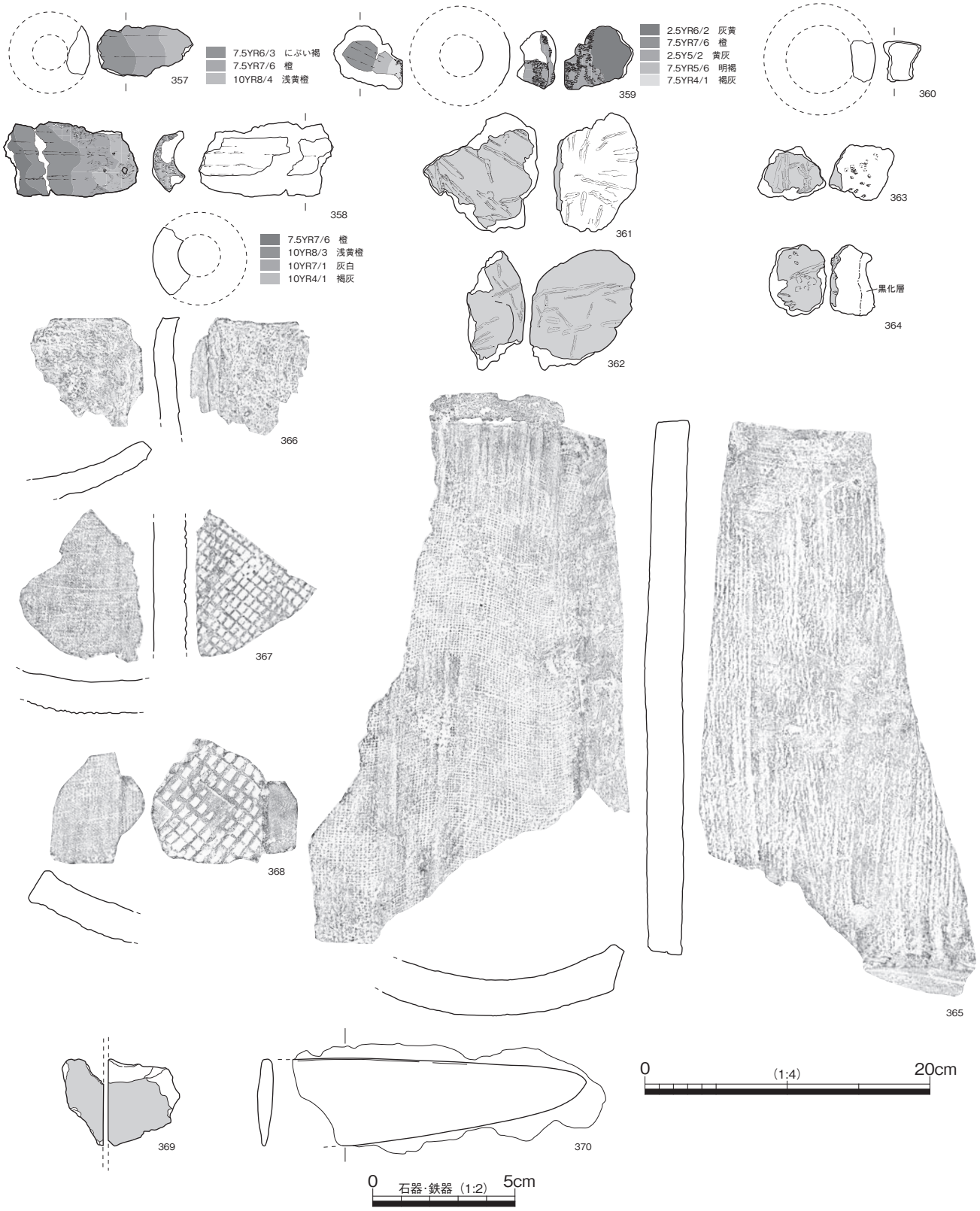


図 153　32-4Tr・SK4002 中層出土遺物

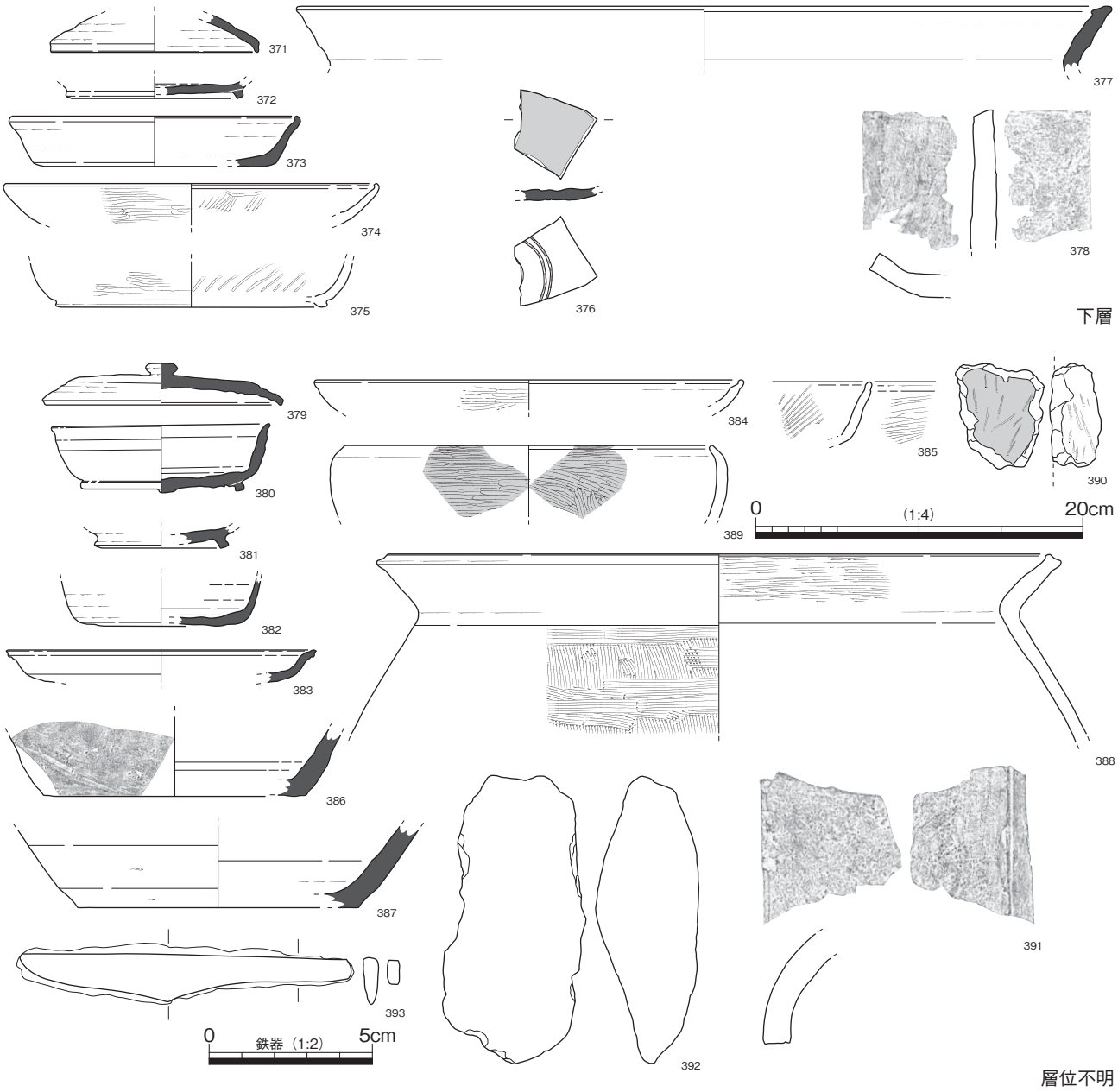


図 154　32-4Tr・SK4002 下層 . 層位不明出土遺物

SD4003（図 155 ～ 159）

34-4 トレンチ中央部で検出した東西溝であり、SK4002 を切り、SB2004 に切られる。上面幅 1.1 m、深さ 0.4 mの規模を測り、中位以下は土坑が連結した状況を呈する。埋没土には焼土・炭化物、黄灰色シルトの偽礫を多く含むもので、廃絶に際しては一括して埋め戻されたと考えられる。

また、以上の特徴や検出位置から判断して、30 次調査 30-1Tr・SD1002 の東側への延長部と考えられる。

394 ～ 400 は上層、401 ～ 403 は下層、404 ～ 409 は層位不明の出土遺物である。408 は焼塩土器、409 は滑石製の臼玉である。

これらの出土遺物の年代観や SK4002 との切り合い関係からみて、本遺構は 8 世紀後葉から 9 世紀前葉に機能したと考えられる。

SD4009（図 155 ～ 159）

32-4 トレンチ中央部で検出した東西溝であり、SD4004 に切られる。掘り込みは 3 層下面より行われ、上面幅 0.8 ～ 0.9 m、深さ 0.2 mを測る。断面形は逆台形である。

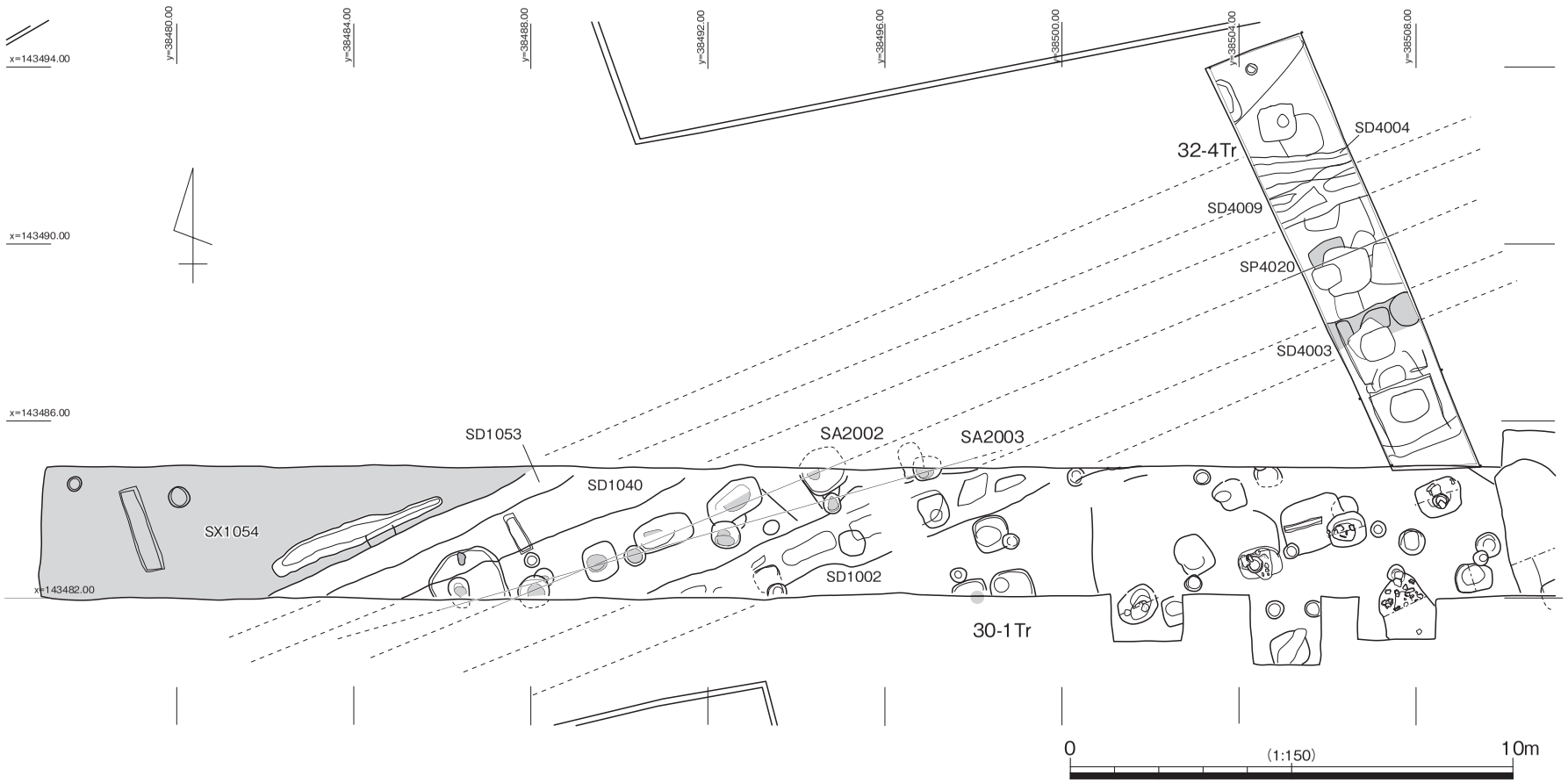


図 155　32-4Tr・SD4003.4009 ほか平面図

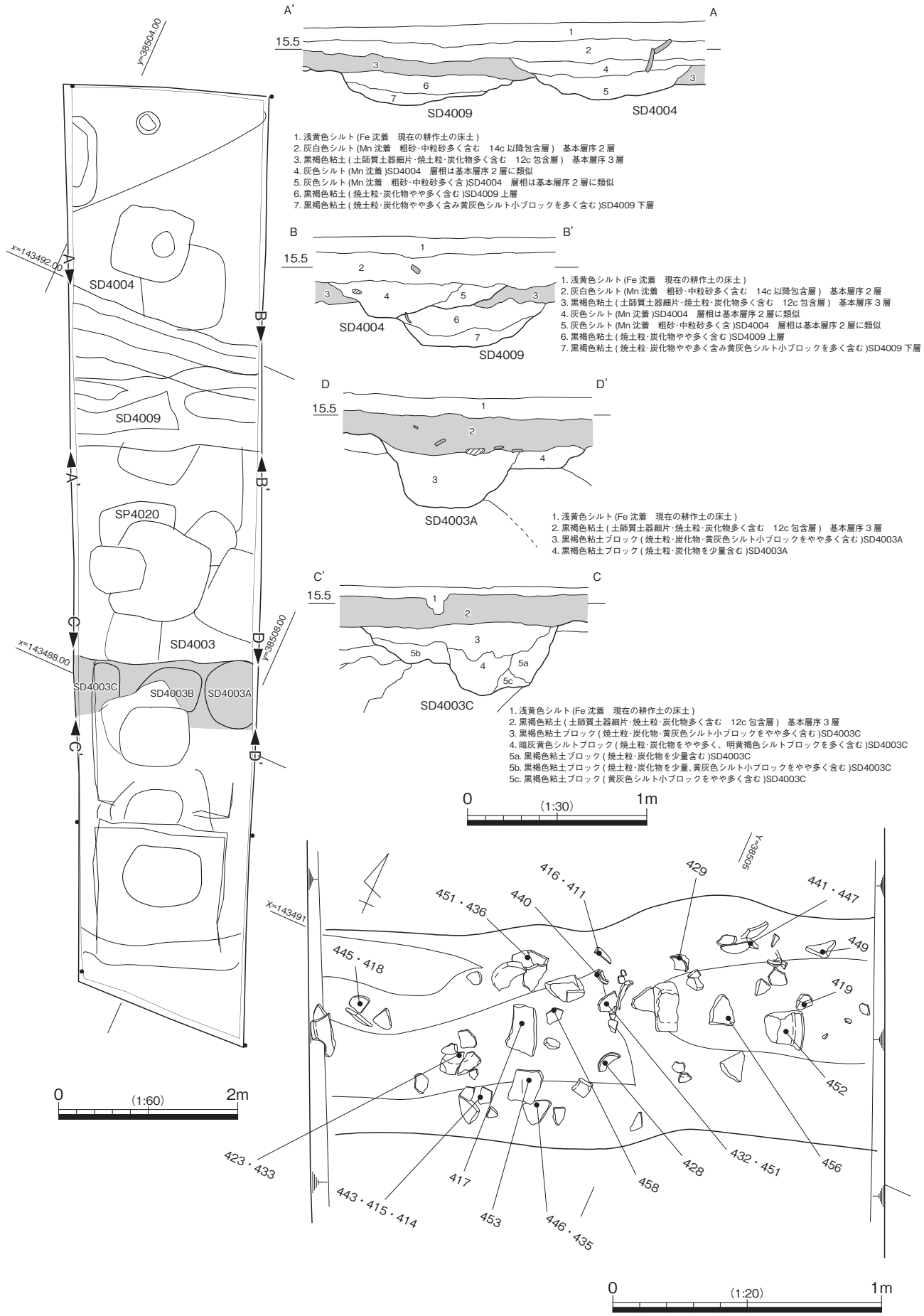


図 156　32-4Tr・SD4003.4009 ほか断面図及び遺物出土状況

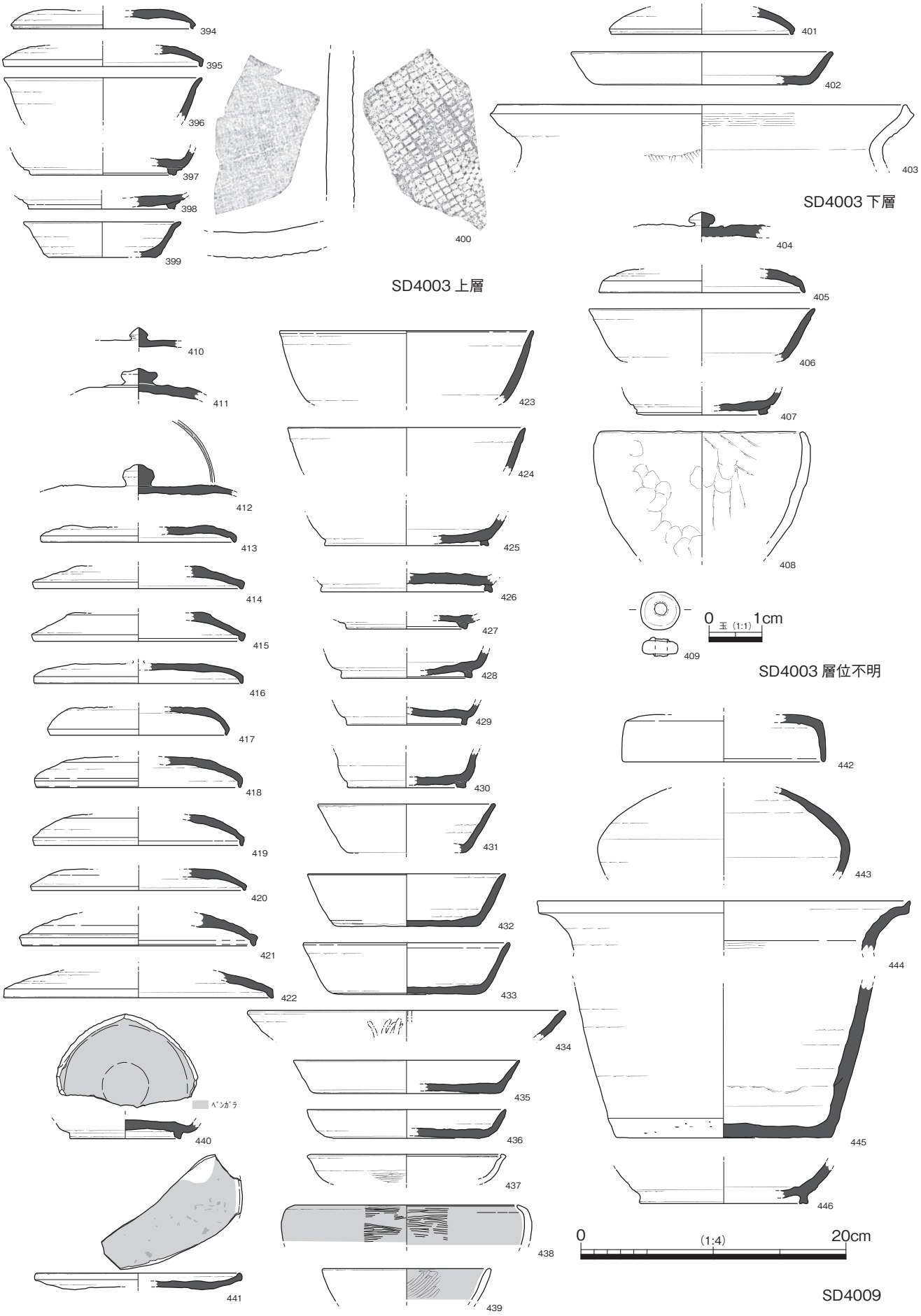


図 157　32-4Tr・SD4003.4009 ほか出土遺物 1

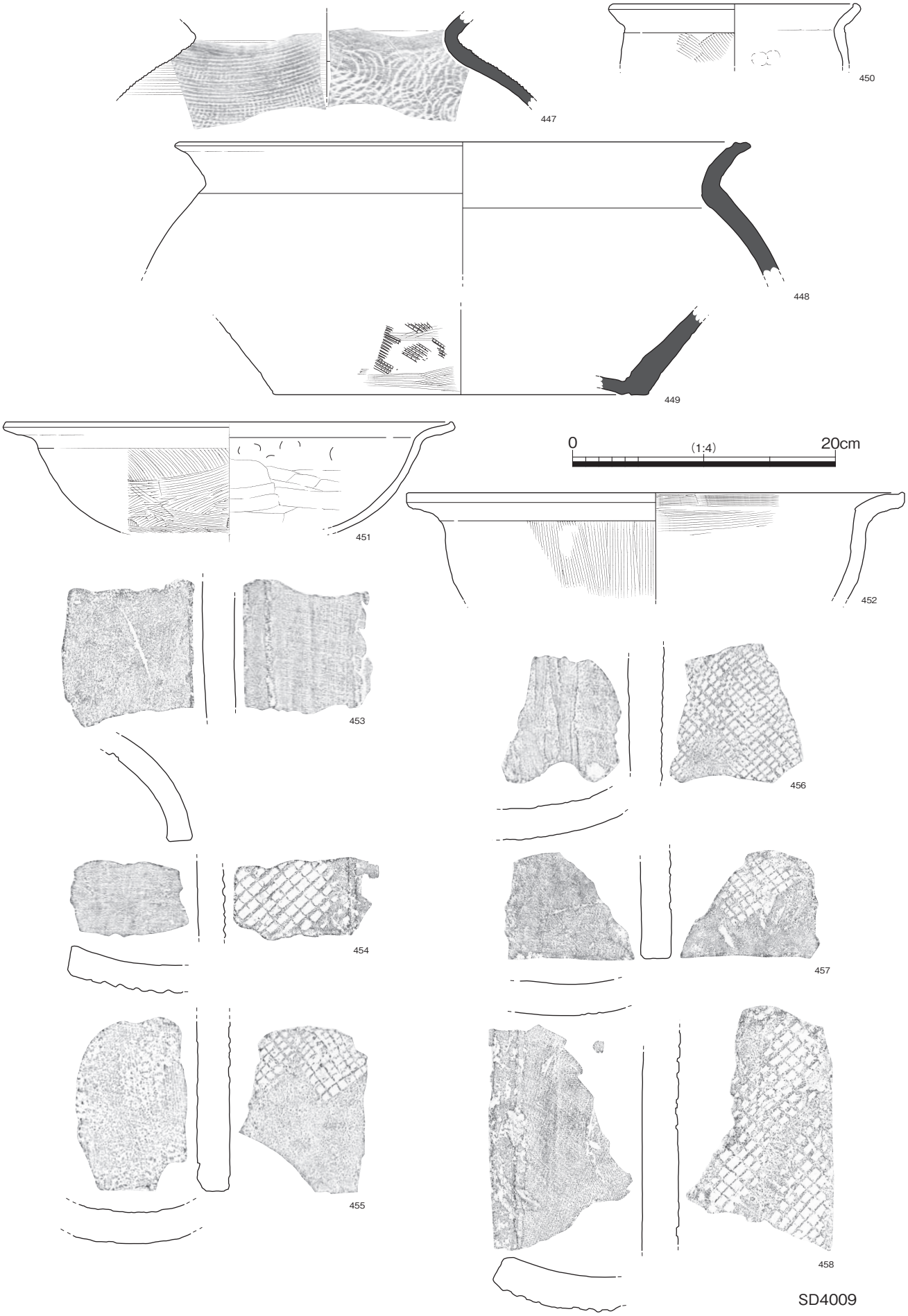


図 158　32-4Tr・SD4003.4009 ほか出土遺物 2

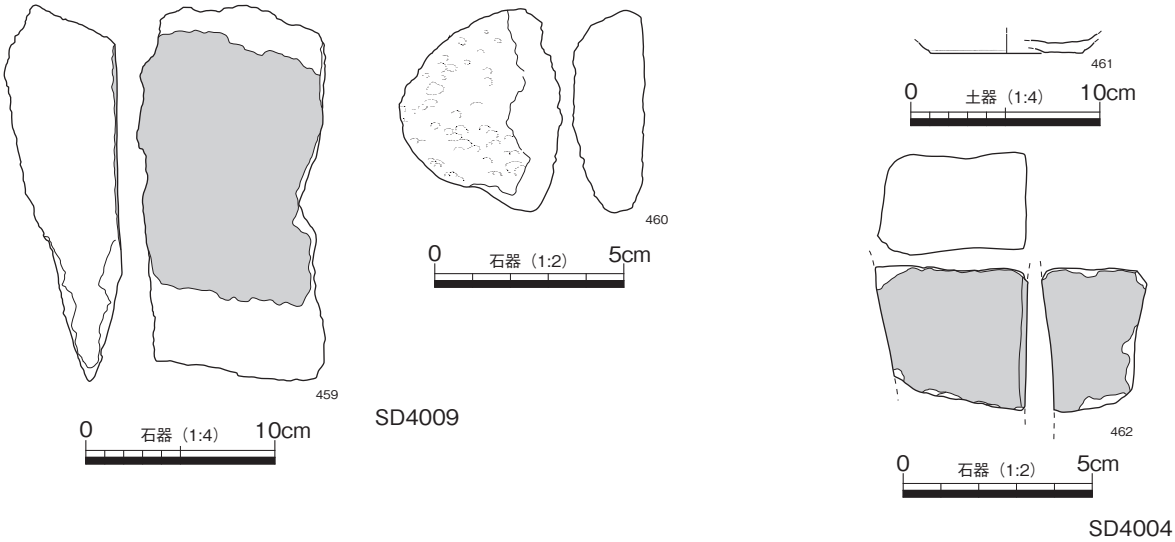


図 159　32-4Tr・SD4003.4009 ほか出土遺物 3

埋没土は炭化物・焼土粒をやや多く含む黒褐色粘土の２層に大別され、下層には黄灰色シルトの偽礫を多く含んでいる。層相から判断して、廃絶時には一括して埋め戻された可能性が高い。

検出位置から判断して、30 次調査 30-1Tr・SD1040 に対応するものと判断される。

410 ～ 460 は出土遺物である。遺物は上・下層の層界付近より集中して出土した。須恵器蓋（412）の外面には１条沈線が確認できる。440 は須恵器杯の内面を利用した転用硯であり、極度の磨滅と朱墨とみられる付着物が確認できる。441 は須恵器蓋の内面を利用した転用硯。438 は両黒の黒色土器鉢である。439 は内黒の黒色土器杯。459 は板状の安山岩片であり、砥石のように顕著ではないが、一面に弱い磨滅痕が確認できる。460 は軽石である。

以上の出土遺物からみて、本溝は９世紀前葉に廃絶したと考えられる。

SD4004（図 155.156.159）

32-4 トレンチ北部で検出した東西溝であり、基本層序３層上面から開削され、SD4009 を切り込む。上面幅１ｍ、深さ 0.2 ｍを測り、断面形は逆台形を呈する。埋没土は、灰色系シルトを中心とし、層内に粗砂を多く交えている。

出土遺物は土師質土器の小片（461）、花崗岩製砥石（462）がみられるが、時期決定に至らない。３層上面から穿たれることから、10 から 11 世紀の開削が想定できる。

また、９世紀前葉の SD4009 を切ることや検出位置を考慮すると、30 次調査 30-1Tr・SD1053 に対応すると考えられることから、本溝は 10 世紀前葉から中葉の時間幅の中で機能・廃絶したものと考える。

（6）検出遺構・出土遺物（32-5.6 トレンチ）

SD6007（図 160）

32-6 トレンチで検出した溝である。上面幅 0.5 m、深さ 0.4 mの規模を測り、U字形の断面をもっている。埋没土は黒灰色粘土を基調とし、部分的に黄褐色粘土の偽礫を含み、流水痕跡は確認できない。

32-6 トレンチを南東から北東方向へ横断し、北西延長部となる 29 次調査 29-3 トレンチにおける SD3061 に接続すると考えられる。南東延長部に相当する 32-5 トレンチでは、後世の削平を受けているため、検出されていない。

出土遺物はみられなかったが、29 次調査 29-3 トレンチにおいて正方位の柱穴に切られることなどから判断して、７世紀中葉以前の所産と推定しておきたい。

SX2001.SX5001（図 116-1.2.118.161）

32-2 トレンチ東部で検出した落ち込みである。トレンチ西部においては、現代の耕作土直下で古代以降の基盤層である灰黄色粘土が露出するが、中央部から東側へ向かって基盤層が緩やかに下降していき、途中において急激に落ち込む。トレンチ東壁では、現地表面から 3.8 m下で基盤層の灰色砂礫を確認している。微高地１の斜面部の状況を示すものと考えられるが、途中の急激な落ち込みは、傾斜角や形状から判断して、人的改変を受けている可能性は否定できない。

埋没土は、大別して３つに区分できる。上層は３ａ・ｂ・ｃ層とする焼土・炭化物を多く含む黒褐色系粘土、中層

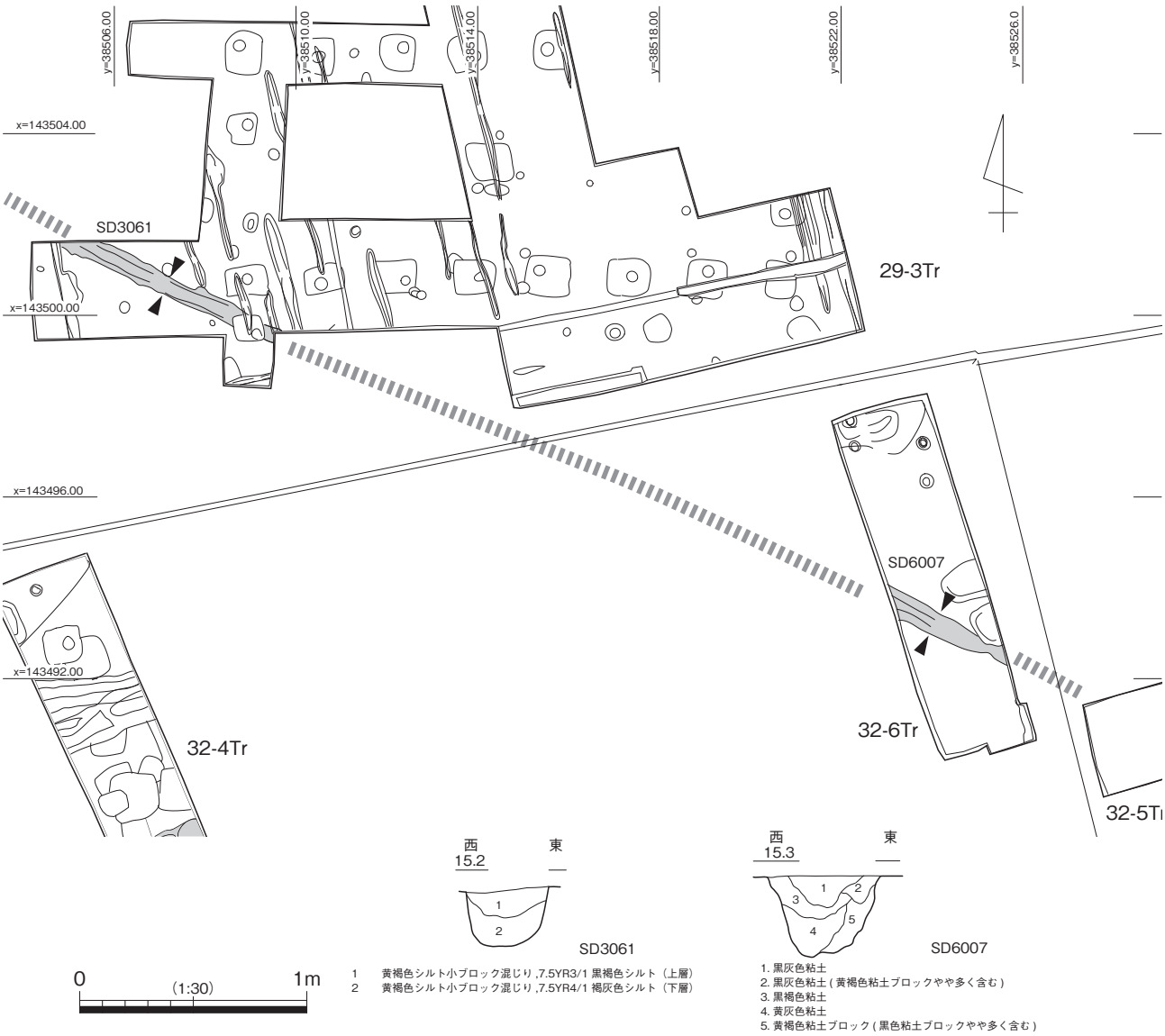


図 160　32-6Tr・SD6007 平断面図

は灰黄色粘土の細かな偽礫を多く含む灰色系シルト～粘土、下層は細かなラミナが認められる黒灰色系粘土に区分される。これらのうち、３層は 32-1 トレンチ２層、32-3 トレンチ３層に層序対比されるものである。

下層は層相から判断して、自然堆積の湿地性堆積物と考えられる。489 ～ 490 は下層からの出土遺物である。土師器甕（489）は７世紀前葉から中葉の資料。486 は美濃産の灰釉陶器椀であり、10 世紀に帰属すると考えられる。土師質土器（487. 488）は、10 世紀前葉から中葉の資料と考えられる。これらの遺物より、下層は７世紀前葉から 10 世紀の時間幅の中で順次埋積したと考える。

中層は、灰黄色粘土の細かな偽礫を多く含み、層内にラミナが確認できない。偽礫は、規則性をもたず層内全域に含まれていることから、微高地斜面の流入によるものと解釈できない。灰黄色粘土は微高地１の基盤層を起源とする

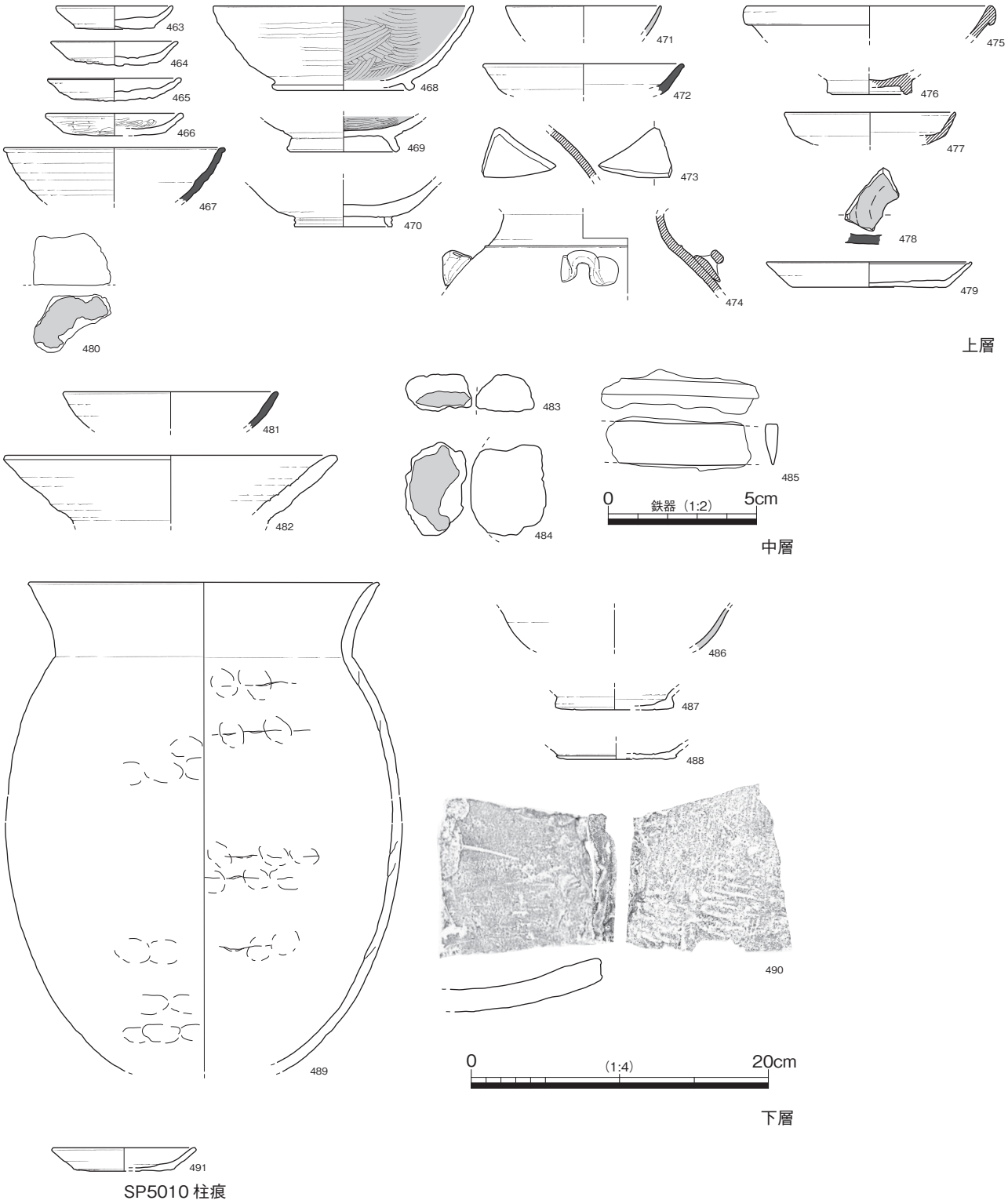


図 161　32-2・5Tr・SX2001.SX5001 ほか出土遺物

と考えられることから、同微高地上面の削平土を利用した整地土と考えられる。481 ～ 485 は中層出土遺物である。須恵器杯（481）は 10 世紀の資料。土師質土器台付杯（482）は 10 世紀後葉から 11 世紀前葉と考えられる。483・484 は白色凝灰岩片である。鉄器片（485）は刃部が確認されるため、刀子の身部片と考えられる。出土遺物は少量にとどまるが、土師質土器台付杯（482）の年代観より、中層とした整地は 10 世紀後葉から 11 世紀前葉に行われたと考えたい。

上層とする黒褐色粘土は、焼土や炭化物、偽礫の貫入状況から３つに細分できる。層相から判断して、自然堆積層とは考えられない。微高地１上面の 32- １トレンチの２層、32-3 トレンチの３層に類似することからみて、微高地１上面の削平土を起源とする整地土と考えられる。463 ～ 480 は上層出土資料である。471 は緑釉陶器小椀であり、防長（長門）産の９世紀中葉から後葉の資料と考えられる。多くの資料は、12 世紀から 13 世紀と考えられる。472 は山茶碗であり、11 世紀の資料と考えられる。473・474 は褐釉陶器四耳壺であり、13 世紀の資料と考えられる。478 は須恵器蓋の内面を利用した転用硯である。これらの出土遺物や中層の年代観より、上層とする整地は、12 世紀から 13 世紀に時間幅の中で行われたと考えておきたい。

SX1130（図 162.163）

32-1 トレンチ南部で検出した性格不明遺構である。長さ 0.8 m、幅 0.2 m、深さ 0.2 m測る小溝内に、丸瓦・平瓦が組まれている。丸瓦（249. 250）は下位に凹面を上に縦位で並べ、その上に平瓦（253）を伏せ置く。丸瓦（251）は南北２か所に分かれ、丸瓦（249. 250）と離れた箇所から出土したものが接合した。

丸瓦（249. 250）、平瓦（253）のある中央の状態は、暗渠としての機能が想定されるが、全体として一体感にかける配置となっている。

本遺構の機能は不明とせざるを得ない。

（7）小結

本次調査では、32- １Tr・SB2011 を中心とした建物や、32-4Tr・SD4003. 4009 等の微高地１の建物群を区分する溝を検出するなど、大きな成果が得られた。建物は、32-1Tr・SB2008、32-2Tr・SB2014 等の真北を基準とした７世紀後葉から８世紀初頭に帰属するものと、SB2011 等の条里地割の方位をもつ８世紀から 11 世紀のものがある。SB2011 は柱間からみて大型建物と考えられるが、規模や主軸方位については今後の調査で明らかにされる点が多い。東西方向の柱列である SA2009. 2010. 2011 は、建物に伴うものどうかの確定ができなかったが、９世紀から 11 世紀の時間幅で地点を踏襲しながら建替えられた可能性を指摘できる。

32-4Tr・SD4003. 4009 は、30 次調査 30-1Tr・SD1002. 1040 の東側延長部と考えられる。検出位置からみて、微高地１北部を東西方向に延び、建物群などを区分する機能が推定できる。32-2・3 トレンチにおいてこれに対応する南北方向の溝の検出を目指したが、後世の削平の影響もあり、明確にすることはできなかったが、32-2 トレンチ東部において微高地１の東限を示す落ち込みを確認した点は大きい。微高地１の建物群の広がりを推定する資料となろう。

８世紀中葉に廃絶した井戸と考えられる 32-4Tr・SK4002 の埋め戻し土には、坩堝片・鞴羽口などが含まれ、周辺に工房の存在が示唆された。操業期間や規模等は不明な点が多いが、微高地１における当該期建物群の性格を示す資料として重要である。今後は、周囲の同時併存する建物等の検討を進める必要があろう。

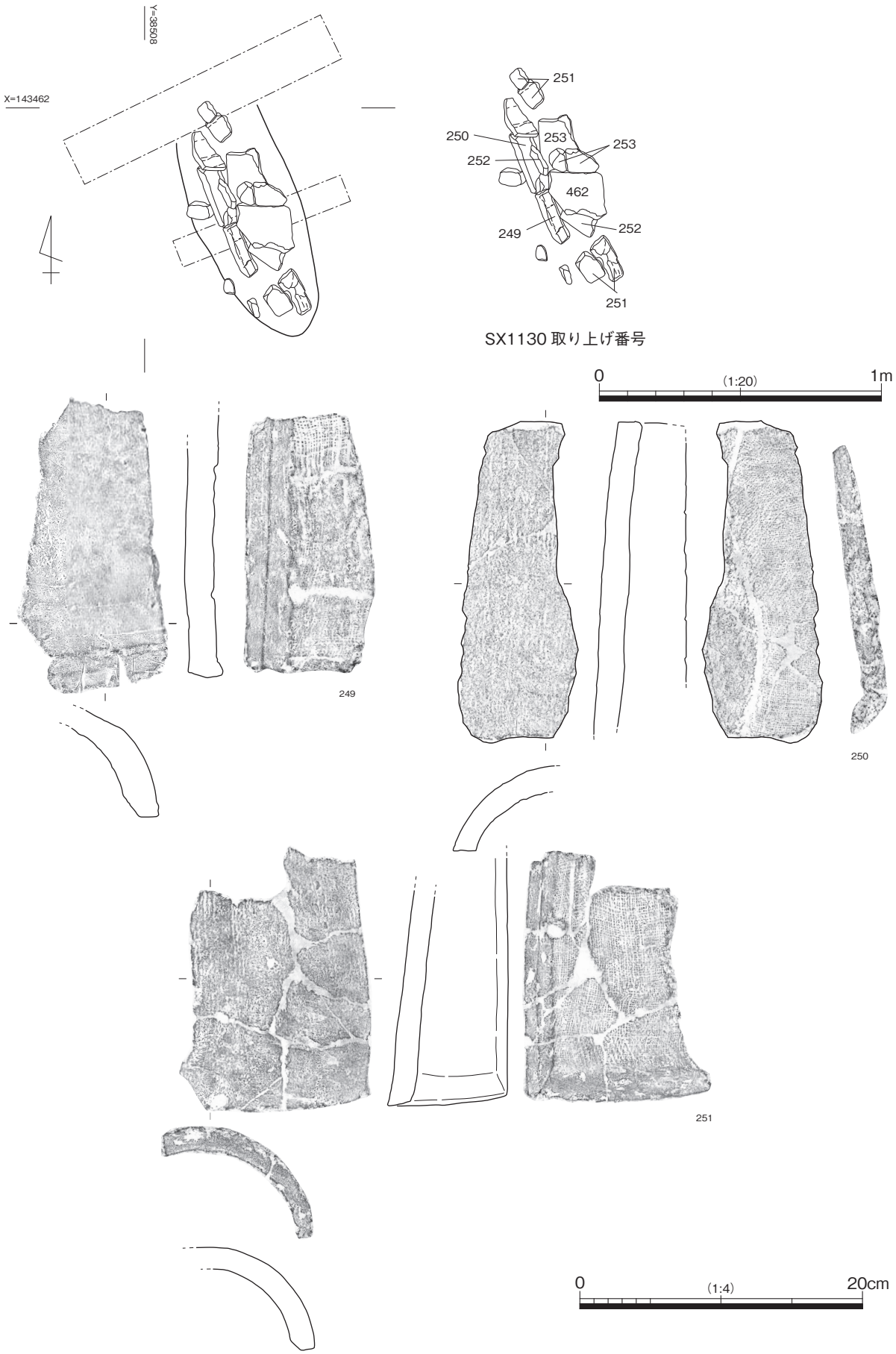


図 162　32-1Tr・SX1130 遺物出土状況及び出土遺物

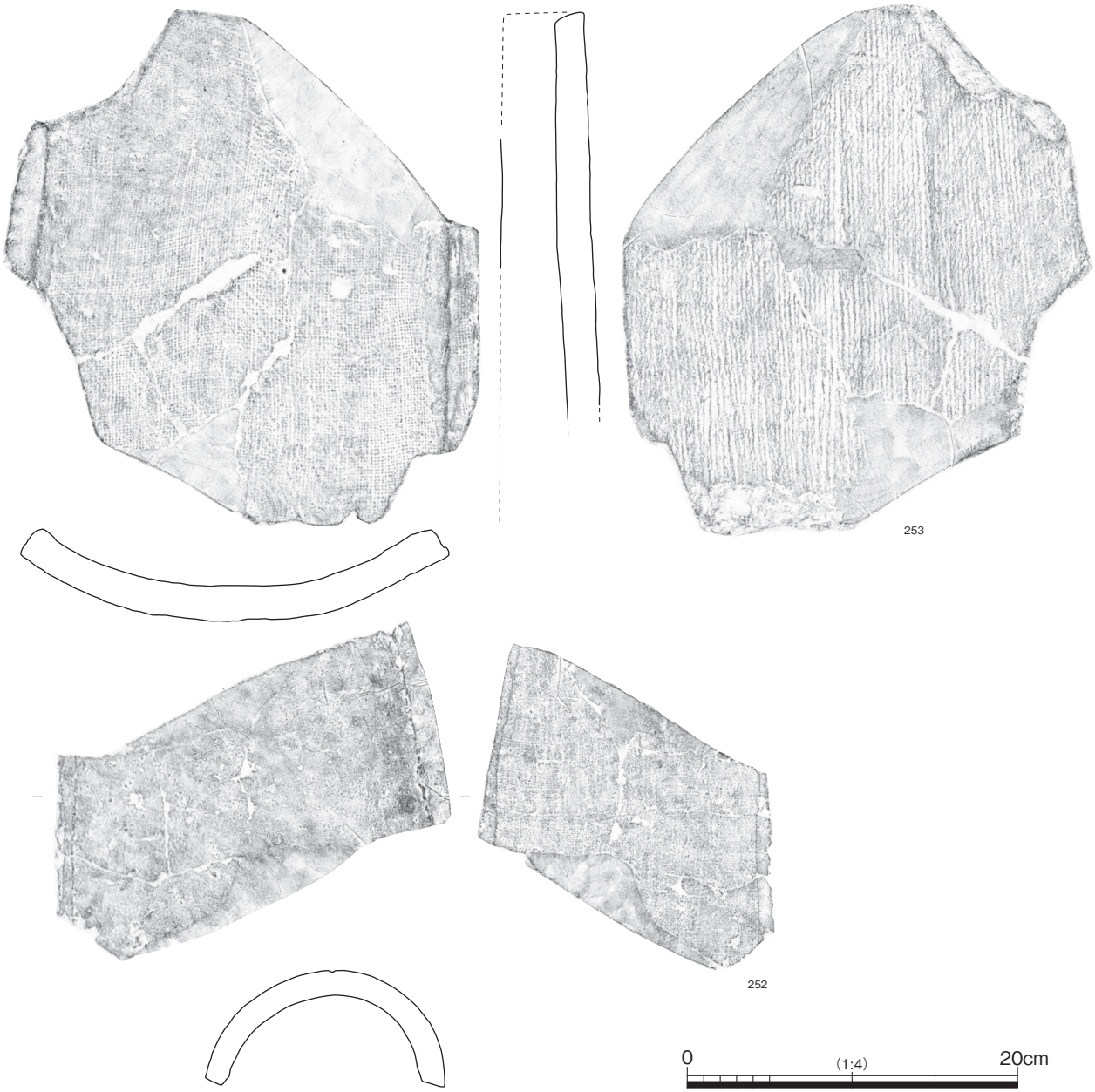


図 163　32-1Tr・SX1130 出土遺物